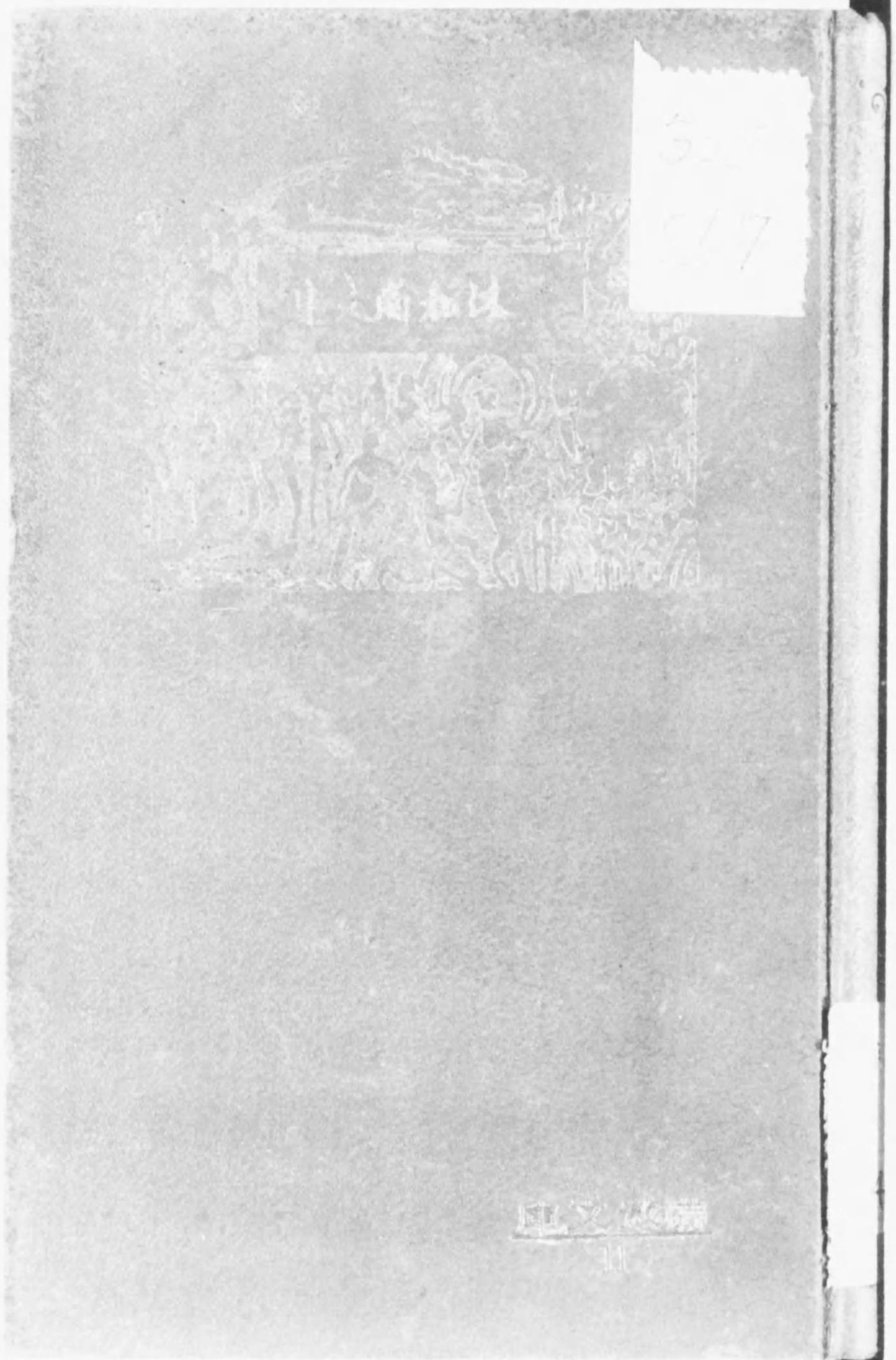
335
267

始



特263
421

佛教文庫
11

一休和尚文集

一休禪師著

東方書院發行

昭和大学図書

摩訶般若波羅蜜多心經

是は天竺のことばなり、摩訶とは大といふこゝろなり。大といふ心をしらんとならば、先づわが小さきこゝろをつくすべし。小心とは妄想分別なり。妄想分別あるがゆゑに我と人とのへだてをなし、佛と衆生のへだてをなし、有無をへだてゝ迷悟をわかち是非善惡の隔あり、之を小心といふなり。この心を盡せばわれ人のへだても佛と衆生の隔てもなくして、有無の心もまよひといふこともさとりといふことも、皆平等にしてさらにへだてあることをしらず、これを大心といふなり。此の意は虚空のかぎりなきがごとし。是れ則ち一切衆生のわれ〳〵の上に、元來そなはりたる本性なり。しかれども凡夫は妄想分別の小さきこゝろにおほはれて此の大心を見ることをしらず、色々わけへだての心あるゆゑに有無の二つにまよひ生死のふたつに隔てられ、いろ〳〵の顚倒迷妄するなり。○般若とは智慧といへる義なり。このはんにやの智慧とは凡夫の思へる分別才覺ありて小ざかしきをいふにあらず。この分別才覺は世間の智慧なれば小智は大智にあらずして、世智辨聰とて佛道に入ることをしらず。さるによつて小智は菩提のさまたげといへるも此の

心をもつていふなり。眞實般若の智慧といふは妄想分別をはなれて大虛空の如くなるをいふなり。三世の諸佛その外もろ〳〵の知識たちも皆この智慧をもつて、無上菩提をさとりたまふなり。無上菩提は分別妄想の及ばざる處なり。去るほどにこの般若の智は生死の苦界をわたる船にたとへたるなり。○波羅蜜多とは彼岸にいたるといふ心なり。彼岸とはかの岸とよめり。凡夫はまよへるゆゑに生死苦界をわたることをしらず、生死流轉するを此の岸といふなり。此の岸とはこの岸とよめり。佛ぼさつは般若の智慧によつて一切の諸法はみな空にして、元より生じもせず、滅しもせずといふ道理をさとつて、はんにやの船にのりて生死のくかいをわたり過ぎて、不生不滅のねはんの岸にいたるを彼岸とはいふなり。則ちねはんは生ぜず滅せずといふ義なり。こゝにいたるを極樂といふなり。おほよそ人間の種々無量の苦をうくる事は生死のふたつに因てなり。生を願ふては樂を好み死をいとひては苦をうくる。たのしみを求めてもあたはざれば樂もくるしみとなる。さるほどに、般若の智慧をもつて、自心はもとより空にして生ぜず滅せず、ひつきやうなりと悟れば生死をいとふべきこともなく、樂もなく之を眞の極樂といふなり。こゝにいたるを彼岸にいたるといふなり。至るといへば田舍より京へのぼるやうのことにあらず、一念生ぜざれば其の立處すなはち西方極樂なり。あるひは日心の外に極樂をもとめなば、いよ〳〵遠く十萬億土をへだてゝ終にいたることあたはず。自心すなはち佛たることをさとれば阿彌陀をねがふに及

ばず自心の外に淨土なし。かくいふとも求むべからず。自惑をもつて自心をもとむる道理なきによつてなり。たとへば我が目にてわが目を見ざるが如し。たとへば寶を手に持ちながらうしなへりとおもふは迷ふが故なり。自心元來ほとけなるを外にたづね、あるひは自心の上に於てもとむるは、失はざる寶をうしなへりとおもふが如し。たゞ尋ねずもとめず、捨てず取らざればおのづから佛のこゝろにかなふなり。○心經とはすなはちはんにやの心なり。此の般若の心は一切の衆生もとよりそなはりたる心なり。愚痴無明のくらきにもくらまされず、煩惱妄想のけがれにもそまず、元より生ぜず滅せず、故に生死に流轉をもうけず、有にあらず無にあらず、中道にも止まらず、本來空寂にして取ることもあたはず、詞にもいひがたく、心をもつて量りがたし。一切の相をはなれたり。釋尊一代の間、色々にとき給へども、終にとき盡すこと能はず神妙ふしぎなるもの。○經とは詞にあらはし、文字に書きうつしたるを心經といふにあらず。此の經は則ち自心をさしていふなり。文字に書きたるは文字般若なり。自心をはなれて外に文字にて書きたる經をもとめなば、是れ則ち愚痴の心なり。はんにやの智慧にそむくなり。念々皆般若經なり。たゞ口にとくばかりにてこゝろはんにやならねば、隣のたからをかぞへるがごとし。佛この經をとき給ふことは、はんにや本覺の智慧をもつて、一切の衆生をして妄心妄念を除き正さしめて、生死大海のこの岸をわかれて、不生不滅のねはんの彼岸にいたらしめて、衆生をして本心本

性を見せしめんがためなり。此の故に般若波羅蜜多心經と名づくるなり。

月清　この法はうけてたもてる玉なれば永きよてらす寶なりけり

新拾　心をばこゝろの底に納めおきて塵もうごかぬ床の上かな

猶題　浮世わたる法のうきゝを尋ぬればしるしも深き元にぞ有りける

續拾　里わかずながむる人の袖ごとにかげもをしまぬ山の端の月

拾題　なべて皆むなしとゝける法なくばまよひ悟を分てこそ見め

新千　そのまゝの心の外に言の葉もなきこそ法のしるしなりけれ

新後選　言の葉も及ばぬ法のまことをば心よりこそつたへそめしか

神慶　ことの葉もおよばぬ法の道芝を心の外は誰れにとはまし

續千　世にたゝず法のしるしを傳へきて普くてらす日の本のくに

夫木　しづかなる光の都たづぬれば胸のはちすの月ぞすみけり

拾玉　おほかたのむなしき空にあればこそ何もさながら其中にすめ

新古　にごりなき龜井の水を結び上て心の塵をすゝぎつるかな

古今　いづくにか世をばいとはん心こそ野にも山にも迷ふべら也

新拾　三界をひとつこゝろとしりぬれば十の境こそ直に道なれ

後京極攝政
同
參議雅經
同
師　兼
大僧正忠性
見性法師
頓阿法師
法皇御製
爲　家
慈　鎮
上東門院
素性法師
慈覺大師

觀自在菩薩。

是れ則ちこのはんにやを修行する菩薩なり。般若の智慧を以て、自心のもとを清淨にして煩惱のけがれをうけず。不生不滅、不去不來、空なることを觀念して一切のものにさはらず自由自在なり。たとへば、萬物の虛空の中にあれども虛空をさへぎらざるが如し、菩薩とはさとれる衆生といふ心なり。去るほどに、心なければ人々みな觀自在なり。外を求むべからず。

行深般若波羅蜜多時。

行とは修行することなり。深般若とはふかき智慧なり。世間よの常のあさき有漏の智慧にはあらず、眞實出世無漏の智なり。漏とは煩惱をいふなり。有漏とは煩惱ありといふ義。無漏とは煩惱なしといふ心なり。有漏の智は妄想分別なれば世間のうちを出でず、無漏の智は煩惱妄想をはなれて三界を出離する智慧なれば出世無漏の智といふなり。則ちこの般若の眞空實相のことなり。波羅蜜多とはひがんにいたるといふ義なり。則ち此のぼさつの修行する法をいふなり。又時とはこの菩薩の般若を修行する時なり。修行するといへばとて修行仕つくし、すべきことのなき所にいたり得たるを般若の修行とはいふなり。はんにやはひつきやう空なるがゆゑなり。此の空の上に修行すべき道理なし。修行すべき事のなき處にいたり得るを修行とはするなり。

是は僧俗のへだてなく、士農工商ともに業體とすべき道を修行なし盡し、其の身の職分なに一つ

くらからぬ所にいたりぬるを示し給ふなり。萬法出離の修行とは實に佛ぼさつの上ならでは成し得がたしといへども、銘々受けもちたる一業を修行しつくし、その道にくらからずば人たるべきなり。時とは、何業にもせよ學び得べき時あればなり。其の習ひまなぶべき時を等閑に年老て後悔ずる事かず多し。わかきといふとも時ありとしりたるを一業の智見といふべし。

照見五蘊皆空。

照見とはてらし見るなり。觀念の心なり。○五蘊とは五つをつゝみあつむる心なり。五つとは一つには色なり、地水火風のかりに和合したる色かたちある身をいふなり。二つには受なり、うくるとよむ。苦樂をうくるをいふなり。三つには想なり、おもふとよむ。深く思ひたづぬるをいふなり。四つには行なり、おこなふとよむ。五つには識なり、いろ〳〵の分別をなすものなり。受と想と行との三つもこの識の分別よりおこるなり。この五蘊は畢竟色心が身の二法なり。色とは地水火風の四大が假りに和合して色かたちのあれば色法といふなり。受想行識の四つはこゝろになすわざなれば心法なり。五蘊のうちに識といふものが先づ最初に何事につけても分別をおこすなり。たとへば苦樂などの事につけても、これは苦なりこれは樂なりと分別するものは識なり。さて分別によりて樂みを樂なりと心にうけ入り、苦をば苦なりと心にうけ入れおくを受といふなり。さて又其の苦の事をあひついでたえずいろ〳〵におもひたづねてやまぬは想なり。さて又

おもひ尋ねてやまず、終にその苦樂などの事をくはだてゝなすは行なり。其のなすわざの善惡によりて未來に餓鬼畜生などのあしき身にうまれ、あるひは人間天人などの身をうくるは色なり。則ち色身の事なり。五蘊元來自性なく四大無主なれども、衆生は愚痴なるが故にまよひ、眞實に有しうぢやくして此の四大をかり和合の身を我身なりとおもひ、受想行識の四蘊を我が本心なりとおもひ、わが身を愛するゆゑに苦をいとひ樂をねがひて、色々の業を作りて無量の苦を受く。五道六道に輪廻してつひに苦厄まぬかれがたし。しかるにこの觀自在菩薩は、はんにやのふかき智慧をもつて生死の苦界を越て彼岸にいたる法を修行す。時に五蘊本來空にして、四大無我なる事をくわんねんして、もろ〳〵の苦をまぬがれ給ふなり。さて又般若の御法をときて苦界にしづみたる衆生どもをすくひたすけて、生死のこの彼岸にいたらしむるゆゑなり。

度一切苦厄。

といふなり。

拾玉　色ふかく染めはてぬれば立歸り心すずしきあはのはごろも　慈鎧

聖教　世の中に我物とてはなかり鳧身をさへ土にかへすべければ　空也上人

古今　紅葉を風にまかせて見るよりもはてなきものは命なりけり　大江千里

詞苑　此身をば空しき物と知りぬれば罪えんこともあらじとぞ思ふ　讀人不知

舍利子。

是は佛の八萬人の大衆の中にて智慧第一の弟子なり。さるによつて大衆たちの爲めに總の名代に、佛にむかひ、舍利子、法をとひたてまつり答をせらるゝなり。依て佛、色不二の御法をときたまはんとて其の名をよび出してつけ給ふなり。

色不レ異レ空。空不レ異レ色。色卽是空。空卽是色。受想行識。亦復如レ是。

色とは地水火風のかりに和合せる四大色身なり。おほよそかたちの有るものを色といふなり。容あれば、目にそのいろ〳〵見ゆるものゆゑに色といふなり。今この四大色身のかたちあるは、元來空のかたちなきところより生ずる程に、色身は空にことならずといふ義なり。さるほどに此の色身主まことに有る物に似たりといへども、夢の如くにて畢竟空なり。しかるに凡夫はまよひてこの眞空の實相にそむきて、空妄の色身をまことに有るものなりと思ふによりて、生をこのみ死をおそれて、いろ〳〵の苦をうけて生死の輪廻をまぬがれず。故に佛これをあはれみたまひて、此の色身も元來不生不滅の眞空があらはれたる物なれば、色も空にことならずと說き給ふなり。さて此の空といふものも色がめつして空となりたる程に空も色に異ならぬぞ。かくの如くいふも又色と格別なる物を一つになしたるやうにして、へだてがあるに似るあひだ、其の色空の二見をはなれしめんが爲めに、色卽是空、空卽是色なりと說き給ふなり。卽といふはやがてといふ心なり　色

の當體が其のまゝやがて空なり。空の當體がそのまゝ色なり。空をはなれていろなし、色をはなれて空なし。水と波とのごとし。波すなはち水なり。水すなはち波なり。さらに二つあることなし。たゞ一心實ばかり、これは先の五蘊のうちの色蘊の一つをあげて、空にことならずといきたまふなり。さればのこりの受想行識の四蘊も色蘊のごとく、皆空とことならぬといふ義なり。色蘊の一つをもつて殘りの四蘊もしるべし。畢竟皆空なり。

續古　古も今もかはらぬ月かげをくもの上にてながめてしかな　後嵯峨院

同　聞く人もはるかに是を仰げとて空にぞ法をとく聲はせし　法性寺入道

新後撰　色も香もむなしき物とをしへずば有を有とや思ひ果まし　鷹司院

金葉　いろもかも空しと說る法なれど祈るしるしは有と社きけ　攝政左大臣

新古　色にのみ染し心の悔しきをむなしと說るのりのうれしさ　小侍從

詠藻　春の花秋の紅葉のちるをみよ色は空しき物にぞありける　俊成

轉庵　雲晴てみどりに晴る空みれば色こそやがて空しかりけれ　頓阿法師

拾玉　大の原思ひかゝらぬ雲の上もまことの道の宿となりぬる　慈鎭

續拾　春秋のはなもゝみぢもおしなべて空しき色ぞ誠なりけり　大僧正道玄

續千　隈もなき月をうつしてすむ水の色も空にぞかはらざり鳬　瞻西上人

讀古　露わくる花すり衣かへりては空しとみゆる色はありけり
續千載　受がたき身をいたづらになすものは後の世しらぬ心也鳧

信生法師
平政長

舍利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。不增不減。

しやりしとは又聞く人の名をよび出すなり。是れ諸法とは前の色受想行識の五蘊をさしていふなり。前にとく如く四大色身五うんの諸法みな元來空なるほどに、初めより生じもせず死にもせず、穢れもせず淸まりもせず、增しもせずへりもせぬぞ。虛空のかたちなきが如し。ねもごろに空なることを示したまふなり。

是故。空中無ㇾ色。無ニ受想行識。

このこゝろは右の如く、眞空想なしのうへには生滅の道理もなく、けがれもせず、きよまりもせず、增すといふことなし。又減るといふこともなきものなれば、此の故に受想行識の五蘊もみな無ぞ。無といふは空といふ心なり。空とは有無をはなれたるを云ふなり。

無ニ眼耳鼻舌身意。

是は六根をあげてみな空なりと說き給ふなり。六根といふは眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根これなり。みな根の字をつけていふことは艸木の根あるが如し。根あればよく生ずるなり。其のごとく、眼こんはよく識を生ずるものなり。識とは眼にみる時に靑黃赤白黑をよく分るものを

いふなり。此の識といふものがなければ見わくることならぬぞ。さてまた識といふ物が有りても、元根といふものがなければ此の識の生ずることがならぬぞ。たとへば目をふさぎ耳をふさけば、色ありといへども見えず、聲ありといへども聞えず。さるほどに色を見るときは識か元根によつて生ずるなり。聲を聞くときは識が耳根によつて生ずるなり。のこりの鼻こん、舌こん、身こん、意こんもかくの如し。

無ニ色聲香味觸法。

是を六塵といふ義はこの六ぢんも皆空なりと說き給ふなり。六塵といふときはみな塵の字をつけていふぞ。色塵、聲塵、香塵、味塵、觸塵、法塵これなり。塵は、ちりとよめるは物をけがすものなり。眼も耳もいまだ物の色をみず、聲を聞かざる已前は、元來淸淨にして無念無想なるものなれども、色を見、聲をきくによりて、うつくしきものを見てはほしく思ひ、おもしろき聲を聞きてはこゝろをとられ、見ること聞くことにまよひ、貪着のおもひをおこすゆゑに、煩惱の穢にそむをもつて塵といふなり。しかるに、般若の智をもつて皆空なりと觀ずるときは、六根六塵ともに無き物なり。無しといふとても今まで有りつる物をはらひすてて、今よりはじめて無しといふにはあらず。この六ぢんの自體もとより空なるがゆゑになしとはいふなり。

無ニ眼界乃至無意識界。

是は十八界を空ずるなり。まへの六根、六塵を合せて十二處といふなり。此の十二處に六識を加へて、十八界といふなり。六識とは、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識なり。眼に青黄赤白黒の色、大小長短のかたちを分別するを眼識といふなり。耳にはいろ〳〵の音聲を聞きわくるを耳識といふなり。鼻によきにほひ悪きにほひをかぎ分るを鼻識といふ。舌に五味をなめしめるを舌識といふなり。身に暑き寒きをふれて覺え、いたきかゆきを分ちしるを身識といふ。意に一切の是非善悪を種々にふん別するを意識といふなり。十八界といふ心は、物の界かぎりあるを界といふなり。眼は聲をきかず、耳は色を見ず、其の司る所のかくべつなる故に、眼界耳界といふなり。

後拾遺　おのづから法の界にいる人は夫こそやがてさとり也けれ　　法性寺入道

四　種　身こそあらぬ心の塵を外にして浮世の色に染じとぞ思ふ　　微安門院

千　載　月影の常に住なる山の端をへだつる雲のなからましかは　　藤原國房

新　續　このまゝにすまば住むべき山水よ浮世の塵に濁らずも哉　　榮仁親王

雪　玉　一枝の花にほゝゑむ色見せてやがて心にうつしつるかな　　道遙院

古　今　風の上にありか定めぬ塵の身は行衛もしらず成ぬべら也　　讀人不知

無二無明一。亦無二々明盡一。乃至無二老死一。亦無二老死盡一。

是は十二因緣を空ずるなり。十二因緣といふは一つには無明なり。これは本心本性をあきらめずして道理にくらきをもつて迷をおこすをいふなり。一切の煩惱の根元は無明よりはじまるなり。二つには行なり。是は無明のこゝろおこりてより一切善悪の業をつくるをいふなり。三つには識なり。これは妄想妄念をもつて父母に愛着の念をおこしてはじめて母の胎内にやどるをいふなり。四つには名色なり。たいないにやどりて目口鼻手足などのかたちが出來て、受想行識の四蘊のそなはるをいふなり。名色の名とは四蘊のこゝろのわざなれば、目に見えぬものなるあひだ、名をつけてよばざれはあらはれがたし。かるがゆゑに名といふなり。色は目に見るところの眼耳鼻舌身などをいふなり。心法と識法とのふたつをかねて名識といふなり。五つには六入なり。是は心識が眼耳鼻舌身意の六根に行き入つて六根となるなり。六つには觸なり。是は六根と六塵と相對するをいふなり。まなこは色にたいし、耳は聲に對し、鼻は香に對し、舌はあじはひにたいして相觸るゆゑに觸といふなり。七つには受なり。是は善悪の事を心にうけ入るをいふなり。樂を樂とうけ、苦を苦とこゝろにうけ入るをいふなり。八つには愛なり。これは五蘊などのらくを心にうけ入れて、さて、それにあいぢやくの心をおこすをいふなり。九つには執なり。是は愛ぢやくのこゝろによつて深く執着するをいふなり。十には有なり、これは執着の因緣によりて未來の身を受ることあるを有といふなり。十一には生なり。是は前の有の因緣をもつて終に又うまれ來

るをいふなり。十二には老死なり。是は生れてより又やがて年よつて死するをいふなり。是を十二因緣の流轉といふなり。過去の無明の業緣によつて今現在に苦をうくる身とうまれ、又今このげんざいにて作る業緣によりて未來世にて又生をうけ、死してはうまれ、生れては死し、三世の因果たえず、三界に流轉して無量のくるしみをうけて終にやむことなし。是れ皆最初の無明の一念のまよひによつて種々の苦をうくるをいふなり。さるほどに般若の眞空の智を以て、無明はもとより空にして實性あることなし。夢幻のごとくと觀念をなせば、一切煩惱妄想、畢竟みな空にして、いろ〳〵の夢さめたるが如くにして、過去のこゝろも不可得、現在の心も不可得、未來の心も不可得、三世の因果、一念に空じ、六道のりんゑ一時にやむなり。

無二苦集滅道一。

是は四諦を空ずるなり。四諦とは卽ち苦諦、集諦、滅諦、道諦なり。先づ苦諦とは、過去のごうじやうによつて、今この身をうけて種々のくるしみあるを苦諦といふなり。集諦とは、集はあつむるとよめり。是は過去にもろ〳〵の惡業の因をあつめもちたるをいふなり。滅とは、一切の煩惱妄想を滅しつくすをいふなり。道とは、煩惱をめつして不生不滅のねはんの樂界にいたる修行の所を道といふなり。これを取あはせていふときは、先づ今この界へ生れ、色々の苦をうくるはいかなる因緣ぞといふに、過去にて惡業煩惱をあつめてもちたるゆゑに、其の因をもつて今この

苦をうくる身をまねき得たるなり。さるほどに、此の苦をいとひ出離をもとむるには、先づ惡業煩惱を滅する道を修行して、さて不生不滅のじやくめつゐらくのところにいたる。苦集の體、元來自空なる間、めつすべき苦集もなく、修行すべき道もなきがゆゑなり。

無レ智亦無レ得。以レ無二所得一故。

といふこゝろは、般若の智をもつて、五蘊十二處の十八界、十二因緣、四諦等を觀ずるに、畢竟みな空なり。その智も空なれば一法の得べきなし。これを人空法空といふなり。

菩提薩埵。

これは天竺の詞なり。悟る有情といふ義なり。則ち觀自在ぼさつなり。

依二般若波羅蜜多一故。心無二罣碍一。

といふ心は、ぼさつ般若の空智によつて修行す。ゆゑに心虛空界の如くなる事をさとりて、一切の業障にさえられず。

新古　花みんと植けんひともなき宿の櫻は去年のはるに咲まし　大江嘉言

古今　あすしらぬ吾身と思へど暮ぬまのけふは人社悲かりけれ　紀貫之

山家　野にたてる枝なき木にもおとりけり後世しらぬ人の心は　西行法師

千載　鷲の山月を入ぬと見る人はくらきに迷ふこゝろなりけり　圓位法師

新千　有しにもあらぬ姿の何れをか又うけかへて身を碎くらん　行基法師
高野巻　六つの道に迷ひ初しは此法の心をしらぬこゝろなりけり　爲明
新勅撰　法の身は月は我身をてらせども無明の雲の見せぬ成けり　千觀法師
拾玉　とにかくに人の心にかなふ身はもとの都を出るなりけり　慈鎮

無二罣碍一故。無レ有二恐怖一。遠二離一切顚倒夢想一。究竟涅槃。

といふは眞實想の上には元來生滅なきゆゑに生死の恐ある事なし。顚倒夢想とは、一切の有爲の法は夢の如くまぼろしの如くにして實にあることなし。しかるを凡夫は迷ひて實に有りとおもへるは、あだなる夢をまことゝおもへるが如し。是れ顚倒夢想なり。若し一念空ずるとき一法も得べきなし、是れ則ち遠離なり。究竟とはきはまりつきたる義なり。萬法みなねはんを至極とするなり。ねはんとは不生不滅のところなり。圓滿清淨の義なり。清淨とは空の異名なり。

三世諸佛。

三世とは、過去、現在、未來をいふなり。佛とはかくしやなり。一切有情みな覺性をそなへたり。迷ふかゆゑに衆生といひ、さとるを佛といふなり。自心の外にほとけなし。人々自心卽ち佛なればこれを成佛といふなり。三世といふも遠きことにあらず、前ねんすでに滅したれば過去、後ねん未だ生せざるは未らい、其の中間のすでにおこりたる當念は現在なり。過去佛、げんざい身、げ

んざい佛、未來佛なり。過去心不可得、げんざいしん不可得、未來しん不可得なれば、たゞ一念一佛にして、二心二佛あることなし。不去不來、三世常住なり。

依二般若波羅蜜多一故。得二阿耨多羅三藐三菩提一。

六字をば無上成等正覺といふなり。この六字は則ち人々本來ぐそくしたる眞性をいふなり。佛を覺性といふも、此の眞性をさとる故なり。一切のものこの眞性にこえたるまで平等にして、佛にあつても增すこともなく、衆生に有つてもへることなく、ひとしく平らかに行きわたりてかけずあまらず。みな備はりたる故に成等といふ。さてこゝにいふこゝろは著離ばかり、はんにやによつて修行してねはんにいたるのみならず、三世諸佛も皆はんにやによるが故に、此の上の妙道を成就したるなりといへり。

故知。般若波羅蜜多。是大神呪。是大明呪。是無上呪。

呪といふは諸佛の密語なれは凡夫のしるところにあらず。二つとも無く、三つともなき佛法第一の義なり。神とは神妙にしてはかりしることあたはざる義なり。いふこゝろはこのはんにやの功力神變ふしぎにして、よく一切の惡魔の障礙を破るゆゑに大神呪と名づくるなり。これは般若の智をもつてよく佛法至極の妙利をあらはすこと、諸經にこえたるがゆゑに無上呪といふなり。

是無等々呪。

これははんにやのこうゆうによつて、妙覺の佛果をさとりきはむるほどに、この咒にひとしき咒なし。かるがゆゑに無等々といふなり。初めよりこゝにいたるまで顯說般若なり。顯とはあらはすといふ字なり。文字詞にて義理をあらはするゆゑに顯說といふなり。

能除一切苦眞實不虛。

といふ心は此のはんにやのくりきによつて、一切衆生の苦をすくひ、樂みを得さしむること、眞實にして僞りなし。さるほどにもろ〳〵の衆生、此の般若心經を信仰して受行といふ義なり。

故說般若波羅蜜多咒。

是は上にいふが如く、はんにやはらみつたは、大神咒、大明咒、無上咒、無上等々咒にして、よく一切の苦を除くこと眞實なる間、すなはちこの咒をとくといふ義なり。

卽說咒曰。揭諦揭諦。波羅揭諦。波羅僧揭諦。

この十三字は咒なり。是を密語のはんにやといふなり。咒は諸佛の密語なるがゆゑなり。たゞ佛といふのみ。よく是を知りたまふなり。餘人はしることあたはず。

菩提娑婆訶。

菩提は天竺の詞なり。これ智得道ともいふなり。合していふ時は、覺智成就といふこゝろなり。道のさとるべきなき處にいたり得たるを成就といふなり。菩提ははじめの義なり。娑婆訶は末の

義なり。はじめ菩提心をおこして退屈なく、勇猛に精進して修行をおこたらず、大道をさとつて本來空の處にいたるは則ちぼだいなり。悟り終て畢竟空なれば娑婆訶なり、是れ佛成就のところなり。

後鳥羽院
御製

おろかなる心の中を尋ね見よ外にほとけの道しなければ

花山院
崇德院

千載
玉葉

世の中は皆佛なりおしなべていづれの物と分ぞはかなき
樣〳〵に千々の草木の種はあれど一つ雨にぞ惠み初ぬる

中務卿親王
前大政大臣

新葉
續古

長き夜の闇路の雲は晴ねどもとの光りはありあけの月
世を治め民をたすくる心こそやがて御法のまこと成けり

潤子內親王
頓阿法師

玉葉
新勅

しな〳〵にひもどく法の教にて今ぞさとりの花は開くる
世〳〵を經てとき分る法は多かれど是ぞまことの心也けり

西行法師
信生法師

草庵
山家

色も香もなべて空しと說く法の言の葉のみぞ誠なりけり
何事も空しき法のこゝろにて罪ある身とは露もおもはず

素覺法師
傳教大師

續古
續後撰

露わくる花すり衣かへりては空しと見るぞ色はありける
くもりなくむなしき空に澄月も心の水にやどるなりけり

新古

阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我たつ杣に冥加あらせ給へ

風雅　出るとも入るとも月を思はねば心にかゝる山の端もなし　夢窓國師

新千　聞きわくる心のうちの誠こそをしへによらぬ悟なりけり　權僧正桓覺

夫木　心をばいかなる物と知らねども名を稱ふれば佛とぞなる　一遍上人

水鏡　夜もすがら佛の道をたづぬれば我心にぞたづねいりける　一休和尚

摩訶般若波羅蜜多心經　終

假名法語

先づ御こゝろもちと申すは、朝夕佛法に御油斷なきことにて候。古へ今にいたり、浮世のあり樣御夢のごとくにさへ思召され候へば、なに事も御こゝろのとまる事御座候まじく候。爰を佛御觀念ありて、法華の文に觀彼久遠。猶如今日。と御のべ候。此の文の心は、かの久しく遠き事を見給ふに、同じくけふの如く見給へとの御事にて候。天地ひらけはじまりしより以來かはる事なしと、よろずの事をさとり給ふとの御事にて候。然らばさのみふかく御不審有るまじく候。佛法と申すは執着をいましめ給ふ。さらに心をとどめても、その甲斐なきことにわざと見まゐらせ候を、まづ禪家にもちひ申し候。かゝ樣に申候事、證據なく候へば、いかゞとおぼし召候やと存じて、むかしの事を大かたひき申し入れ候。都に夢窓國師とて日本にかくれなき御僧まし〳〵ける。其の頃は尊氏將軍の御代也。かの夢窓國師さとりのうたに、

夢の世に夢のごとくに生れきて露と消えなん身こそやすけれ

夫れ人間のあり樣、萬事とゞまることなし。もとより生のはじめをしらざれば、死の終をわきま

へず、やみ〳〵ばう〳〵として苦の海にしづむ也。こゝを佛のあはれと思召て色々の御方便にて濟生をすくひ給ふ。されども人間のこゝろ不同にして惡道へあゆみをすゝめ、よきかたへは心ずゝみがたく、いたづらに光陰を送り、六道あはれみの業果たえず。たま〳〵をしへにしたがふといへども、名利の善をなす事ばかり也。名利と申すは、其の身の名をあげ、人にほめられんとおもふ心をたねとして、堂塔を建立し、ときの富貴におごれり。かくのごとくの人を佛はふかくきらはせ給ふ。まことの道は萬事法度をそねかず。世にしたがひて、かたく法を守る人を佛道に成就の人と申すなり。御としもはやくれくれちかくならせたまへば、なにの御望御座候はんや。殊更地獄の話頭をもしろしめされ候へば、ゆく水のごとくに御こゝろもたせ給ひて、御むねのうち何ごとも御座なく候へば、世尊御一體の御身にて御座あるべく候。こゝを佛、三部經に己心の彌陀、唯心の淨土とのべ給へり。此の文字の心はおのれがこゝろ彌陀、たゞ心の淨土と申す也。然れば十萬億土とは御ねがひあるまじく候。

佛とは何をいはまのこけ莚たゞしひしんにしくものはなし

この歌のごとく御受用候へば、なにごとも佛心と見まゐらせべく候。古へ舟田の御方丈にて、ほどなく宗建をはじめまゐらせ、人々すぎゆかせ給ひて、夢とはおぼし召れず候や。申してもつくしがたきは、かやうに御けなげに御入候て、わたくしもながらへ、佛法の御事ども申しあげ

まゐらせ候事、他生の緣ふかしと存候。因果經に自身誰ならんと佛も御のべ候。又母にて候ものは七十六にして去年相はてられ候。心昌と申せし辭世のうた、

世々ごとに見えつかくれつすむ月の替はらぬ色をたれかしらまし

この歌を口ずさみて其の後はそれさまへ參りて、御菩提の心をすゝめ申し候へとくりかへし申され候ひつる。かの御めいをそむきがたく存候てたび〳〵まゐり候ひつる。母にて候ものゝ事、おもひ出し參らせ候へば、一しほそなたへまゐりたくこそ候へ。はやそれさまの御覺悟も、大安樂の道に御心づき候へば、めでたく滿足いたし候。御なぐさみなどには御看經もしかるべく候。御心つくしては、努め努め御さだ候。まじく候。大般若の文に一切不行を佛の行とす。と御座候。爰をもつて、むかしさる知識の歌に、

あら樂や虛空を家と住なして心にかゝるそらさへもなし

いづるとも入るとも月を思はねば心にかゝる山の端もなし

是れは生死にとりあはぬところの歌にて候。よく〳〵御工夫あるべく候。又弘法大師の御辭世に、

今ははや後世の勤もせざりけりあうんの二字のあるにまかせて

いづれもさとりの人はかやうにひまなき候やうに申しおかれ候。又慈鎮和尚のうたに、

かりの世にまた旅ねして草枕ゆめの世にまた夢をみるかな

ひきよせてむすべば草の庵にとてくればもとの野原なりけり

これは色相のうへをかろく思召候へとの心にて候。いつの日いつの時、御大事きたりまゐらせ候とも、御心の内に何事も思し召候まじく候。病難もしいたくせめ來るとも、そのくるしみにまかせて相はて候へと、大唐の黄檗禪師の傳心法要と申すにもかきおかれ候。日本にては聖德太子、病難のとき此の歌あそばされ候。

浮雲はいくへもかゝれ空に消え月はくまなきひかりなりけり

この歌の心は、何事もとりあひ候はで、無念無想の所をもちゐ候へとの御事にて候。又由良の開山のうたに、

何ごとも夢まぼろしとさとりては現なき世のすまひなりけり

この歌の心は、如何なる大王皇后の外上下の人々もかなしみ給ふは、死の道にて候。こゝをさへ御覺悟候へば、すなはちあんやうの淨土、九ほんの蓮華にまとはれて大安樂の御身とならせ給ふべし。大世尊の御說法にも女人成佛のかたき事をかたきことをとき給ふ。かやうの事を聞しめして、御道心すてさせ給ふまじく候。そのことわりをあら〳〵申上げ候。男子に生をうけ申し候ても、のこらず成佛すべきにあらず。ことに龍女は八歳にして三國に名を殘し申し候。御

經にもほめ給ふ。しかれば女人こそなほも御たのもしき事にて候へば、成佛とてべちにたつときひかりもはなち、奇特をも見せ申し候事は有るまじく候。御悟にて、御心中にこれぞ御不審候はぬと思召候事御座候を大悟と申す事に候。佛御入滅の後祖師先德のさたし給ふ御法にも、見理受用の二つにて御入候。さんがくをも御太儀に思召まじく候。其の故は、祖師のいろいろ苦勞し、朝夕のぎやう體をなし、五戒五百戒を立てられ候事も、たゞ一身のさたにて御いり候。御女房衆の御さとりありしは、鵞峰天皇の后檀林皇后也。其の外人の數をしらず。美濃國は興性寺の千代野と申す女さとりて候。そのうたに、

とやかくとたくみし桶の底ぬけて水たまらねば月もやどらず

かやうの事をきこしめして、けふよりは、禪宗のさんがくに御心をつくし給ふべし。がいふん御てをひき申すべし。まづ〳〵くさ〳〵の心をたゝせ玉ひ、後の世を御たすかり候はんと、御覺悟候へとすゝめ申す者は、なにものぞや。又かやうに不審をかけ申す候者は、なに者ぞや。日に見えずしてさま〳〵なり行く故に、六道輪廻のたねとなる事を佛の三毒と說き給ふ。一にけんどん、二に怒りはらだつ事、三に愚痴の心、此の三つをたち候へと、古へ今に至るまでしめす也。之をしらざれば、愛執の心なきが故に、人をねたみそしりあれば、うらみごんして、たがひにくるしみの涙をながし、袖をしぼる也。これみな一心のわざ也。久しく遠き事を觀じ、物をわすれ

ざるも一心なり。四百四病をうけ大苦をうくるも一心也。雪霜のさむき事をいとひ、大溫のくとなすも心也。されば、此の心一つを取留めがたければ、六道のごうたえず。生に生をかさね、死に死をつぎ、うきしづむのみ也。此の心といふものは、いかにとはんじ申すに、かげかたちもなきもの也。かたちなきゆゑにきえうせず。然れば、生もなく死もなし。こゝを佛とも金剛の正體とものべ給ふ。無相にして有なるが故に、古來よりゆきとゞまる事なし。住所更になし。色相の生滅にあづかるによつて、無常とゝき、又は大死とのべて、これをあはれみかなしみ、定離と申す也。かやうに申し入候は、御心かたちなき所を御覽ぜられ候へと申す事にて候。なに物か色相をさつて、佛神とも鬼神ともなり申すべく候や。淨土穢土の事をもつて御分別あるべく候。御不審はれ申し候はゞ、まよひの雲千里萬里の外にはらひ、一つとして御心とゞまる事あるまじく候。爰を大正覺と申し候也。こゝにいたりて色もなく、相もなく、聲もなく、一念もなし。これによりて、心經にも色即是空。空即是色。と說き給ふ。一心の外にべちの物なし。本より經もなし。心は無始無終にして住所なし。爰を開て、天地草木の畢竟してみる法はあさく候。見ざる法はふかし。はやく生死のきづなをはなれて、大解脫の御身とならせたまふべし。

△御工夫にも、古則話頭、御不審はなれ候よし仰せられ候。尤に候。むかしの御僧たちあつめ給ふなぞらへを、あら〳〵かなにて御なぐさみにしるしまゐらせ候。

△本來の面目のしめしやう、不思善不思惡、未生以前、いづれの所より來る。または如何なるか是れ本來の面目とばかりもとひ申し候。此のことばをうけとりて、三十日五十日、乃至一年二年、工夫をとげてあんじ申す樣は、わが身の生の所は、佛もいづれの祖師もしられまじく候。佛祖不思議の所これにて候と申し候へば、此のうへにじゆようとて、いろ〳〵大事あるよし長老申され候間、又これを工夫して申すやうは、天地開闢よりこのかた、しられまじきとじゆようず。爰にて長老尤のよし申され候。かくしやのちにをしへによつて、其の語をするなり。大かた此の分に候。

△栢樹子の話頭とて如何是祖師西來意といふ。爰にて祖師のいはく、庭前の栢樹子とこたふ心を參せよと申すに、しかふしてがくしやのいはく、祖師の西來、庭前の栢樹子も、おなじ心にて候。ただてんねんの理にて候。前後しらぬ心にて候とて、ぢやくごに松はなほく、おどろはまかれりと申す。又色相分離してのちいかにと問ふ。松なほからず、おどろまからずと申す。三度四度申しかへして、これを至極の道理と申す。これは柳はみどり、花はくれなゐの心也。此の極意はといふ。こんぽん無相なる所をしらんがため也。大かた此の分に候。

△萬法不侶といふ古則、よろづに侶たらざる人、これ何人ぞやと問ふ。がくしや耳をそばだてゝこれをきゝ、とし月へて申すやうは、わが一心は萬法の外にて候。體も色もなく候。ものにゝ

みせぬものにて候。しかも天におほひ、地にみてり。然れば左右もなく、脚の下まん〳〵として有なる故に、法界一心とくわんじて、大こくの龐居士、名をのこす。これは目に見ぬ物のある所を見出して、かくのごとく申すなり。地獄このときやぶれ申し候。心御入候也。

△本有圓成の事、本來の佛、なんのえんをもつて、めいたうの衆生となりたるぞや。學者工夫して申すやうは、こんぼんは無念無想の佛なるを、衆生の色緣にひかれて、かやうに寒うん苦樂をうる身となり來て候。爰にねんをとゞめ、この界に輪廻なくば、本有の佛性になるとて、此のとき種々無量となし、さま〳〵ことばをつくし、善根しようと見る也。

△誰ぞの話の事、釋迦彌勒はかれが奴、彼はこれたぞ。このさとりをかけてとし月へて、老僧の前へ出て、座上に和尚なく眼前に我なしと申て、一味平等のところ何か差別あらんや。然らば奴婢なし我もなし、上下元來佛も衆生も一體ならずや。おほかた此の分のこゝろにて候。

△いかなるかこれ地獄としめされて、とし月をへて工夫して申すやうは、眼前これ地獄と申す。又とふ、何事に地獄ぞ。色相是れ地獄なり。色相分離してはいかに、眼光落地す。こゝに見えず、智慧によつて、種々の語をうけ、大利益無に落ち候て、あさましく候。

△古帆未レ挂時はいかん。學者のいはく、小魚、大魚を呑む。又かけて後いかん。大魚、小魚を呑む。この心は船の帆かゝりあるときは大なる魚がちいさき魚をのむといふ也。帆のかゝらざるときは、ちいさき魚が大なる魚をのむといふ心也。此の心は諸宗に少しもしらず、禪家の大事なり。有と申さんとては、よに有る事を吐語をかくし、又無なる事を申さんとては、世になき事を吐て心をかくして、生死思惟の處をむづかしく申さんため也。御理御座候。ちきに申すべく候也。

△臨濟の三要三玄と申す事の候。かやうの事は申しつくしがたく候。天地の間に三つもとむ、三つくろしと申す事何ぞや。これをしかも三寶と申す事あり。古德の心は、父と母とわれと、これ三つの寶也。一つもかけては物ならず候。三玄と申すは、みなもとの無性は、くろきかたちも也。出生して萬の事をおこなひ候。爰に大秘密の事あり。ようの字これすなはち大事なり。

△大こくの南泉和尚、この猫兒なぎる事は、大衆こたへざるゆゑ也。趙州爰にきたりて、草鞋をとつてかしらへあげ、ころもをかほにあてゝ、和尚のまへに出る。和尚この時猫をきつて後悔す。趙州はなはだもつてめんぼくなる。第一に色相の逆意をきる也。迷の衆生色心共にきる事を得ず、たまたまきるといへども、鈍刀なれば、はなるゝ所なし。文珠の利劍は、ふたゝびつがずと申す心にて候。

△臨濟の四喝とて、人の死したる所にいたりて喝す。この心たしかに心得たる僧まれなり。たゞじやうじゆの僧と申すは命根本不絶といへり。しかれば當時の僧たち、大なるあやまちなりとは、

みじくにして衣をかへ人のまなこをつぶして布施物をとり、おのれが生々世々のほのほをまねく、あはれむべきの第一也。

△百丈野狐の話の事、大修行底の人、かへつて因果あるやまたなしやと問ふ。こたへていはく、因果におちずとなり。この報により て五百生野狐身に墮して候。因果は歴然あるものと申すねに存し候。未だ悟らずして聲聞の見解にて因果はなしとこたへたる事にて候。いづれもべちにふかき事御座候はんとおぼしめし候まじく候。この不昧因果と申すは因果にくらからずとの事也。不落因果とはおちずといふ心にて候。この話頭のまなこは生々世々の事を狐によせてとかれたる所、大智なるゆゑに大智禪師とは申す也。一朝大國にていろ〳〵佛道修行の事、れん〳〵に申上げまゐらせ候。又申す、人まよふときは火をもつて火をけさんとし、水をもつて水をかく。いさごをもつて大海をうめんとし、土をもつて山をかこはんとす。斯樣のおろかなることは人々佛道に心の遠ざかること萬里をへだてて、手には百八煩惱のきづなる珠數をつまぐり、二世三世を祈り、生靈死靈のたゝりを見いだし、石塔率塔婆に奇特のありと思ひ、あづさにかけて、死人とこと葉をかはすことをいひて袖をしぼり、もろ〳〵のをしへ、もろ〳〵の道理をうしなひ、佛菩薩にまうゞをかけ、ぎりをそむき、いよ〳〵もうもくのごとく、竹のうちより天をはかる者は生々世々うかぶこと有るべからず。西方非レ四。東方非レ東。無二極樂一。無二地獄一。淨

土非二淨土一。けんどんをきらずして、しかも又しかも外の大空三昧にして大蓮華のうちにあり。たゞ正直慈悲ぎやう無さん也。念をきつて、しかもまたきらず、これを通力自在の僧と申すなり。唐國我朝にいたり、上下萬民佛道をねがふ事、何宗が宗とて、いろ〳〵たてはありといへども、その源はいづれも極樂淨土にいたり、地獄におつまじきとの方便也。この淨土といふは、いづくなれば、我が心のうちにあり、又地獄はいづれぞなれば、大事、我心の内にあり。ある人達磨大師にとふ、地獄とはいづれの所ぞや。こたへていはく、汝が心中に貪瞋痴の三どくこれ也。貪瞋痴とは貪慾とてよろづの愛念執着の欲を申す也。瞋とははらをたつる念を申す也。痴とは愚痴とてなに事も心のまゝになき事をなげきかなしみ、我とわがこゝろをなやます事を申す也。この三どく、かくのごとく善惡の報を造り出して地獄におつるなり。地獄とてべちに餘の世界にあることにてあらず。又とふ、極樂とはいづれの所ぞや。こたへて曰く、極樂淨土とてほかにあるべからず、汝が心中の三毒をはらふ所すなはち淨土なりとこたへ給ふ。佛と衆生とへだてあることなし。まよひの衆生、この貪瞋痴、我が本心にてなきことを知らず、この一念、愛し又憎むによりて地獄におつる也。この三毒をもとゝして八萬四千の煩惱おこる也。これ則地獄なり。佛といふも、さとるといふも、名はかはれどもおなじ道也。我が本心をさとる人をすなはち佛となづくるなり。然れば我が心の外にべちに佛なき事を よく心得て、このうへをつね〳〵心にかけ御工

夫あらばみちに御あたり候はん事、うたがひあるべからず候。現在の果を見て過去未來を知ると御經にとかれ候。このこゝろは今こゝにて惡心惡逆を心にわすれずしてつゝしみ、善事の心あつく取出しおこなふ事也。今この生にてその心を忘れずば、又今そのこゝろを未來へひきて、人になまれいづべきとの事也。佛はよろづに自在を得たりといへども、見あたらざる事あり。一には無緣の衆生は度すること能はず、二には衆生かいをつくること能はず、三にはさうごうてんずること能はず、前世の業因によりかんどくしたる善惡の業報なり。かやうの決定の業報をば、佛菩薩の身にても、てんずることかなはず、かたちの善惡、福德の大小、壽命の長短、衆生の高低の事、是等皆前生の業因にたへたる定業也。慈悲は福德の家にむまれ、けれどんは貧苦の身にいたる。柔和忍辱の心はすがたをよくむまれ、禮拜は高位高家にむまるゝ。殺生をしたる者は短命にむまる。かくのごとくいづれもみな前世の惡因により、惡事を得たる人。此の理をしりて世にも惡行をつくらずば、來世はかならず善果を得べきこと、唐土わが朝の祖師たちをはじめ數多き知識のふみにもかきのこしたまふことゞもをしめしまゐらす。

假名法語終

水鏡目なし用心抄

目なしどち〳〵、

めなしとは、人家の私案なしといふ名にて、本心のことなり。どち〳〵とは、たづぬる智慧なり。自性の光これを心の官は思ふといふなり。此思ひが無我を求むるなり。

こゝろについてましませ。

私案をすつれば、活きながら身は覺えぬもの也。此時は我即ち虛空に似たり。其虛空が萬の聲聲を聞くなり。これは我なきに何が聞くぞと明けくれさがし求むれば、一旦忽然として我なき故よく聞くといふことを知る也。其知る智慧もまた更に智慧あるにあらず、あらずとてひとへに知らぬにもあらず。此智をたとへば人常に顏は忘れてゐれども顏なきにあらざるがごとし。そも〳〵皆人たちの悟とやらんいふことを悟るならむ。はじめに父母もなき、とつと已前の我身はなきものぞ、いへきかんといふ。

父母とは天地なり。天とは心なり。地とは身也。とつといせんとは、人常には身心ともに忘れ

て居るをいふなり。そのわすれてゐる所をいへとなり。

何して知らぬことが申さるべく候や。ただへんてつもなきもの也と思ふべし。

知らぬとは、忘れてゐるをいふ。忘れてゐれば、我といふ目はなきなり。其所はいはれぬなり。故に申さるべく候やとなり。あやまりてへんてつもなしとも有りともおもはゞ、それははや我といふ目あるなり。又知らぬとて、何もなしといふ事にはあらず。忘れてゐても、此身が消えたるにもあらず。心もまたかくのごとし。

古人曰、空寂以爲二自身一、無レ認二色身一、靈知以爲二自心一、無レ認二念妄一とあり。自性の靈光本分の知見は、絶つとも捨てらるゝものにあらず。學者のやまひは、知見に見をたて、心に心を生ずるを以て、頭上に頭を安ずるとていやがる也。根本生れつきの外に、我見を起すを目とする也。目なしとは　其我目なしといふこと也。我とは私智のはからひ、私案妄分別也。

たとへばよし野初瀬の花もみぢ、いろ〳〵に咲いて散りて、又本の根にかへるがごとし。

これ人の念のおこり又さるも、天地の間に四氣の流行するも、同じ事なり。此はたらきをさする、主人公をなしとせんや。能く〳〵工夫有るべし。人念々の起る思は、目なしのはたらきにて、正念とも無念ともいふ也。私案は思ひの邪になりたる也。それを妄念ともいふなり。何とて思ひを無念といふなれば、正しき念慮は、目なしにさからはぬゆゑ、覺えなきがごとし。

一を擧げていはゞ、歩行するに、思はずして歩行はならず、思ふといへども、更に思ふとは自身も覺えぬなり。それゆゑ正念とも無念ともいふ也。また其足少しも行くまじき方へふりむけば、直に思ひが邪になりて目なしにさからふ故、覺えたる也。これを妄念とも有念ともなづくるなり。無念といへばとて、念なしといふことにはあらず。

ほんらいもなきいにしへの我なれば死ゆくかたも何もなし。

本來もなきことは、其はじめを知らずといふ事也。はじめを知らざれば、終りを知らぬ也。いにしへの我とは天也。死にゆくかたもなしとは、何としてか去來すべきぞと也。天とは目なしのかへ名なり。

ゆく水に數かくよりもはかなきは佛をたのむ人ののちの世。

ゆく水に、數々の事をくりかへし〳〵書くとも、何が益にたつべき、無益なりとの事也。ことに佛を頼みにして、惡などをなすは、大にはかなしとなり。つれ〴〵に萬の事は頼むべからず。身をも人をも頼まざれば、是なる時は悦び非なるときは恨みすとかや。只目なしまかせにして、頼み事をやめよと也。さりとて神佛を信ぜずといふにはあらず。神佛を信ぜぬは、直に我が力を頼みにするものにて、彼の我慢大目あるなり。

とへばいふいはねばいはぬ達磨どの心の中に何かあるべき。

問はねばいはぬは、なきに似たり。とへばいふからは、心の中ひとへになしとはいふべからず。人死ぬるといなや、やきもしうづみもし、のけてなくなるとおもへば、又もなくならずして、たましゐといふもの、來世とやらんへゆき、あらおそろしや、ゑんまわうが手にわたりなば、しやばにてつくりしつみを、くろがねのちよふにつけて置いて、鬼に見せて、これほどの罪人なり、呵責せよといふとき、

人死ぬるといなや、燒もしうづみもしのけてなくなると思へばとは、人惡事を竊になしおふせて、しすましたりと思ふ邪念をいふ也。又もなくならずしてたましゐといふもの來世へゆくとは、第二念を目なし第一の臣下正念と云ふ、閻魔が善なれば極樂へ通ず、惡くなればゆるさぬ也。しやばとは現在也。をしやにくやかあいやと樣々の事に身の私をして、主親をなかせ、夫婦互にむごく情もなく、兄弟あらそひ、友だちに眞實をうしなひ、世間へ無理非道をし、都て慈悲憐愍なく、愚痴ゆゑ人のあるまじき事をいふたりしたり。忽ち畜生道へ落ち、ほしがるまじものを貪り、萬に慾ふかくして餓鬼となり、身勝手をして腹たて、いかりて瞋恚の焰をもやし、修羅におちいり、黑繩、衆合、炎熱、紅蓮、叫喚、無間あらゆる地獄を、己が胸中にくり出して、くるしむありさま、言ふも及びがたし。これは他人の知らざる所にして、自ら知る所也。微塵も惡を思へば、直に目なしといふ淨はりの明鏡にそのかげあらはるゝ也。まして

惡をなすをや。其かげ再びはげがたし。是を鐵札につけるといふ也。鬼とは色受想行識の五蘊なり。此身いろ／＼の事を受るにつけて、さま／＼私想し、あしきことを行ひ、何かと身の最負のみして、意識に執着ふかきゆゑ鬼のせめくるしむるといふもの也。故に罪の重きほど／＼にせめて、少しもゆるさぬ也。恐るべきことなり。

どく藥へんじて藥となるなれば、罪のおもきは佛にやならん。

一切毒も用ひやうにて藥となる也。故に藥もまた用ひやう惡しければ毒となる也。罪も同じ事也。罪も至りて重き時は却て佛ともなるなり。罪は貪瞋痴の三毒より大なるはなし。佛は衆生を救ひたしと貪るなり。衆生に惡をさせじと怒り、平常衆生を苦にし給ふは痴愛なり。三毒もすぐれて甚しければ我なし、故に佛になるとは云ふなり。

作りおく罪の須彌ほどあるならばゑんまのちやうにつけ所なし。

前にいふごとく、佛の三毒は、大慈悲なるゆゑ、その慈悲を、しゆみ山にたとへたり。さればー正直の閻魔何とて帳につくべきぞ。一日克己復禮ときは、天下仁に歸するとかや。況んや大慈大悲の佛、誰をかにくみ誰にかほこらん。惡く遂ひに克ちさつて、克つべき迷ひなきを仁とも佛ともいふ也。佛とは迷ひのほどけしといふ事也。迷ひとは人我の私をいふなり。

よくものをあんずるに、地獄もと遠からず。鬼といふは習癖なり。一代藏經は皆人間をいためん

がため也。あらにくの釋迦どのや、いろ／＼のうそをついておいて。

よくあんずるとは、目なしの光明にてらし見るなり。地獄も遠からずとは、外になし己にありとなり。鬼といふは瞿曇なりとは一切假なり。或は鬼とも人とも佛とも餓鬼ともなるなり。

一代藏經は、皆人間をいためんが爲めとは、毒藥へんじて藥といふに同じ。いためずば何としてか本の樂にしらるべき。たとへば、怪我にて手を折り足をくじきたるものを療治するときは、引きのばし或は打ちつくる故、いたみてたへがたけれども、夫れにて後は樂になる也。本たがひたる人を直す經なれば、いためるなり。あらにくの釋迦どのとは、歎美にて大に歎德し、ほめたる詞なり。いろ／＼のうそとは、皆空なり。

それを誰が問へば、よしなの問はずがたりや。

誰が問へばとは、問ふ人なしとなり。これ空也。問はずがたりとは假也。これ空とせんや假とせんや。空假ともにあたらず。中道實相是れ何れの所ぞ。中道實相は目なしのかへ名なり。

草木さへ佛になるとなれば、人間はいふに及ばず。むかし／＼あつた釋迦阿彌陀も、みな佛じやといふたとしたが、うそをつかれたとのぶ。

草木も人間も、むかしの釋迦彌陀も、皆假なり。したがうそをとは空也　つかれとは、佛といふ名も假なればなり。

うたふも舞ふも、のりのこゑ。

これ中道實相也。然れどももしあやまりて、これを目なしと思はゞ、早や目が出來たりと知るべし。

父母未生いぜん本來もなく、ゆめ／＼佛法とやらんいふ事もしらず、なにゝならんとあんずべからず。たゞ何ごともしらぬ心が佛なり。其佛と云ふものは、有るにもあらず、無きにもあらず。さとりぬれば、ありともなしともしらぬ事なり。一切八萬餘經を見るに、佛にならん心はすこしもなし。とかくふるごよみなどゝおなじことなり。

一切餘經を見るに佛にならん心は少しもなしとは、言語道斷なり　數外別傳不立文字なる故、釋尊も四十九年一字不說とかやの給ひし也。然れども一休和尚かくの玉ふも、古曆の御影なりと知るべし。兎角とるべからず、捨つべからず、默識心通ずべし。

あしなくて雲のそらへはのぼるとも瞿曇の經を賴まれはせず

賴むべからざることは、前に行水の歌に注す、同意なり。

釋迦といふいたづらものが世にいでゝおほくの人をまよはするかな。

一休の釋迦をそしりたる御かげにておほくの人がうろたへぞする。

是は是、非は非にしておき、生は生、死は死、花は花、水は水、草は草、土は土。

諸人もしあやまりて、是は是とする心あらば、はや是にあらず。實に是なる時は、是を忘れて知らぬ故に是なり。故いかなれば、昔より聖人に、聖人といふ心ありしを聞かず。孝子もわれ孝行にすると覺えぬによりて、孝子也。花は花を知らず、水は水をしらず、生も死も草も、ま

た〳〵おなじ。

我はこれなにものぞと、頭頂より尻までさぐるべし。さぐるともさぐられぬところは我なり。

頭頂より尻までとは、總身をいふ也　此身あるが如くなれども、能く〳〵さぐりおしきはめて見れば、なきがごとし。そのわけは、常に大かた身を忘れてゐるなり。忘れてゐれば、虛空に似たり。その虛空があつさ寒さいたさかゆさをよくしる也。そのしるものを目なしといふ也。これがまことのわれにして無我の大我ともいふなり。此大我はつかまへ所なきものゆゑ、さぐられぬ所といふなり。

心とはいかなるものをいふやらんすみ綸にかきし松風の音

此所少しも有無の意あらば、目ありにして私案也としるべし。又一休の歌に「心とは鍋のさかやき石のひげひうち袋に鶯の聲」ともよみ給ひしなり。

おのれさへあづけはらはぬ不動めが惡魔降服無用なりけり

おのれさへあづけは拂はぬ不動めがといふ其私案が、即ちあづけを拂はぬ不動といふもの也。眞の不動は、火に入つてもやけず、水にもおぼれず、動きてうごかざる大自在の佛なれば、よく惡魔を伏する也。あづけ拂はぬ不動は有無にとどまりて、動かぬ不動にて、これ惡魔の骨頂なり。己さへはらぬとは、瞋恚の火中に自縛の繩をもち、邪見の劍を提げて、目をいからしたる體をいふ也。其形實の不動に似たれども、大まぎらものあり、能く辨ふべし。まぎらものは無用なりとの事也。

ほらぬ井にたまらぬ水の波たちて影もかたちもなき人ぞくむ

ほりし井にたまりし水の波たゝでかげも形もある人ぞくむ

釋迦きんかいのところにまかせて佛になるといふしるしなし。とかく不レ明也。死すれば我もなし、人もなし。釋迦彌陀も見れば本は人の性をうけつゝ、地ごくにぞ入る。

釋迦禁戒の所に任せてとは、即ち其まかせたる意地が、我目となりて、樣々の私案妄分別をするゆゑ、佛になるといふしるしなし。兎角くらやみにひとし。死すればとは、私案の妄念を忘れたるをいふ也。萬事をわすれたれば、人の我のといふ事なし。赤子の心に似たり。その所を我もなし人もなしとはいふ也。もとの赤子となれば、釋迦も彌陀も、本來平等の同一性なり。地ごくに入るとは、十界を性中にそなへたれば、地ごくのみにあらず、餓鬼、畜生、修羅、人

間、天上、聲聞、緣覺、菩薩にまでも入る也。今こゝに地ごくに入るといふは、罪人をすくふが故なり。

心とてげにはこゝろのなきものをさとるは何のさとりなるらん

げには心のなきものをとは、心といふものなしといふ事にあらず。なしのありのといふ私案妄分別は、いらぬものぞといふ事なり。故にさとるとは、何のさとりだてぞといましめたり。悟ると思はゞ、それが迷ひなり。さればとて悟るといふ事なきにあらず。悟るとは心身共にわすれたるをいふ也。元來諸人天が心なれば、私に心の身のと私案作意を用れば、それが幕になりて、天がかくるゝ也。天はなしといはれまじ、又ありとするにも及ばず。或者かたはらより、及ばぬはづなし〳〵といふ。予が曰く、なし〳〵とは何がいはした。

我が法をいはでもいらぬ春の花もひらけてちりてつちとこそなれ。

四時行百物生、天何言乎。雪のうちより梅はほころび、霞のすゑに咲きつゞく、花もいつしか夏木立、しぐれに染る薄紅葉、散るにはあらで、したよりめづるものありて、わか葉のきざすにこそ。高き所をひくしと思ふ人もなく、谷ぞこと高しと見まがふものもなし。善は自ら善、あしきと云ふに及ばず。苦はくるし、樂はやすし。火はならはずしてあつく、水は學ばずして下へながるゝ。人は根から惡きらひがはへぬき也　それを誰がたづねた、やれいらぬ御世話や、

水鏡目なし用心抄　終

佛鬼軍序言

夫佛鬼軍は、戯にして實をあらはし、苦をぬき樂をあたふるの大道なり。罪業の陣は破やすく、功德の陣は破がたし。水はすゞしく、火はあつく、地獄はくるしく、極樂はたのしき、三才の孩兒もよく是をしる。八十の翁何處に是をしらざる。こゝに一休禪師功德の陣に味方し、罪業の陣を破たまふ。見る人たれか心よからざらん　諸仁者はやく此味方に加たまへとすゝめるは、天保五の春。

推翁叟誌

佛鬼軍

極樂にすでに我も〳〵と物具そろへして、兵具くらべはじまりたり。出立給へる九品蓮臺の大名高家たれ〳〵ぞ。等覺山の觀音左衞門、蓮花野の勢至太郎、横笛の藥王兵衞、笙笛の夢上武者、懺悔の里の普賢殿、琴上手の自在五郎、三賢寺の師子吼十郎、同き陀羅尼三郎、能滿福智の虛空藏冠者、歌喜地の德藏庄子、同弟に法藏別當、又金剛藏大夫、光明太郎、殊賢平內、指箭の山海惠、大刀の華嚴王、大箭月光王、小箭の日照王、逸り尾の定自在、一番かくる三昧王、ひたやふりの大自在王、一人當千の白象王、打物の大威德、はやばしりの無邊身、かくのごとくの廿五の菩薩、一人して九億萬恒河沙の郎等を打供して、乘物はこのみ〳〵なり。紫雲にはする人もあり、蓮臺に鞭打人もあり。或は馬、或は龍、或は獅子、或は大象に乘者もあり。此外に生死の大海に弘誓の舟うかべて、十萬餘艘までぞ指出たる。舟一艘の大きさは、ともよりへにいたるまで、四十萬里なり。一日に九十里をあゆむ程の道を、一日もやすまず八十年ばかり行は、ともよりへには行つきぬべし。日本國は東西二千八百七十里、南北五百卅七里としるせば、舟一艘の勢を案ずるに、日本國百千あつめたりともおよぶべからず。かゝる舟に乘るつわ者十萬餘艘ぞ出立たる。是は極樂の東門より內の勢なり。極樂と娑婆との間に、大國十萬億あり。國ごとにもよをして、男頭につきて一人もとゞまらず、皆出立たり。雲のごとく霞のごとし。聞に身もひへておびたゞし。大將軍の阿彌佛は、靑黃赤白の錦のよろひひたゝれ、相好莊嚴の小手をさし、大慈大悲の御胄に三身卽一のかな物うちて、八萬四千の白星の甲に、四十八願さしたるやなぐひに、僧祇劫へたる功德のしげとうのふる弓に、妙觀察智の幡さして、靑蓮のまなじりなる郎等一人もなし。つきの十五日を吉日にさだめて、地藏菩薩しるべして、毎日朝入諸定の門

ぼのにぞよせかけたる。東方をは藥師如來うけ給て寄させ給へり。八日は吉日なり。是はまたこ
との外の大勢なり。西方極樂にはむねとの人々廿五き、是は藥師に同座して、酒器へだてず評定
するほどの佛七俱胝までぞ坐給へる。日光菩薩、月光菩薩をはじめとして、前後にいねうせる十
二神將等の一の郎等八萬千騎なり。醫王善逝の仰に云、日記をひかへず、はかりごとなくして、
合戰をはじむれば、勝事百に一もなし。しかあれば藥師經の日記にまかせ、眞言儀軌を守りて寄
べきなり。仰に云、十二神將はもとより重代の武者なり　夜晝ものゝぐはづさず、用心きびしく
さぶらはるゝ殿原、たれ〳〵ぞ、宮毗羅大將、伐折羅大將、迷企羅大將、安底羅大將、額儞羅大
將、珊底羅大將、因達羅大將、波夷羅大將、摩虎羅大將　眞達羅大將、招杜羅大將、毗羯羅大將
時をつくりて、辰の時の大將は、龍の頭を甲にきるべし。巳の時の大將は、巳の頭を甲にきて、
次第〳〵に時を守てよすべし。其外の佛菩薩はものゝ具すべからず。或は蓮華を持、或は寶珠を
もち、或は印を結、或は合掌して、ひごろ所持の物かはるべからず。其故は、我力にて佛智藥と
云藥を身にぬりつれば、鎧甲をきねともいれどもやたゝず、切ども釵いたからず。殊に我等が
餘の佛に勝て、光をたてほこと兜なり。藥師瑠璃光如來とは、さて名付られたり。たとひ阿防羅
刹鐵を七重までかまへたりとも、我行むかはんには、瑠璃光と云光をもて、矢いたくさしとを
さんに、鐵の城は物ならじ。罪業の衆生をば一人も餘の佛のかたへはちらさずして、我淨土へ

せめとらんとて仰は下。儀軌本經に付て五色のはたをさし給へり。高は四十九尺、大圓鏡智のた
てもたせて、部類眷屬は八日の夜四十九燈を手々にともして、今度の合戰に勝たらば、國々の衆
生にはやまふあらせじ、命永からせんとぞ、十二の大願をおこさせ給ける。北の手よりは一代教
主釋迦牟尼無上大薄伽梵大將として寄させ給へり。是はまた殊に意趣深き事なり。其故は今此三界
皆是我有、其中衆生悉是吾子、而今此處多諸患難、唯我一人能爲救護と云へり。一切衆生は皆我
子なり。然に十分が一だにも淨土へは參らせず。しかしながら鹿鳥をころし、鰐鮒を取たればと
て、毛を吹て疵をもとめて地獄へ落す事、第一の意根なり。五百の大師も衆生のためなり。我一
人なりとも、地獄に打入て罪業のともがら一釜二釜なりとも、うばひ取て、淨土へむかへばやと
ぞたくまるゝ。いはんやかゝる官兵にかられて本意をとげん事もとも悅ぶ所なり。中天竺摩迦陀
國靈山淨土よりぞ出立給へる。法華經の過去現在未來の四向四果の賢聖、住行向地の菩薩人天大
會一人ももれざりける。本迹二門涌出の菩薩までも出立けり。復將軍大聖文殊は獅子王にたて
まつりて、清涼山に門出せさせ給へり。家の子の一萬文殊釵を拔、心一にて打手をそろへたり。
大聖老人佛陀頗梨三藏おもひきりてみへたりける。優塡大王ははたさしとかや。普賢菩薩は白象
王にたてまつりて、二聖二天十羅刹を郎等に打供して、法華經中の勢にはなれざりける。彌勒大
聖補處薩埵四十九重の摩尼殿都率の內院より、八萬四千きの天衆を郎等に打具してむかひ給へり。

懲ては三界所有の天王天衆一人ももれず、御供にぞもよをさる。釋提桓因二萬天子善現城を立出て、三光天子四大王持雙の臺よりたなびき出、大師釋迦如來はもとよりの大將なり。第六天の魔王をも打しなへ給き。人のしらぬ事か佛のやさきには、何物かかゝるべき。鐵のつゝみ十二をもいとをし給き。あはれ大將や大白牛車と云車に乘り、成所作智のたてをつきて、すでに地獄のきたぞらまでよせかけたり。此外法華經の一の卷の妙字より、第八卷の内題にいたるまで、一々の文字々々ごとに武者にげんじて、六萬九千三百八十四騎までぞかけいでゝ、假使遍法界斷善諸衆生、一聞法華經、決定成菩提と、鬨をつくりてぞはせまわれる。

佛

南方をばほうしやうと云佛、大將の宣をうけて寄給へり。たゞし此佛は、常にも聞およばず、きこへたる弐者にもあらず、さしたる郎等眷屬もなし。此佛は德人にて、たからは持たまへり。如意寶珠と申珠を、平等性智のほこにいれて、弓矢なけれども、此玉をもて、つぶて打にすとも、獄卒にはよもまけじとぞ、獨言にはつぶやきける。無勢にて寄給へど、雨のあしよりしげく、如意寶珠を降しければ、此寶珠また無盡恒河沙の武者をふらしけり。始にはおこるまじく見へ、後には一番の大勢にぞ成たりける。四方よりせめよせたり。火出る程にぞたゝかひける。獄卒の牒狀のことばこそ人しげなれ。佛は正直のものかとおもへば、どんよく第一の人なり。衆生ほしがる欲の深さ、自業自得果の憲法の大矢うけとり給へとて、一人の阿防羅刹淨頗梨の鏡をこたてに

鬼

軍

取て、十五束かなきはせめて放たれば、西方の複將軍觀音左衞門忍辱の甲のはちいはしらかして、十萬億の國を過て極樂の東門のはた板にかせぎにぞ射たてたる。新生の菩薩は舌をふりて人中へぞにげ入たる。六觀音大將にて、毗樓勒叉、毗樓博叉等の廿八部衆各千手經のごとくは、一人して五百の眷屬の大力の夜叉を打ぐして大定智慧の弓に、弘誓深如海のかふら矢をさしくはせて、仰にいはく、なむたち日にも見、青信も聞らん、大悲代受苦の大聖尊衆生界をすくひつくさずば正覺をとらじと思きりたる複將軍なり。手なみの程はたしかに見ならへとて、矢の長さは五十由善那こひらまはる程に、引わたして放たれば、八大地獄と一々に射とをして無間地獄のかなへのかせぎにつらぬきて、地獄をぞ空へ持あげたる。城の上を西方へおもたげに飛上たり。罪業のおもさにまたもとのごとく落にけり。これを見て阿防羅刹も矢さきにかゝらじとぞあはてさはぎける。東の手には日光菩薩、月光菩薩小將軍にて、十二神將鼻をならべて打手をそろへて、一二の木戸口をば打やぶりて、三途河のはてまでせめよせたり。北にはおよそ寄べき方もなし。多百由旬のつるぎのみね高くさがし、鐵の湯をわかして濃水のごとくにぞ流しける。普賢菩薩文殊法華經を身にまきて、おもひきりてぞかゝりける。平等一味の雨くだりて、熱鐵の湯もさめにけり。大に身を現して百由旬のつるぎの岸を手に入て吹ければ、ちりはひにくだけて、青蓮華の種とぞ成にける。しかれども獄卒阿防等心をたおさずはつみ出てぞたゝかひける。南の

佛

鬼

軍

ては如意寶珠をつぶてにして打ければ、羅刹が甲の鉢はくだけよとぞなげたりける。七日七夜合戰するに、たがひに勝負なかりけり。いよ〳〵地獄の方には勢づきてければ、落つべき事さらになし。大日心王此由きこしめして、密嚴國土より大勢をぞつかはしける。金剛界といふ里より、十三九會の七百餘尊、胎藏界といふ都より、三部四重の五百餘尊ぞ打出て給へる。虛空より大聖大悲不動明王よせたりけり。西方より大威德明王よせ給。北方をば金剛夜叉明王かため給へり。いとまをくれずおとらじまけじと打とそ降伏しける。罪業と功德と取あひ取くみ、上に成下になり、上下二傳同時俱有としやくするこの心なり。經云、無明住地其力最大佛菩提智之所能斷といへり。火界咒に燒れて炎魔王宮もながく煙とぞみへたりける。其時冥官冥衆阿防羅刹も、心ぼそくなりてとじいくさをぞはじめける。なんだちか佛法結緣の物に所もおかず、地獄へをとしたるゆへぞかし。ひしのする〻の末なしとぞいさかひける。しかれどもかなはず追捕して十方淨土へぞ引接しける、阿防羅刹をばこしらへすかして、こゝろをあらためて佛になし給へり。冥官冥衆のすがたをかへずして、曼陀羅の聖衆に引上せて、等流法身と地獄に淨土をうつして、地に阿字をしきて、かたちを八葉蓮華に作たり。中台には大日心王の都を立たり。東方をば藥師領し給へり。南方をば寶生領し給、西方を阿彌陀申請け給ふ。北方をば釋迦主つき給ふ。四角をば普賢文殊觀音彌勒知行し給へり。是も則一往の會釋なり。諸尊皆同大毗盧遮那佛身と釋して、大日心王の都なり。然らば多百由旬のほのほは、佛の萬德となりにけり。劔の山とおもふは妙覺山なり。鐵の湯とおもふは功德水なりけり。是をば五智の都とぞなづけたる。地獄と淨土とはたがはざりけり。法相宗には於繩起蛇覺と釋し、繩を蛇と思ふはおそろしかりつれども、繩と見なしつればおそれなし。地獄おそろしとおもふは迷の前の事なり。菩提なりけりとさとりぬればくるしからず。唯識論には、愚夫顚倒迷之眞如故無始來受生死苦、聖者離倒悟之、眞如便得涅槃樂寛安樂と云へり。或人師の釋に、是をさとれるを覺者と云、是をまどふをば凡夫といふ、顯密の宗義是にはすぐべからず。抑々五智の粗を餘所にきゝたれば、我等がむねの間に八葉蓮華あり。本覺の佛三十七尊座したまへり。歸命本覺心法身也。此佛にはいかにしてかなるべき。信心をいたして、五字の眞言陀羅尼をかゝせてまほりに懸よ。今生には諸佛菩薩曼陀羅擁護をくはへて弓矢の恐なく重病をうけず、所知所領心にかなひ、所求所望圓滿して、男女もろともに、衆人愛敬身にあまり、成佛する事よにやすし。おそろしき地獄をも極樂になすぞかし。法身をかへずして佛にならん事のやすかるべし。智者此ことはりをさとればよろづの事つみならず。無智の人は愚生にとふべし。世中には智者に過たるたからはなし。世間の淺名をもて法性のふかき所をあらはす、此合戰狀は佛智にかなへり。更にそしる事なかれ。

願以此功德　普及於一切　我等與衆生　皆共成佛道

佛鬼軍 序

世の中にうらなき物語のおりふしは、ふみしらぬ和歌のうら藻のくらき道までも、たがひに恐びあへず。うち出むることの葉のしげき中に、雙岡十念寺の寶物とかや、其かみ名におふ紫野の一休和尚の自書自賛の佛鬼軍、世にもてはやすことなく閲覧にうづもれて、世々を經るに見るものなし。こゝに十八世のあかし卷をひらくに、經文まなこにさへぎり、表示堂にあり。靈夢をうつして見るに其詞たへなる事、お詞にいたりてはいつもさらなり。靈奇と云つべし。今梓にちりばめむとて、正本をもて一字一畫のたがひなく、淨はりの鏡にうつし、俱生神の筆にまかさず、後世のたからとなさんために、かたじけなくありがたき事をも、おそろしきかも、掛き心にて梓にちりばめ、ふつしかにしるし侍る事を、身ながらもおかしくあさましくは思ひながら、か、ることありと成共、ききもならはせばやのこゝろあてはかなき、かへす〳〵もおかしきはかりごとにも。

元祿十年丁丑年刻
天保五甲午年再板
洛陽書肆

十念寺十八世　澤了書之
寺町三條下ル町　著屋宗八
六角通寺町西へ入村　小川多左衛門

骸骨

うすずみに書く玉章のうちにこそ、萬法ともに見ゆるなるべし。それ初心の時坐禪を專らになすべし。もろ〳〵國土に生れくるもの、一度むなしくならずと云ふことなし。それ我が身もいまだなり。天地國土本來の面目もいまだなり。みなこれ虛空より來るなり。かたなき故に、すなはちこれを佛とはいふなり。佛心とも、心佛とも、法心とも、佛祖とも、神とも、もろ〳〵の名は、みな是れこなたより名くるなり。かやうのことを知らずんば、たちまち地獄には入るなり。またよき人のしめしによりて、二度かへらざるは、冥土ぎやくしやうのわかれ、したしきうときも流轉三界は、いよ〳〵ものうく心さして、故郷を足にまかせてうかれいで、いづくをさすともなく行く程に、知らぬ野寺にいりかゝり、袖もしぼるるふしころも、日も夕暮になりぬれば、暫くかりねの草枕、結ぶたよりもなきまゝに、あなたこなたを見まはせば、みちよりはるかにひき入りて山もと近く三昧原とおぼしくて、墓とも其の數あまたある中に、ことのほかにあはれなる骸骨堂のうしろより、立ち出て曰く、

世の中に秋風たちぬ花すゝきまねかばゆかん野べも山べも

いかにせん身をすみぞめの袖ならん空しくすごす人の心を

一切のもの一度むなしくならずといふ事あるべからず。むなしくなるを、本分のところへかへるとはいふなり。壁にむかひて坐する時、縁によりて起る念は、みな實にあらず。それ五十餘年の說法も、みな實にあらず、人の心を知らん故なり。かやうな苦を知る人やあるとて、佛堂にたちよりて、一夜をおくるに、常よりも心細くして、うちねることなかりける。あか月がたに、すこしまどろみたる夢のうちに、堂のうしろへ立出づれは、骸骨多く群れ居て、この擧動おの〳〵おなじからず。たゞ世にある人の如し。あなふしぎの事やと思ひ見る程に、或る骸骨近く歩みよりて曰く、

思ひ出のあるにもあらずすぎゆけば夢とこそなれあぢきなの身や

佛法をかみやほとけとわかちなばまことのみちにいかがいるべき

しはしげに息の一すぢかやふほど野べのかばねもよそに見えける

さて、親みよりてなれ遊ぶに、日比我人へだてける心もうせはて、しかも常にあひともなひける骸骨、世すて法を求むる心ありて、あまたのわかちを尋ね、淺きよりふかきに入りて、我が心のみなもとをあきらむるに、耳にみてるものは松風のおと、まなこにさへぎるものは、けい月のまくらにのこる。そも〳〵いづれの時か夢のうちにあらざる、いづれの人か骸骨にあらざるべし。

それを五色の皮につゝみてもてあつかふほどこそ、男女の色もあれ。いきたえ身の皮破れぬれば、その色もなし、上下のすがたもわかず。たゞ今かしづきもてあそぶ皮の下に、このがいこつをつつみて、うちたつとおもひて、この念をよく〳〵こうしんすべし。貴きも賤きも、老いたるも、わかきも、更にかはりなし。

たゞ一大事因緣を悟るときは、不生不滅の理を知るなり。

なきあとのかたみに石かなるならば五りんのだいにちやうすきれかし

なに事にあらおそろしの人のけしきや。

くもりなきひとつの月をもちながらうきよのやみにまよひぬるかな

まことさておぼしめし候はん、いきたえ身の皮破れぬれば、人ごとにかやうなる。御身もいかほどながらへさせ玉ふべきはかなく候。

君が代の久しかるべきためしにはかねてぞうゑし住よしのまつ

我ありと思ふ心をすてよ、たゞ身のうき雲の風にまかせて、こなたへよらせ玉へ。いつまでもおなじとしまで、ながらへたく候へ。まことに思し召し候はん。之れも同じ心にてこそ候へ。

世の中はまどろまでみる夢なればみてやおどろく人のはかなき

定期はいのるかひなき事にてこそ候へ。一大事より外は何事も心にかけさせ候まじく候。人間

はさだめなきことにて候へば、今はじめておどろくべきにも候はず。

いとふべきたよりならねば世の中のうきは中〳〵うれしかりけり

何とたゞかりなる色をかざるらんかゝるべしとはかねてしらずや

もとの身はもとの處へかへるべしいらぬところをたづねばしすな

誰もみな生ると知らずすみかなしかへればもとのつちになるべし

わけのぼるふもとの道はおほけれどおなじたかねの月をこそみれ

ゆく末にやどをそこともさだめねばふみまよふべきみちとこそなき

はじめなくをはりもなきに我がこゝろうまれ死すると思ふべからず

まかすればおもひもたらぬこゝろかなおさへて世をばすつべかりけり

雨あられ雪やこほりとへだつれどとくれはおなじ谷川の水

ときおれる心のみちはかはるともおなじ雲居ののりをこそみれ

うづめたゞみちをば松のおち葉にて人すむやどとしらぬばかりに

はかなしやとりべのやまの山おくりおつる人とてとまるべきかは

世をうしと思ひとりべの夕けぶりよそのあはれといつまでかみん

はかなしやけさ見し人のおもかげはたつはけぶりの夕ぐれのそら

あはれみよとりべの山のゆふけぶりそらさへ風におくれさきだつ

やけば灰うづめば土となるものをなにかのこりてつみとなるらん

みとせまでつくりし罪ももろともにつゐには我もきえはてにけり

世の中のさだめごとなるべし。けふこのころしもかやうのあへなきことのあるべしとは、かねて知らずして、驚く人のはかなさよと思ひて、我が身のあるべきを間はれければ、或る人申されけるは、このころは、むかしにかはりて寺をいで、いにしへは、道心をおこす人は寺に入りしが、今はみな寺をいづるなり。見ればぼうずにちしきもなく坐禪をものうく思ひ、工夫をなさずして、道具をたしなみ、坐禪をかざり我慢多くして、たゞところもをきたる名聞にして、ころもはきたるとも、たゞとりかへたる在家なるべし。けさころもはきたりとも、ころもは繩となりて身をしばり、けさはくろがねのしもくとなりて、身をうちさいなむと見えたり。つら〳〵生死りんねのいはれをたづぬるに、ものゝいのちを殺しては地獄に入り、ものををしみては餓鬼となり。ものをしらずしては畜生となり、はらをたてゝは修羅道におつ。五戒をたもちては人に生れ、十善をしやうじては天人にむまる。此のうへに四聖あり。これを加へて十界と云ふ。この一念を見るに、かたちもなし。ちうけんも住所なく、きらひすつべき所もなし。大ぞら雲の如し、水の上の泡に似たり。たゞ起る所の念もなきが故に、なすところの萬法もなし。念と法と一つになしてむなし

きなり。人々のふしんを知らぬなり。たとへば、人の父母は火うちの如し。かねは父、石は母、火は子なり。これをほくそにたてゝ、薪あぶらの縁つくるときはきゆるなり。父母あひあそぶとき、火のいづるが如し。

父母もはじめなきが故に、遂には火のきゆる心にうするなり。空しく虚空より一切のものをはごくみ、一切の色をいだす。一切の色をはなてば、本分の田地とはいふなり。一切草木國土の色は、皆虚空よりいづるゆゑに、かりのたとへに、ほんぶんの田地とはいふなり。

さくら木をくだきて見れば花もなし花をば春のそらぞもちくる

はしなくて雲のうへまであがるともぐどんの經をたのみはしすな

瞿曇五十餘年の說法をきゝて、この數のまゝに修行せんとすれば、瞿曇最後にのたまふやう、はじめよりをはりにいたるまで、一字も說かずといひて、かへつて手づから花をさしあげさせ玉ふを、迦葉かすかに咲ひしとき瞿曇のたまふ樣、我にまさしき法のたゞなる心ありとて花をゆるしけるを、いかなるいはれぞやと問ひければ、瞿曇の玉ふ樣、我五十餘年のせつ法は、たとへばおさなきものを抱かんとするとき、手の内にものある事をいひていだくが如し。我五十年の說法は、この迦葉をまねくが如し。此の故につたへ玉ひし所の法、かのおさなきものをいだきとりたるところなり。然るに、此の花は身をもてなして知るべきにあらず。心にもあらず、口にいひても知

るべからず。此の身心をよく心えべし。もの知りたる人とはいはるとも、佛法者とはいふべからず。此の花は、三世の諸佛の世に出て一乘の法とは、この花のことなり。天竺の二十八祖、唐土の六祖よりこのかた、本分の田地よりほかによのものはなし。一切のものはじめなき故に、大といふ。空虚より一切の八識をいだすなり。たゞ春の花の夏秋冬、草木の色も虚空よりなすなり。また四大といふ土水火風の事なり。人ごとにこれを知らず。いきは風、あたゝかなるは火、身のうるほひて血氣のあるは水、これをやきもうづみもすれば土になり、それもはじめなきが故に、とゞまるものひとつもたし。

なに事もみないつはりの世なりけり死ぬるといふもまことならねば

みな〳〵まよひのまなこよりは、身は死ねども、たましひはしなぬは、大なるあやまりなり。悟る人のことばには、身もたねもひとつにしぬるといふなり。佛といふも虚空の事なり。天地國土一切の本分の田地にかへるべし。

一切經八萬法をうちすてゝ、此の一まきにて御心得候べし、大安樂の人に御成候べし。

かきおくも夢のうちなるしるしかなさめてはさらにとふ人もなし

虚堂七世東洞前大德寺一休子宗純

康正三年四月八日

骨 終

あみだはだか物語

むかし小笹の少將爲忠と云ふ人、一休和尚の處に到りて申しけるは、我無智愚純の身なれば、坐禪參學の道にも至りがたし。只一向に彌陀の他力を願ふて、名號を稱ふる外餘念なし。然れども愚案にて不審晴れ難し、御尋ね申さん。偖て阿彌陀は、西方十萬億土に住み給ふとかや。其の十萬億土にまします佛を、居ながら名號を唱へて十萬億土に通ずる謂れなし。我等如き無智の盡何とも心得がたし。御尋ね申さん。

一休答へて云はく、阿彌陀佛は、西方十萬億土より十方世界へ光明を放ち、一切衆生を照し玉ふ佛なれば、十萬億土へも通ぜざらんや。即ち觀經に云はく、光明は、十方世界を照して念佛の衆生を攝し取て捨て玉はずと說き玉ふも是れなり。又深く內證に立入りて見れは、阿彌陀佛は、石の中の火の如し。此の火は、法界十方の虛空に滿々として、空劫已前より有る火なり。縮るときは、芥子の內にも龍り、石の中にありと雖も、目にも見えず。其の石を探れども、熱くもなく冷たくもなし。自ら現はれ出て燃ゆることもなく、又去りて消ゆることもなく、何時も絕

えず有りて、鐵を合せば、忽ち火の顯はれ出るが如し。彌陀佛も法界の虛空に自然として、空劫已前より　いつも絕えず有りて、來て現はれ玉ふこともなく、又去て隱れ玉ふこともなし。名號を稱へ心實信心深き衆生の機の前には、來迎ありて、光明を照し玉ふ。之を淨土と定め住み玉ふ。縱へば大空の月、諸〳〵の水に宿り玉ふといへども、濁れる水には宿り玉はず、澄める水にのみ宿り玉ふが如し。又水晶は、內外眞實淸淨にして、正に淸ければ、同じく顯し宿り玉ふ故に、水火を取るもの也。然れども濁れる玉には現はれ玉はず。阿彌陀佛も此の如し。之を思へば當に目の前を離れ玉はず。故に觀經には去此不遠と說き玉ふなり。此を以て、十萬億土も遠からず。唱ふる名號も通ずる事を知り玉ふべし。又阿彌陀佛は、邪見放逸なる人、貧き人、賤き人の嫌ひなく、總じて皆宿り玉ふと雖も、內外淸淨にして、眞實の心なければ、顯はれ玉はず。縱へば不淨なる泥土の底に交りたる石をも取り揚げて、淸淨にして打出せば、火の現はれ出るが如し。衆生の誠の心は、鐵と石とを打合するに似たり。是れ阿彌陀佛の根本也。然るを釋尊末世の衆生の爲めに利益方便を廻らし、阿彌陀佛とは名づけ玉ふ也。わが宗には、悟りと云ひ、又佛性と云ふも是れなり。また法華妙典の功力は有難く貴し。三世の諸佛出世の本懷、衆生成佛の直路なれば、諸〳〵の經王なり。則ち法華一の卷に、十方諸土の中には、唯一乘の法のみ有りて、二もなく亦三もなし。佛力便の說を除くと說き玉ふ。其の二もなく三もなき一味御法と云ふも、

佛方便說を除て、眞實は只此の一字に極まるなり。然れども此の妙の一字は、平等一佛の妙なり。妙法蓮華經の八卷は、只妙を說き現はさんが爲めの敎なり。又萬法一如と說き玉ふも是れなり。少將問ふて曰く、東西南北ある其の中に、西方を取りわけ淨土と定めて、阿彌陀佛の住み玉ふ謂れ如何。

一休答へて曰く、西は秋なり、一切の萬物收まりて成就する方なり。萬物千草皆東に生じて夏を送り、秋は悉く實なり。葉落ちて收る。東は物の生ずる方なり。日月衆生も皆東に出で、南の陽を廻り、北の陰に拱して、又東に生ずる物なり。然れば其の一世の間を、惡業、煩惱、執着愚痴、妄念の迷に埋れて輪廻すれども、大に悟れば、悉く迷ひを消滅し、輪廻を遁れ收り成就する故に、悟れる人の五體を、西方に形取りて淨土と名づけ、阿彌陀佛は住み玉ふなり。又東西南北を色に取るときは、北は黑し、東は靑し、南は赤し、西は白し。四方の角は、中央にして黃なり。西の白きは、一切萬物の色極る處にして白し。雪は寒の極り、夏熱に極まるときは、白雲に現はる、世人之を萬同太郎と名づく。火も新に向て赤き色を現はすと雖も、薪盡きて極る所は、白くゼウと云ふ灰になる物なり。人間も年老極るときは、白髮となるものなり。古歌に「越後なる雪の山邊の白兎おのが心に身もなりにける」と。夫れ白色は、五色の根本也。萬の物を白色の根本に磨き成せば、何色に染めなさんも自由自在なるが如し。人間も觀念工夫を以て、彼の一心

の根本に磨き立て見性成佛すれば、賴むべき淨土もなく、恐るべき地獄もなく、遁るべき煩惱もなし。善惡不二となり、生死自在にして、生の中何れへ生ぜんも心の儘也。之を則ち眞如の珠とも、又は如意寶珠とも名づけて、言語道斷、安樂にして、言の葉にも述べ難く、樂み極まる故に能く悟りたる處を極樂淨土と名づけ、愚痴の凡夫に之を顯はし玉ふなり。此を以て、西方を淨土と定め玉ふことを知り玉ふべし。又此の五尺の身を大千世界に配分して、元の如く十方虛空に齊く悟り得て見れば、何國も東西南北共に分て云はん方なし。爰を以て、本來無二東西一何處有二南北一とて、元より東西もなし、何處にか南北有らんやと古人も釋し玉へり。又大千世界を、此の五體に縮め引當て見れば、首は須彌、兩眼は日月、出入息は風、手足は四洲、毛髮は草木、骨は石、血は水、肉身は土、故に厭離穢土欣求淨土と敎へ玉ふなり。穢土は、けがらはしき土と書けり、迷ひの衆生の肉身體なり。之を厭ひ離れよとの義なり。淨土とは、いさぎよき土と書けり、悟りたる人の肉身體なり。之を欣ひ求めよと慥に敎へ玉へども、之を悟る人稀れなり。總て此の五尺の身の中に、大千世界をつゞめ持たる身なり。法界と平等にして、少しも違ふことなし。法界の虛空に色形なくして、一心失せざる所、則ち彌陀佛なり。形なき佛を法身佛と名づけ、形を現はす佛を報身佛と名づけ、八相成道して衆生を利益し玉ふ佛を應身佛と名づく。之を佛の三身と云ふ。此の如く觀ずるときは、三身の外に淨土も佛もあるべからず。此の故に、唯心の淨土、己

心の彌陀とは教へ玉ふなり。又此の身に離別して住處もなき佛を法身佛とも名づけ玉ふなり。故に金剛經に云はく、應無處住而生其心と說き玉ふ。則ち此の文を以て、六祖大師も大悟し玉ふと云へり。ある歌に「彌陀頼む人は寢覺のほとゝぎすおのが名唱ふ曉の空」、又「阿彌陀とは南にあるを知らずして西を願ふははかなかりけり」と。歌の形は南なり、心は皆身に在りと云ふ心なり。此等の意味を悟り玉ふべし。

少將問ふて曰く、然れば卽ち淨土も阿彌陀も、皆此の五體を離れ玉はず。然るに十萬億土と遠く隔て導く謂れ如何

一休答へて曰く、十萬億土と云ふは、遠きことにも非ず、此の五體を十萬億土と定め玉ふなり。如何となれば、此の五體の中にある所の毛の數、筋骨、肉、五臟、六腑其の外悉く有るとあらゆる物を逐一算用して見れば、十萬億なり。衆生の心、此の十萬億の煩惱に遠く隔られ、彼の阿彌陀佛を現し奉ることなし。故に迷の衆生の機の前には、十萬億土と遠く隔て導き玉ふなり。少將問ふて曰く、然らば八宗九宗共に賴む心の淨土も佛も、皆同く一體に候や、又格別に子細これ有りや

一休答へて曰く、諸宗共に佛心佛性と號し觀ずる處は、皆是れ平等一如にして一佛是なり。然りといへども、衆生の根機種々不同なるが故に、佛の入門も亦一に非ず、宗々門々を立て、佛性の

名を替へ、衆生夫々何れの道になりとも、氣根に應じて佛門に引入れ、彼の一佛の佛性を知らしめんが爲めなり。然れば、正道顯密の宗には、之を大日と名づけて本尊とし、或は金剛の正體と名け、或は本不生と名づけて、此の根本を悟る。法華には　妙の一字を本尊として、妙法蓮華經の五字に極めて之れ唱へ、禪宗には、本來の面目、或は主人公、或は法身佛、又は眞如の月などと號し、色々に名づけ、觀念工夫して、修行の道、種々之れ有りと雖も、尋ね入て見れば、本有常住の如來は　平等一如にして、只是れ彼の一佛なり。譬へば人生るゝとき、手振りの赤裸の子にて、名はなけれども、親色々に工夫分別して、子の行末を思ひ、或は鶴千代、龜松などゝ、幾久しく目出たき名を付るが如し。其の子、後には、官位に登り　左大臣、右大臣、又は關白太政大臣と登り玉ふ人もあるべし。心も其の時々に變じて、早や衆生を憐む心が出來て、世を利益するものなり。そのとき是れ何人ぞと尋ぬれば、別の人にあらず、元の鶴千代なり。其の一名もなき鶴千代已前を省れば、元の手振りの裸子なるがごとし。彼の一佛も此の如く、一に其の一名もなきとつゝとむかし父母未生已前を悟り得て見れば、只十方世界の虛空に法如として來りもせず去りもせず　何時も絕えず有りて、色形もなく、一名もなく、言の葉にも述べがたき一佛なるを、世尊種々工夫分別して、衆生の爲めに方便利益を廻らして、色々に名づけ玉ふ一佛なり。此の處の理を能く〳〵明め玉ふべし。

少將問ふて云はく、名こそ替れ、其の平等一佛なるものを、如何ぞ巴々樣々に佛の形を現はし或は柔和忍辱、或は悪魔降伏の爲めとて利劍を提げ、身より火焔を放ち、荒き形を現はし玉ふもあり。其の利益誓も格別にして種々ある謂れ如何。

一休答へて曰く、彼の一佛は、水の器物に從ふが如し。陰陽寒熱の因に依りて、種々變ずるが如し。寒によりては、霜霰雪氷と現はれ、日の熱によりては、引上げられて雲霧雨露と現れ、又降て國土を潤し、草木を生じ、人界を養ひ、火に向ては、熱き湯となると雖も、其の湯冷すれば、又本の水となるものなり。其の水強く寒しぬれば、堅き氷となり、其の氷解けぬれば、又本の水となるが如し。其の水陰陽當分にして、熱くもなく冷くもなく、中道の處、彼の一佛なり。然れば、春秋兩水岸は、陰陽中道當分の時なり。故に時正と名づけ、佛を願ふ時なりと教へ玉ふなり。諸水集りて洪水となれば、俄に山より草木を流し、千丈の堤も一時に亡し、數多の人家を損じ、生物を殺害して悪とも變ずることあり。是れみな寒熱の爲すところ、根本みな水なり。然れば、陰陽寒熱にて世界國土變ずる所を、佛の形に現はし、色々に方便を說き玉ふ。是れ皆衆生を利益し救はんが爲めなり。釋尊、愚痴の衆生に之を知らしめんが爲めに、八萬の諸聖經を說き玉ふと雖も、一切の衆生鈍根にして、微妙の法を悟らず。故に深く之を憐み玉ひて、悟り得ざる愚鈍の衆生に知らしめんが爲めに方便して、彼の一佛の心を八萬諸聖三世の諸佛諸菩薩を阿彌

陀の三字に縮めて、佛とは名づけて之を唱へさせ、十方三世一切の諸佛諸菩薩八萬諸聖經、皆是れ阿彌陀佛と說き玉ふなり。達磨大師の曰く、彌陀は、是れ諸佛の總名なりと說き給ふも此の意なり。夫々諸佛の名號その數多しと雖も、畢竟する所は、一心の妙を出でず。又惠心の釋にも安養都率は、胞中の證、彌陀彌勒は、一身の異名なりと釋し玉ふも是れなり。

少將又問ふて曰く、然れば、諸宗の祖師達も、平等一佛なることは、何れも知り玉ふや。如何。

一休答へて曰く、何れの祖師も、見性成佛を大悟し玉ふ人々なれば、如何ぞ知り玉はざらんや。

少將々問ふて曰く、其の一佛なる事を知り玉はゞ、何ぞ他宗を難じ、我宗を自慢して、動やもすれば宗論と號して善悪を爭ひ玉ふや。

一休答へて曰く、是れ一佛の爭ひにあらず。諸宗共に願ひ觀ずる處は、彼の一佛を現はさんが爲めなり。其の一佛にわけ入りて見れば、其の道種々多き故に、難易の善悪を爭ひ玉ふこともあるべし。故に歌にも「わけのぼる麓の道は多けれど同じ雲井の月を見るかな」と詠めり。譬へば、王宮を拜せんと田舍より都へ登るに、數多の道あるが如し。或は海上より登り、或は山路より登り、或は陸地より登る人も有るが如し。其の道路の善悪を爭ひ玉ふことにして、決して一佛の爭ひにあらず。偖て十方より都へ登り、王宮の門に入りて見れば、只一箇の玉體のみ有るが如し。

又其の宗々門々を自慢して、衆生に深く信心を起させ、其の一門に引入れて　彼の一佛を拜せしめんがためなり。但しこれは我が宗門の示す處の道に無之候へども　御尋ねゆゑ御答へ申すのみ。猶此の外に不審の處あらば、遠慮なく御尋有之度　我が宗門の取捌き方は、大方此の如し　去り乍ら、八宗九宗共に其の宗旨〳〵の取捌方種々有之、定めて面白き手段も有之、夫々宗門に就て御尋ね有之度と申し玉ひければ、少將扨ても〳〵難有御示し哉と、今は何の御尋ね申すべき事も無之、長き夜の闇の晴れたる心地して、雨夜の空も晴れ、眞如の月現はれ出て、胸中の爽なること、面鏡の相對するが如く、又此の五尺の境界も、十方の虚空に齊しき樣に覺え候と申されければ、一休其の心の境界則ち是れ見性成佛の人に同じくして、即ち彌陀の來迎と云ふ者なりと申し玉ひしかば、少將爲忠大に隨喜讃歎して念佛怠らず。其の後六十四歳にして大往生の素懷を遂げられしとかや。

あみだはだか物語　終

二人比丘尼

あるびくに山居してあり。又びくに來りて物語りしていはく、かみをそり、ころもをそめて、かくのごとくなり侍べれども、いまだ一大事の因緣をしらず、びくにゝなりたるかひさらになしと思ひ、これまで參りて候。御慈悲をもつて、心得候やうに御しめしあれといふ。こたへていはく、みづからもかくのごとくなり候へども、未徹の者にて候。去りながら、心中の分けかたのごとく申すべし。それ生死りんねのこんげんをたづぬるに、有相執着は妄念よりおこりて、わづかに世間にぢやくするなり。世間にぢやくするこころをひるがへせば、また佛にぢやくするねんを生ず。是れひとへに一心の妙なるいはれをしらざる故に、みだりにぜんあくの心にしたがふ。然にこの心は　ひとり一さいの相をはなれて、かゝりて萬法のみなもとをしる。此の心を種として、一さいのねんはおこるなり。物の命をころしては、ぢごくにおち、けんどんにしては、ちく生に落ち　はらをたてゝは修羅道におつ、五戒をたもちては、人間にむまれ、十戒をたもちて、天上にむまる。これを六道といふなり。このうへに、四生をくはへて十かいといふ。みなこれ一

二人比丘尼

ねんをかへりみるに、とるべきかたちもなく、みるべきいろもなし、おこりきたるはじめもなく、めつしてさるをはりもなく、中間も又住所もなし。さればたゞ念よりをこるところの十かいなり。佛もまことになければ、きらひすつべきところもなし。たゞ大ぞらの雲のごとく、水の上のあわに似たり。只おこるところの一念もむなしきがゆゑに、なす所の萬法もまことにあらず。すなはち一念の外に萬法もなく、萬法の外に一念もなし。念と法とひとつにして、ことゞくくむなしきなり。一さいの者をみるとき、みなむなしと思ふ念のおこるも、むなしきと思ふべからず。むなしとも思はざるところを、よしともおもふべからす。さては、一さいの物をよしともあしともおもはざるところを、よしとも又思はずして、つねにざぜんすべし。

問ふていはく、ひとのはじめは、いかなるものにて候や。こたへていはく、われらもこのふしんをこそなして候へ。たとへば、人の父母は、火うちのごとく、しかばねはちゝ、いしははゝ、ひは子なり。これをほくそにうちつけて、いわうたきゞにつくるがごとし。父母のあひあふところ、ひうちのかどにうちあはせて、ひのいづるごとく、人はいづるなり。されば、ひは、はじめなきものなれば、つひにたきゞつきぬるとき、ひもやがてきゆるなり。ちゝはゝも、はしめしかりゆゑに、つひにむなしきなり。しかれども、本來のこゝろは、石中のひのもゆることもなく、きゆることもなきがごとく、人〳〵具足しこく圓成うして、かくることもなく、あまるもなきな

り。

問ふていはく、なにものかぢごくにおち候や。こたへていはく、人のこゝろは緣によりて出でくるものなり。そのおこる心を、實にありと思ひて、ぜんあくをわけ、この二つの心をたねとして、こゝろにかなふことをばよろひてりんねし、こゝろにかなはざることをはらだちて、ぢごくの果報をかきしなり。されば、心にしたがふをもよろこばず、心にさかふをもなげかず。一さいの事をしりたりとも、この一大事をあきらめずば、りんねのもとひなり。もし一心をあきらめば、昔今のつみをめつして本分にかなふべし。

問ふていはく、いかなるを道心と申し候や。答へて曰く、まことの道心とは、佛にありてもまさらず、衆生にありてもおとらず、生じてきたらず、死してさらず、いかなる故にかやうなるぞといへば、目にみ、耳にきゝ、心に思ふ六こんにふれずして、一さいのもの、みなむなしくなりて、一つもとゞまらざりけるとみるを、道心とは云ふなり。世のつねの人の、さだめなきうき世なりとてすつるは、しばしのことなり。また一さいむなしともおもひすつまじきことなり。むなしき虛空より、一さいのものをはごくみ、一さいのいろをいだす。一切の色をはなれて、一切の色をいだす虛空なれば、本分の田地とは云ふなり。いかなるゆゑに本分とはいふぞなれば、一切の草木は、みな地より生じ、一切の色は虛空よりいづるがゆゑに、かりのたとへをもちて、ほんぶん

の田地とは申すなり。

さくら木をくだきてみれば花もなし花をば春のうちにもちけり

このうたのこゝろをもちてしるべし。むなしき虚空より一切のいろを出すこと、たゞはるの花のみにあらず、夏秋冬の草木のいろのうつりかはることもしるべし

問ふて曰く、出家はろさいするがほんにて候や。

答へて曰く、それほどの事は、問ふまでもなきことなり。かみをそり、ころもをそめてあらば、鉢袈裟よりほかは、とももつべからず　あしたには、人のかどにたちてこつじきをすべし。ゆめ〳〵たくはへもつべからず。だんなの僧を供養するやうをみれば、一ばんをだに供養すれば、それより外のことなしと思ふ。又出家も經をよみ亡者をたすけ、信施をつぐのはんとする僧もだんなも、ぢごくに落つべし。

又問ふ、さては、いかやうにだんなを教へ候べきや。

こたへて曰く、さきに申すやうに、本分の供養をなすべし。ある人いふは、工夫のためにはあらず。亡者のために經をよみ、だらにをみつべしと。かやうにいふ人の、工夫と經だらにも、すべてあたらず。たゞわがこゝろの源をさとりぬれば、一さい衆生をたすくべし。此の故に、こゝろざす亡者の力にかぎるべからず。いかなるゆゑといへば、一切のほとけと衆生とは、みなまぼ

ろしなる故なり。

問ふて曰く、人の死し候時はいかやうになり候や。こたへて曰く、四大をわけてかへし候なり。四大といふは、地水火風なり。人ごとにこれをはなれざるはなし。されば、いきは風、身のあたゝかなるは火、身のうるほひのあるは水なり。この身やきもし、うづみもして、つゐにはつちとなる。このとき主としてとゞまるものなし。四大分けてかへすをみるときは、かりにつけたる名なり。人さとりの目よりまよひのものをみれば、常住なりとみるゆゑに、め此にみたり。

何ごともみないつはりの世の中にしぬるといふもまことならねば

これを不老不死のくすりといふなり。

問ふて曰く、いかなるをまことの佛法と申し候や。こたへて曰く、佛法を修行するとは、佛法をならふにはあらず。わがひがことをやぶるなり。ひがごとゝ云ふは、迷悟凡聖の四相をいふなり。まよひとはまよひ、さとりとはさとり。凡とは衆生、聖とは佛なり。此の思ひをやむれば、おのづから本分にちかづくを、いまときの人は、まよひをいとひ、さとりをうらやみ、凡夫をはなれてほとけをもとむるこゝろあり。この四相にさへられて、本分の佛をくらますなり。本分の佛を、大光明藏三昧とも云ひ、また金剛の正體ともいふ。或は、心源とも云ふ。本來の面目などゝ申すも、みな是れほんぶんの田地の名なり。一切のいろかたちあるものは、みな本分にかへ

すべし。一切のいろかたちあるものは、まよひの一念より生じて、まことにあるものにあらず。みなかりなるものなり。今時の人、この理をしらずして、かべにむかひてざぜんするとき、縁によりておこるねんは、みなまことにあらざることをしらず。只一切のことを思はざるをさとりと思ひ、まよひの雑ねんをおこさじとうちはらひて、なにごとも思はぬものにならむとて、すこししづかなれば、もう〳〵としてねぶる。またかねてあてがひはからざる事の出できたりたれば、ざ中にいてくることなれば、これもよきことやらんとうたがひ、またねんのおこるときは、古人の言葉を公案にして、これにて妄念をさけんとする人もあり。古人の公案を人にあたふることは、かやうの用にはあらず。たゞ本分をしらざる人に、古人の本分にかなひしときの詞を、いかなるゆゑに、この人かやうにいふやらんとうたがはしめて、これを公案にして、不審をとほりて、本分にかなはしめむがためなり。此の所をきゝて、迷悟凡聖の心をやめば、自ら本分にちかづくべし。男はおとこのまゝ、おんなは女のまゝにて、此の身をも、この心をも、これなきことをしりて、五慾のなかにてのぞむ所なく修行するをば、火中の蓮華にたとへて、善男子、善女人と、ほとけこれをほめたまふ。この五よくも、えんによりて出でくる故に　まことなし。みなまぼろしなれば、いとふべきまことの身もこゝろもなきなり。これほどの幻のふをもちて、いのりもてあつかふことをいましめて、もろ〳〵の經にとき給ふを　此のをしへの如くにてなくして、あま

つさへ、この經をよみて身をいのるもの、いかでか佛の御こゝろにかなふべきや。たとへば、人の大事をふみにかきて、下人につかはしたらんに、もしこの下人どんごんにして、みの用事をば、しらずして、これをまい日とりいだして、まきかへして、文字をかぞへ日をおくるとも、いかでかそのぬしの心にかなはんや。けつくぬしのこゝろにたがふべし。佛法も又かくの如く　今時經をよむ人をみれば　その經のをしへの如くにはふるまはずして、佛のいましめたまふ名利のために、この經をよみて、佛心をすかしたてまつりて、ものをこひたてまつる。いかでか佛の御心にかなふべきや　かやうの人のこゝろに同心して、さらば、汝が申す事をかなへんとて、佛法にそむくことをしたまはむや。神に三ねつのくるしみあると云ふことも、衆生はどんごんにして、とんじんちの三のとがなり。これによりて、地獄におつるをなげき給ふを、三ねつのくるしみありとはいふなり。とんとはむさぼる、じんとはいかり、ちとはぐちの事なり。佛法をしらずして、この三の心をおこすをいましめ給ふなり。今時の人のれいをなすは、みなぶつしんの御心にそむく事のみなり。されば、これほどに、人の申す事の思ふやうにかなはぬは、佛神の御心に御うけなきが故なり。かやうの人の佛心を信ずるは、佛神の用所にはあらず、たゞ身のためなり。佛心を信ずるといふは、かみほとけの加護によりて、われら此の佛法をきゝこれによりて生死を離れんことは　ひとへに佛の恩にあらずや。此の報恩のために、朝夕禮拜をなせば、まことに佛神を信ずる

人と申すなり。かやうの理をしらずして、生死を離るゝ理をしらぬ心おもくして、心のまゝにふるまひ給ふ人間は、老少不定にして、出るいき、入るいきをまたずして、ごくそつのせめのがれがたし。必ず地獄に落つべし。がき、ちく生、修羅、人は、六道のほどは、みな我心をまことにありと思ひなすによりてなり。只この身も心も幻の如くなれば、すべてまことなしと思ひて、一切のことをなすとも、皆是れまぼろしの世と思ふべし。もし此の身も心も眞にありとおもはゞ一切の善根みなりんねの業なるべし。

問ふて曰く、こゝに大なるふしんあり。佛五十年の間説法し給ふ教のまゝに修行せんとすれば、佛のさいごにときたまふ、はじめよりをはりまで、一字をもとかずとのたまひて、一枝の花をさしげて大衆にみせしめたまふ。大迦葉尊者すこしわらひしは、いかやうなる故ぞや。

こたへて曰く、ほとけ五十年のせつ法は、たとへば、子を抱かんとするにちかづかず、手の内にものゝあることをいひて、ちかづけていだくが如し。五十年のせつ法は、手をあげておさなきものをすかすがごとし。この故に、方便といふ。佛の迦葉尊者につたへ給ふ所の法は、かのおさなきものをいだきとりたるところなり。しかるに、此の花の心は、身をもつてしるべきにもあらず、心を以てはかるべきにもあらず、口をもつてしかるべきにもあらず。身口意をからずして修行するといふことを、身をかりて坐禪し、心をかりてなし、口をかりて人に問ふべし。この心をし

らんとおもはゞ、一切の所にて、さても佛のあげ給ひし花を、迦葉の笑ひ給ひしこゝろはいかなるところぞとみるべし。此のいはれをしらずして、一切の法門をしりたりとも、世の中の物しりたる人とはいふとも、佛法者とはいふべからず。この花は、これ三世の諸佛のよに出で、一乘の法とのたまふも、この花のいはれなり。二十一祖唐土の六祖大師よりこのかた、一大事といふは、このことなり。一大事といへばとて、世間の人のしにくきことを、一大事といふやうにはこゝろ得るべからず　一大事といふは　本分の田地なり。本分の田地とは、こゝろの源なり。心の源とは、虛空のごとくなる物なり。虛空の如くなる本分の田地は、一切ものゝ源たり。たゞ一大事をしらざらんと思はば、一切のいたづらごとをやめて、これをたづぬべし。此の花のいはれをしりたらん人は、一切のものみな佛法なり。故にいたづらなるもの一物もなし。これをしらざる人は　佛法を思ふも、いたづらなるべし〳〵。

二人比丘尼終

道歌

八十五首

○有漏ぢより無漏ぢへかへる一やすみあめふらばふれ風ふかばふけ
○なにごとも夢幻とさとりてはうつゝなきよのすまゐなりけり
○本らいもなきいにしへの我なれば死ゆくかたも何もかもなし
○問へばいふとはねばいはぬ蓮磨どのこゝろのうちになにかあるべき
○朝露はきえのこりてもありぬべしたれかこの世にのこりはつべき
○はじめなくをはりもなきにわがこころうまれ死するも空の空なり
○三とせまでつくりしつみももろともにつひにはわれもきえはてにけり
○ゆくすゑにやどをそことも定めねばふみまよふべきみちもなきかな
○釋迦といふいたづらものが世にいでゝおほくの人をまよはするかな
○心とはいかなるものをいふやらんすみ繪にかきし松風の音

○そのまゝにうまれながらの心こそねがはずとても佛なるべし
○嘘をつきぢごくへおつるものならばなきことつくるしやかいかにせん
○極樂もぢごくもしらぬ思ひでにうまれぬさきのものとなるべし
○つくりおく罪の須彌ほどあるならばゑんまの帳につけどころなし
○雨あられ雪や氷とへだつれどおつればおなじ谷川の水
○悟り得て心のやみのはれぬれば蘇悲もなさけもありあけの月
○元の身はもとのところへかへるべしいらぬ佛をたづねばしすな
○夜もすがら佛の道をたづぬればわがこゝろにぞたづねいりける
○國いづくさとはいかにと人とはゞ本來無爲のものとこたへよ
○本來の面目坊が立委ひとめ見しより戀とこそなれ
○なにごとも見ざるいはざるきかざるはたゞほとけにもまさるなりけり
○ふらばふれふらずばふらずふらずともぬれてゆくべき袖ならばこそ
○大水のさきにながるゝとちからも身をすてゝこそうかぶせもあれ
○へつらひてたのしきよりもへつらはてまずしき身こそこゝろやすけれ
○花を見よ色香もともにちりはてゝこゝろなくても春は來にけり

○佛法はなべのさかやき石の髭繪にかく竹のともずれの聲
○世の中の生死の道につれはなしたゞさびしくも獨死獨來
○こゝろよりくびにかけたる傀儡師鬼をださふと佛ださふと
○いまははやこゝろにかゝる雲もなし月のいるべき山しなければ
○ゆく水にかずかくよりもはかなきは佛をたのむ人ののちの世
○べちのことなきぞといふもはやそむくつひにいひえぬだるま一休
○なしといへばなしとや人のおもふらんこたへもぞする山彦の聲
○ありといへばありとや人のおもふらんこたへてもなき山彦の聲
○有無をのする生死の海のあま小舟底ぬけてのち有無もたまらず
○わが宿ははしらもたてずふきもせず雨にもぬれず風もあたらず
○ふくときはうべさわがしき山風もふかぬときにはふかぬなりけり
○はしなくて雲のそらへはあがるともくどんの經をたのまれやせん
○あめあられ雪や氷をそのまゝに水としるこそとくるなりけり
○ふたつなきものとなりえて一もなしすみ繪の風のさてもすゞしき
○いなづまのかげにさきだつ身をしればいま見る我にあふこともなし

○ほらぬ井にたまらぬ水の浪たちてかげもかたちもなき人ぞくむ
○おもひいれは人もわがみも他所ならずこゝろのほかに心なければ
○かへりつゝまた立かへりよく見ればおもふ心もそのこゝろかな
○心とてげにもこゝろはなきものをさとりはなにのさとりなるらん
○今も又十緇八素の友かなしろさんのむかしおもはれぞする
○成佛は異國本朝もろともに宗にはよらず心にぞよる
○萬法の行はよろづの事なればこゝろ〳〵に道をつとめよ
○善修すれど惡事きたるとうらむなよ先世罪業卽爲消滅
○みな人のねはん常樂しらずして生死無事をなげくあはれさ
○佛性は不生不滅のものなればまよへば生死流轉とぞしれ
○よのつねに工夫觀念つとめなばまことのときに心うごかじ
○一切の諸佛菩薩も悲願よりぼだいねはんの成就し王ふ
○當來の三會のはるの花もまた現世の慈悲ぞたねとならまし
○釋迦も又あみだももとは人ぞかしわれもかたちは人にあらずや
○身を入れて爲けだものをすくひしは釋迦のゐんぢの修行なりけり

○物ごとに執着せざる心こそ無想無心の無住なりけり
○みな人のとんじんぐちの悪水はさんづの川のながれとぞなる
○六根につくる罪過のちりほこり四手の山路の高根とぞなる
○はちす葉のにごりにそまぬ露の身はたゞそのまゝに眞如實相
○仏とてほかにもとむるこゝろこそまよひの中のまよひなりける
○ちればさき咲ば又ちる春ごとの花のすがたは如來常住
○ぬらしつる神のなみだのかはくまもなき面かげの月ぞ立ちそふ
○おのづから身はいたづらになりにけり虛空をつねにすみ家と思へば
○かりの世にあだなる露の身をもちて千とせをいはふ人のはかなき
○世のうさにかへてすみぬる柴の戸を問ばしがほなる人もうらめし
○妙なりし法のはちすの花の身は幾世ふるとも色はかはらじ
○露ときえまぼろしとおほふ稻づまのかげのごとくに身は思ふべし
○なげくなよまことの道はそのまゝにふたつともなし又三つもなし
○らく〳〵と心にてこそ彼岸にわたるもやすき法のふな人
○生死のことわりしらめ坊さまは犬のころもをきたるなるべし

○奥山にむすばずとても柴の庵こころがらにて世をいとふべし
○けぶりたつ野邊のあはれをいつまでかよそにみなして身はのこらなん
○ひゞ〳〵に行末とほくなりにけりいつをかぎりのいのちなるらん
○關守にわがこころをやかしぬらんすぐなる道を引かぬる身は
○すみのぼる心の月のかげはれてくまなきものは本の境界
○はかなくもあすの命をたのむ哉きのふはすぎし心ならずや
○三日月のみつればかけて跡もなしとにかくにまたあり明の月
○春ごとに咲るさくらを見るごとになほはかなしと身こそつらけれ
○待得てもほどはなかりし郭公ともをさそひていづち行くらん
○年々にしぐれのそむるもみぢ葉を四方のうつらふためしともしれ
○月は家こころは主と見る時はなほかりの世のすまゐ也けり
○こころをば墨の衣にそめなして身をばうき世の道にまかせて
○しはしげにいきの一すぢかよふほど野べのかばねもよそに見えけり
○色相はそのとき〳〵にかはるとも不生不滅のこころかはらじ
○見るごとにみなそのまゝのすがたかな柳はみどり花はくれなゐ

○誰ぞやたぞ誰よたぞたれたぞこそたぞよ誰はたれなれ　蟹川親當
○うまれぬるこの曉に死しぬればけふの夕べは秋風ぞふく　同
○あさいとのながしみぢかしむつかしや有無のふたつにいつかはなれん　親當妻
○月やみむ月にはみえずながらへてうき世をめぐる影もはづかし　一路居士

道歌問答

○門松はめいどのたびの一里づか馬かごもなくとまりやもなし　一休
○年越はめいどの旅の問屋場が月日の飛脚あしをとゞめず　親當
○光陰は矢ばせを渡る舟よりもはやいとしらばする為を三井寺　一休
○分限に粟津にせゝをつかふなよこゝろ堅固にしまつからさき　親當
○金銀は慈悲となさけと義理と耻身の一代につかふためなり　一休
○世の中は貧者有德者苦者樂者なん者かじやとて末はむしやくしや　親當
○今日ほめて明日わるくいふ人の口なくも笑ふもうその世の中　一休
○世の中は乘合舟のかりずまひよしあしともにめいしよ舊蹟　親當

○一休もやぶれ衣で出るときは乞食坊主と人はいふらん　同
○袈裟ころも有がたさうに見ゆれどもこれも俗家の他りき本願　一休
○衣よりけさより俗の古じゆばんおのが伎倆できるぞたふとき　親當
○振袖も留袖とこそかはれどもはだかにすればおなじすがたよ　一休
○骨かくす皮にはたれも迷ひけん美人といふも皮のわざなり　親當
○皮にこそ男女のへだてあり骨にはかはる人かたもなし　一休
○なにごともみな僞の世なりけりしぬるといふもまことならねば　親當
○生れてはしぬるなりけりおしなべてしやかもだるまもねこも杓子も　一休
○さとりなば坊主になるな魚をくへ地獄へいつて鬼にまけるな　親當
○鬼といふおそろしきものはどこにある邪見の人のむねにすむなり　一休
○極樂やぢごくがあるとだまされてよろこぶ人におぢる人〳〵　親當
○この世にて慈悲も惡事もせぬ人はさぞやゑんまもこまりたまはん　一休
○ぢこくとは何をいはまのこけな奴いろと欲とで身をやぶる人　親當
○死んでから佛といふもなにゆゑぞこゝともいはず邪佛にならねば　一休
○死んでから佛になるはいらぬものいきたるうちによき人となれ　親當

○追善にあふたほとけが盆棚へどし〳〵くればうかむせはなし　一休
○ほとけとはなんだらぼうし柿のたね下駄も佛もおなじ木のはし　親當
○ほとけにもなりかたまるはいらぬもの石佛らを見るにつけても　一休
○まよふなよ五りんの石の墓じるしつみかさなりてあるとおもへば　親當
○引導は無事なるときにうけたまへまつごのたびにおもむかぬうち　一休
○ひとり來てひとりてかへる道なるにみちをしへんといふぞをかしき　親當
○ひとり來てひとりかへるも迷なりきたらず去らぬ道ををしへん　一休
○つまや子が側でなげくもきゝいれず死んでゆく身になんの引導　親當
○極樂は十萬億土はるかなりとてもゆかれぬわらじ一足　一休
○歳〳〵に悪魔外道のながさるゝその西方にゆきたくもなし　親當
○きのふ過去けふの現世にあす未來おきての神に寢ての身佛　一休
○一代の守本尊をたづぬるにわれ人ともに飯と汁なり　親當
○世の中はくふてかせいでねて起てさてそのあとは死ぬるばかりぞ　一休
○肉もなくよくしやれかうべ穴賢めでたくかしくそれよりはなし　同
○うき世をばなんの絲瓜とおもふなよぶらりとしてはくらされはせず　親當

○世の中はへちまの皮のだん袋そこがぬければ穴へどんぶり　一休
○あら樂や虚空を家と住なして心にかゝる造作もなし　同
○欲あかを洗ひおとせばさつぱりとじゆばんにつけしのりぞたふとき　親當
○煩惱の眼にばゞをふんづけて福はをしいとほしいとのよく　一休
○やけば灰埋めば土となるものをなにがのこりてつみとなるらん　親當

道歌終

山姥

ワキ次第「善き光ぞと影たのむ、〈〉、佛の御寺尋ねん。　詞「是は都方に住居仕る者にて候。又是に渡り候ふ御事は、百魔山姥とて隱なき遊女にて御座候。　かやうに御名を申すいはれは、山姥の山廻りするといふ事を、曲舞に作つて御謠ひあるにより、京童部の申しならはして候、又此頃は善光寺へ御參りありたき由承り候ふ程に、某御供申し、唯今信濃國の善光寺へと急ぎ候。　都を出でて小波や、志賀の浦船漕がれ行く、末は有乳の山越えて、袖に露散る玉江の橋、かけて末ある越路の旅、思ひやるこそ遙なれ。　歌「梢波立つ汐越の、〈〉、安宅の松の夕煙、消えぬ憂き身の罪を切る、彌陀の劍の砥並山、雲路うながす三越路の、國の末なる里問へば、いとど都は遠ざかる、境川にも着きにけり。〈〉、

ワキ詞「御急ぎ候ふほどに、是ははや越後越中の境川に御着きにて候。　暫く是に御座候ひて、猶々道の樣體をも御尋ねあらうずるにて候。　ツレ詞「げにや常に承る、西方の淨土は十萬億土とかや、是は又彌陀來迎の直路なれば、あげろの山とやらんに參り候ふべし。とても修行の旅なれば、乘物をば是にとゞめ置き、徒はだしにて參り候ふべし、道しるべして給ひ候へ。ワキ「あらぬ思議や、暮るまじき日にて候ふが俄に暮れて候ふよ。さて何と仕り候ふべき。シテ「なう〳〵旅人御宿參らせうなう、是はあげろの山とて人里遠き所なり、日の暮れて候へば、わらはが庵にて一夜を明させ給ひ候へ。ワキ「あらうれしや候、俄に日の暮れ前後を忘じて候。　やがて參らうずるにて候。　シテ「今宵の御宿參らする事、とりわき思ふ子細あり、山姥の歌の一節うたひて聞かさせ給へ、年月の望なり鄙の思出と思ふべし。其ためにこそ日を暮らし、御宿をも參らせて候へ。いかさまにも謠はせ給ひ候へ。ワキ「是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。さて誰と見申されて、山姥の歌の一節とは御所望候ふぞ。シテ「いや何をか包み給ふらん、あれにまします御事は、百魔山姥とてかくれなき遊女にてはましまさずや、まづ此歌の次第とやらんに、よし足らの山姥が、山めぐりすると作られたり。あら面白や候。　詞「是は曲舞に依りての異名、さて誠の山姥をば、如何なる物とか知ろしめされて候ふぞ。ワキ「山姥とは山に住む鬼女とこそ曲舞にも見えて候。　シテ「鬼女とは女の鬼とや、よし鬼なりとも人なりとも、山に住む女ならば、妾が身の上にてはさぶらはずや、年頃色には出ださせ給ふ、言の葉草の露ほども、御心には掛け給はぬ、恨み申しに來りたり。道を極め名を立てゝ、世情萬德の妙花を開く事、此一曲の故ならずや、然らば妾が身をも弔ひ、歌舞音樂の妙音の、聲佛事をもなし給はゞ、などか妾も輪廻をのが

れ、歸性の善所に至らざらんと、恨みをゆふ山の、鳥獸も鳴きそへて、聲をあげろの山姥が、靈鬼是まで來りたり。

ツレ「不思議の事を聞く物かな、さては誠の山姥の、是まで來り給へるか。シテ「我國々の山廻り、今日しもこゝに來る事は、我名の德を聞かん爲なり、謠ひ給ひてさりとては、我妄執を晴らし給へ。ツレ「此上はとかく辭しなば恐ろしや、もし身のためやあしかりなんと。はゞかりながら時の調子を、取るや拍子をすゝむれば、シテ「しばさせ給へとてもさらば、暮るゝを待ちて月の夜聲に、謠ひ給はゞ我も又、誠の姿をあらはすべし。すはやかげろふ夕月の、地「さなきだに、暮るゝを急ぐ深山邊の、地「暮るゝを急ぐ深山邊の、雲に心をかけ添へて、此山姥が一節を、夜すがら謠ひ給はゞ、其時わが姿をも、あらはし衣の袖つぎて、移舞をまふべしと、いふかと見れば其まゝ、かき消すやうに失せにけり。〈〉。ツレ「あまりの事のふしぎさに、さらに誠と思ほえぬ、鬼女が詞を違へじと、地「松風ともに吹く笛の、〈〉、聲すみわたる谷川に、手まづさへぎる曲水の、月に聲すむ深山かな。〈〉。後ジテ「あら物凄の深谷やな、〈〉、寒林に骨を打つ靈鬼。泣く〈〉前生の業を恨む、深野に花を供ずる天人、かへす〳〵も幾生の善をよろこぶ、いや善惡不二、何をか恨み何をか喜ばんや、萬箇目前の境界、懸河渺々として、巖峨々たり、山又山、いづれの工か青巖の形を削りなせる、水また水、誰が家にか碧潭の色を染め出だせる。

ツレ「恐ろしや月も木深き山陰より、其さま化したる顏ばせは、其山姥にてましますか。シテ「とてもはや穗に出でそめし言の葉の、氣色にも知ろしめさるべし、我にな恐れ給ひそとよ。ツレ「此上は恐ろしながらうば玉の、闇まぎれよりあらはれ出づる、姿詞は人なれども、シテ「髮にはおどろの雪を戴き、ツレ「眼の光は星の如し。シテ「さて面の色は、ツレ「さにぬりの、シテ「軒の瓦の鬼の形を、ツレ「今宵始めて見る事を、シテ「何にたとへん、ツレ「古への、地「鬼一口の雨の夜に、〈〉、雷なりさわぎ恐ろしき、其夜を思ひ白玉か、何ぞと問ひし人までも、我身の上になりぬべき、浮世がたりも恥かしや。〈〉。

シテ謠「春の夜の一時を千金に換へじとは、花に淸香月に陰、是は願ひのたまさかに、行き逢ふ人の一曲の、其ほどもあたら夜に、はや〈〉謠ひ給ふべし。ツレ「げに此上はともかくも、いふに及ばぬ山中に、シテ「一聲の山鳥羽をたゝく、ツレ「鼓は瀧波、シテ「袖は白妙、ツレ「雪をめぐらす木の花の、シテ「何はのことか、ツレ「法ならぬ、地「よし足引の山姥が、〈〉、山廻りするぞ苦しき。シテ「夫れ山と謂つば塵泥より起つて、天雲かゝる千丈の峯、地「海は苔の露よりしたゝりて、波濤を疊む萬水たり。シテ「一洞空しき谷の聲、梢に響く山彥の、地「無聲音を聞くたよりとなり、聲にひびかぬ谷もがなと、望みしもげにかくやらん。シテ「ことに我住む山家の景色、山高うして海近く、谷深うして水遠し　地「前には海水瀁々として、月眞如の光をかゝげ、後には巖松巍々

として、風幣樂の夢を破る。シテ「刑鞭蒲朽ちて螢むなしく去る、　地「諫鼓苔深うして、鳥驚かずともいひつべし。

クセ「遠近の、たづきも知らぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥の、聲すごき折々に、伐木丁々として、山さらに幽なり。法性峯そびえては、上求菩提をあらはし、無明谷深きよそほひは、下化衆生を表して、金輪際に及べり。そも〳〵山姥は、生所も知らず宿もなし。たゞ雲水を便りにて、至らぬ山の奥もなし。シテ「然れば人間にあらずとて、　地「隔つる雲の身をかへ、假に自性を變化して、一念化生の鬼女となつて、目前に來れども、邪正一如と見る時は、色即是空其まゝに、佛法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もあり、柳は緑花は紅の色々、さて人間に遊ぶ事、ある時は山賤の、樵路に通ふ花の陰、やすむ重荷の肩を貸し、月もろともに山を出で、里まで送るをりもあり。又ある時は織姫の、五百機立つる窓に入つて、枝の鶯糸くり、紡績の宿に身を置き、人を助くるわざをのみ、賤の目に見えぬ、鬼とや人のいふらん。シテ「世を空蟬の唐衣、　地「拂はぬ袖に置く霜は、夜寒の月に埋もれ、打ちすさむ人の絶間にも、千聲萬聲の、砧に聲のしでうつは、たゞ山姥がわざなれや、都に歸りて、世語にせさせ給へと、思ふは猶も妄執か、唯うち捨て上何事も、よしあし引の山姥が、山廻りするぞ苦しき。シテ「あしびきの、　地「山めぐり、シテ「一樹の陰一河の流れ、皆これ他生の緣ぞかし。ましてや我

名を夕月の、浮世をめぐる一節も、狂言綺語の道すぐに、讃佛乘の因ぞかし。あら、御名殘惜しや、いとま申して歸る山の、　地「春は梢に咲くかと待ちし、シテ「花を尋ねて山めぐり、　地「秋はさやけき影を尋ねて、シテ「月見る方にと山めぐり、　地「冬はさえ行く時雨の雲の、シテ「雪をさそひて山めぐり、　地「めぐり〳〵て、輪廻を離れぬ妄執の雲の、塵つもつて山姥となれる、鬼女が有樣みるや〳〵と、峯にかけり谷に響きて、今迄こゝにあるよと見えしが、山又山に山廻り　山又山に山廻りして、行方も知らずなりにけり。

ワキ次第「月は昔の友ならば、〳〵、世の外いづくならまし。ワキ詞「是は諸國一見の僧にて候。我いまだ津の國天王寺に參らず候ふ程に、此度思ひ立ち天王寺に參らばやと思ひ候。道行「都をば、まだ夜深きに旅立ちて、〳〵 淀の川舟行末は、鵜殿の蘆のほの見えし、松の煙の浪よする、江口の里に着きにけり。〳〵

ワキ「さてはこれなるは江口の君の舊跡かや 痛はしやその身は土中に埋むといへども、名は留まりて今までも、昔語りの舊跡を、今見る事の哀さよ。 詞「實にや西行法師この所にて、一夜の宿を借りけるに、主心なかりしかば、世の中を厭ふまでこそかたからめ、假の宿りを惜む君かなと詠じけんも、この所にての事なるべし。あら痛はしや 候。

シテ女詞「なう〳〵あれなる御僧、今の歌をば何と思ひよりて口ずさみ給ひ 候 ぞ。ワキ詞「不思議やな人家も見えぬ方よりも、女性一人來りつゝ、今の詠歌の口ずさみを、如何にと問はせ給ふ事、そも何故に尋ね給ふぞ。シテ「忘れて年を經し物を、又思ひそむ言の葉の、草のかげ野の露の世を、

厭ふまでこそかたからめ、假の宿りを惜むとの、その言の葉も恥かしければ、さのみは惜み參らせざりし、その理をも申さんために、これまで現れ出でたるなり。ワキ詞「心得ず假の宿りを惜む君かなと、西行法師が詠ぜし跡を、唯何となく弔ふ所に、さのみは惜しまざりにしと、ことわり給ふ御身はさて、如何なる人にてましますぞ。シテ「いやさればこそ惜しまぬよしの御返事を、申し〻歌をば何とてか、詠じもせさせ給はざるらん。 ワキ「實に其返歌の言の葉は、世を厭ふ、シテ「人とし聞けば假の宿に、 詞「心留むなと思ふばかりぞ。心とむなと捨人を、諫め申せば女の宿りに、とめ參らせぬも 理 ならずや。ワキ「實に 理 なり西行も、假の宿りを捨人といひ、シテ「此方も名におふ色好の、家にはさしも埋木の、人しれぬ事のみ多き宿に、ワキ「心とむなと詠じ給ふは、シテ「捨人を思ふ心なるを、ワキ「唯惜しむとの、シテ「言の葉は、歌地「惜しむこそ、惜しまぬ假の宿なるを、〳〵、などや惜しむと夕波の、かへらぬ古は今とても、捨人の世語りに、心な留め給ひそ。

ロンギ地「實にや浮世の物語り、聞けば姿も黄昏に、かげろふ人は如何ならん。シテ「黄昏に、たゞむ影はほの〴〵と、見えがくれなる河隈に、江口の流れの、君とや見えん恥かしや。 地「さては疑ひ荒磯の、波と消えにし跡なれや。 シテ「假に住み來し我宿の 地「梅の立枝や見えつらん。

ワキ「思ひの外に、 地「君が來ませるや。一樹の陰にや宿りけん。又は一河の流れの水、汲みても

知し召されよや。江口の君の幽霊ぞと、聲ばかりして失せにけり。〳〵。

ワキ詞「さては江口の君の幽霊假に顯はれ、我に言葉をかはしけるぞや、いざ弔ひて浮べんと、歌「言ひもあへねば不思議やな。〳〵。月澄み渡る河水に、遊女のうたふ舟遊び、月に見えたる不思議さよ。月に見えたる不思議さよ。

地「河船を、とめて逢瀬の波枕、〳〵、浮世の夢を見習はしの、鷺かぬ身のはかなさよ。佐用姫が松浦潟、かたしく袖の涙の、唐舟の名殘なり。また宇治の橋姫も、訪はんともせぬ人を待つも、身の上とあはれなり。よしや吉野の、よしや吉野の花も雪も雲も波も、あはれ世にあはじや。

ワキ「ふしぎやな月澄み渡る水の面に。遊女のあまたうたふ謠、色めきあへる人影は、そも誰人の舟やらん。シテ「何此舟を誰が船とは、恥かしながら古の、江口の君の川遊遙の、月の夜舟を御覽ぜよ。ワキ「そもや江口の遊女とは、それは去りにし古の、シテ詞「いや古とは、御覽ぜよ月は昔にかはらめや。ツレ「我等もかやうに見え來るを、いにしへ人とは現なや、シテ「よし〳〵何かと宣ふとも、ツレ「いはじや聞かじ。シテ「むつかしや、秋の水、みなぎり落ちて去る船の、月もかげさす棹の歌、地「うたへや、歌へうたかたの、あはれ昔の戀しさを、今も遊女の船遊び、世を渡る一節を、歌ひていざや遊ばん。地「夫れ十二因緣の流轉は、車の庭にめぐるが如し。シテ「鳥の林に遊ぶに似たり。地「前生又前生、シテ「曾て生々の前を知らず。地「來世なほ來世、更に世

々のをはりをわきまふる事なし。シテ「或は人中天上の善果を受くといへども、地「顚倒迷妄して未だ解脫の種を植ゑず。シテ「或は三途八難の悲趣に墮して、地「患にさへられて、既に發心のなかだちを失ふ。シテ「然るに我等たまたま受けがたき人身を受けたりといへども、地「罪業深き身と生れ、殊にためし少なき河竹の、流れの女となる、前の世の報いまで、思ひやるこそ悲しけれ。

クセ「紅花の春の朝、紅錦繡の山、粧ひをなすと見えしも、夕の風に誘はれ、紅葉の秋の夕、黃纈の嶺の林、色を含むといへども、朝の霜にうつろふ。松風蘿月に言葉をかはす賓客も、去つて來る事なし。翠帳紅閨に、枕をならべし妹背も、いつの間にかは隔つらん。凡そ心なき草木、情ある人倫、いづれあはれを遁るべき。かくは思ひ知りながら、シテ「ある時は色に染み、貪着の思ひ淺からず。地「又ある時は聲を聞き、愛執の心いと深き、心に思ひ口に言ふ、妄舌の緣となる物を、實にや皆人は、六塵の境に迷ひ、六根の罪を作る事も、見る事聞く事に、迷ふ心なるべし。

地「おもしろや、シテ「實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども、地「隨緣眞如の波の、立たぬ日もなし。〳〵。シテ「波の立居も何故ぞ、假なる宿に心とむる故、地「心とめずば浮世もあらじ、シテ「人をも慕はじ。地「待つ暮もなく、シテ「別路も嵐吹く。地「花よ紅葉よ月雪の古言も、あらよしなや。シテ「思へば假の宿、地「思へば假の宿に、心とむなと人をだに、諫めし我なり、

是までなりや歸るとて、すなはち普賢菩薩と顯はれ、船は白象となりつゝ、光とゝもに白妙の、白雲に打ち乘りて、西の空に行き給ふ、有難くぞ覺ゆる。有難くこそは覺ゆれ。

江口終

狂雲集 卷上

贊二盧堂和尚一

育王住院世皆乖。放二下法衣一如二破鞋一。臨濟正傳無二一點一。一天風月滿二吟懷一。

題二大燈國師行狀末一

挑二起大燈一輝二一天一。鸞輿競レ譽法堂前。風殘水宿無二人記一。第五橋邊二十年。

如何是臨濟下事　五祖演曰五逆開レ雷

機先一喝鐵圍崩。五逆元來在二衲僧一。桃李春風清宴夕。半醒半醉酒如レ澠。

如何是雲門宗　演曰紅旗閃爍

華旗風暖動二春豪一。八十餘員師席開。一字關兮三句體。幾人眼裡着二紅埃一。

如何是潙仰宗　演曰斷碑橫二古路一

惠寂釋迦靈祐牛。披毛作佛也風流。古碑路斷長溪客。萬世姓名黃葉秋。

如何是法眼宗　演曰巡人犯レ夜

一滴曹源一滴深。巡人鬧々夜沈々。青山滿目是何法。家醜猶如レ學二捧心一。

臨濟四料簡

奪人不奪境

百丈爲山名未休。野狐身與水牯牛。前朝古寺無僧住。黄葉秋風共一樓。

奪境不奪人

臨濟兒孫誰的傳。宗風滅却瞎驢邊。芒鞋竹杖風流友。曲棟木床名利禪。

人境俱奪

雉鬚龜焦身迯遁。井汾絶信話頭圓。夜來滅却詩人興。桂折秋風白露前。

人境俱不奪

莫道再來錢半文。婬坊酒肆有功勳。祇緣人話相如渴。腸斷琴臺日暮雲。

陳蒲鞋

賣弄諸人瞞諸方。德山臨濟沒商量。拈槌竪拂非吾事。只要聲名屬北堂。

岩頭船居圖

會昌以後毁僧形。一段風流何似生。舞棹未壞爲人手。杜鵑叫月夜三更。

又

蒲葉半凋江漢秋。生涯受用在扁舟。乾坤一箇閑家具。年代撈波情未休。

贊二祖

大唐古今沒禪師。斷臂虛傳人不知。只許南山道宣筆。恰如痛所下針錐。

贊栽松道者

周家當處出生來。爲法喪身徒苦哉。宿昔植何時德本。栽松老漢也黄梅。

松源和尚三轉語

大力量人因甚擡脚不起

商量鬼窟黑山禪。神力金剛現目前。普天之下是王土。擡脚句中公案圓。

開口因甚不在舌頭上

三寸舌頭開禍門。河沙諸佛轉多言。夜來百勞五更月。不奈聲々祟夢魂。

明眼衲僧因甚脚跟下紅絲線不斷

二三四七諸禪師。領衆匡徒心亂絲。因錢有癖是和嶠。娘生脚下血淋漓。

虛堂和尚三轉語

已眼未明底因甚將虛堂作布袴着

畫餅冷腸飢未盈。娘生已眼見如盲。寒堂一夜思衣意。羅綺千重暗現成。

劃地爲牢底因甚透者箇不過

何事春遊興未窮。人心尤是客盃弓。天堂成就地獄滅。日永落花飛絮中。

入海算沙底因甚針鋒頭上翹足

撒土算沙深立功。針鋒翹脚現神通。山僧者裡無能漢。東海兒孫天澤風。

大燈國師三轉語

朝結眉夕交肩我何似生

透關更有一重關。隨例依條不可攀。奇菓荔支天上味。名從天寶落人間。

露柱盡日往來我因甚不勤

草鞋脚瘦沒知音。露柱同行伴我吟。錢有靈神十萬貫。杜鵑啼血託春心。

若透得箇兩轉語一生參學事畢

二十餘年曾苦辛。乾坤誰是我般人。參來直撒幽玄底。歇去獨登要路津。

擧靈山撒翁和尚末後之垂示以示徒。其垂示云。正法眼藏無付人。自荷擔至彌勒下生。噫。

古佛靈山名不虛。當來彌勒是同居。兒孫一箇狂雲子。邪法大興殃有餘。

牢關一句費工夫。百煉精金再入爐。話到當來々劫曉。只愁枕上夢魂無。

凡參禪學道之輩。須日用清淨不可日用不淨。所謂清淨者。究明一則因繁。到無理會田地。

晝夜工夫不怠。時々截斷根源。佛魔難窺處。分明坐斷。往々埋名藏跡。山林樹下。擧揚一則因繁時純一無雜矣。謂之日用清淨人也。然而稱吾善知識。擎杖拂集衆說法。魔魅人家男女。心好名利。招學者於室中。道悟玄旨。使參者。相似模樣閑言語。使教者。片箇情也。這般輩非人也。寔日用不淨者也。以佛法爲度世之謀。是世上榮衒之徒也。凡有身無不著。有口無不食。若知此理。豈衒於世哉。豈謂於官家哉。如是之徒。三世六十劫入餓鬼入畜生可無出期。或生人間受癲病苦。不聞佛法名字。可懼々々。

右靈山撒翁和尚示榮衒徒法語。題其後云

工夫不是涅槃堂。名利輝前心念忙。信道人間食籍定。羊腸一椀橘皮湯。

元正

現成公案任天眞。鳳曆開元世界春。今日山僧換却眼。堂中古佛面門新。

桃花浪

隨波逐浪幾紅塵。又値桃花三月春。流恨三生六十劫。龍門歲々曝腮鱗。

端午

千古屈平情豈休。衆人此日醉悠々。忠言逆耳誰能會。只有湘江解順流。

冬至示衆

獨閉門關不省方。這中誰是法中王。諸人若問冬來句。日自今朝一線長。

佛誕生

三世一身異號多。何人今日定論訛。娑婆來往八千度。馬腹驢胎又釋迦。

佛成道

天上人間稱獨尊。今朝成道受誰恩。分明衲子流星眼。便是瞿曇的々孫。

佛涅槃

滅度西天老釋迦。他生出世到誰家。二千三百年前淚。猶洒扶桑二月花。

達磨忌

毒藥數加賊後弓。大千過寒佛心宗。西來無意我有意。熊耳山中落木風。

大燈國師百年忌

饕餮青銅無半文。酔恩一句豈驚群。祖師遷化已百歲。空拜婆年婆子裙。

又

兒孫多踏上頭關。一箇狂雲江海間。大會齋還在何處。白雲蒸飯五臺山。

僧問岩頭云。古帆未掛時如何。頭云。小魚呑大魚。僧云。掛後如何。題云。後聞驢喫草。

寒溫苦樂愧慚時。耳朶元來兩片皮。一二三兮三二一。南泉信手斬猫兒。

雲門示衆云。古佛與露柱相交。是第幾機。自代云。南山起雲。北山下雨。

小姑緣底嫁彭郎。雲雨今宵夢一場。朝在天台暮南岳。不知何處見韶陽。

苦中樂

酒喫三盃未濕脣。曹山老漢慰孤貧。直横身火宅中看。一刹那間萬劫辛。

樂中苦

此是瞿曇曾所經。麻衣草坐六年情。一朝點撿將來看。寂寞靈山身後名。

百丈野狐

千山萬水野僧居。甲子今年五十餘。枕上終無老來意。夢中猶讀少時書。

聞聲悟道

擊竹一朝忘所知。聞鐘五夜絶多疑。古人立地皆成佛。淵明端的獨顰眉。

見色明心

憶得寒山見月題。眼睛落地衆生迷。洛陽三月貴遊客。閃爍紅旗照西。

聞聲悟道。見色明心。雲門拈云。觀世菩薩將錢來買胡餅。放下手云。元來是饅頭。

卽現觀音奴婢身。饅頭胡餅谷精神。當時難忘見聞境。滿目山陽笛裡人。

大隨庵邊有二一龜一。僧問。一切衆生皮裹レ骨。這箇衆生因レ甚骨裹レ皮。大隨以二草鞋一蓋於背上一。

衆生顛倒幾時休、打二着前頭一又後頭。信レ手救レ猫趙州老。草鞋戴去也風流。

黄檗禮佛

鑑行沙門鬼眼開。身長七尺甚奇哉。不レ知何處見二黄檗一。立レ法商君破レ法來。

臨濟燒二机案禪板一

此漢宗門第一禪。奪人奪境體中玄。安身立命在二那邊一。劫火洞然燒二大千一。

翠岩夏末示衆云。一夏以來爲二兄弟一說話。看翠岩眉毛在麼。保福云。作レ賊人心虚。長慶云。生也。雲門云。關。

眉毛公案爛泥荊。保福雲門同道行。長慶藏レ身還露レ影。小樓南畔月三更。

翠岩示二眉毛一圓

寶中有レ主々中寶。關字失錢生也親。賊賊賊賊拿不得。當頭姦黨是何人。

梅子熟

熟處年來猶未レ忘。言中有レ味孰能背。人班初見大梅老。疎雨淡煙青已黄。

盲

瞎驢不レ受靈山記。四七二三須二愧慚一。豈墮二在光影邊事一。銅睛鐵眼是同參。

聾

掛レ拂遭レ呵百煉金。天生懷海耳根深。眞聞眞箇在二何處一。爲鼓無絃一曲琴。

啞

一句欲レ披吾爵襟。舌頭并レ齶咲吟々。靈雲不レ答長生問。誰識金言猶在レ心。

船子釣臺圖

金鱗難レ得急流前。坐斷釣臺三十年。絲線一通名利路。子陵可レ咲夾山禪。

又

千尺絲綸豈得レ收。一天風月一江舟。舟翻人去名猶在。洙水何因不二逆流一。

賊

惱二閙春風一何所レ成。遊絲百尺惹二多情一。不レ知問二取桃花一去。換二却靈雲双眼睛一。

贊二淸素首座一

荔支食罷記二吾曾一。三十年來一箇僧。杜牧平生丈夫志。老無二氣力一望二昭陵一。

贊二兜率悅禪師一

素老天生薄福徒。佛鼎公案的傳無。爵襟忽發烈史筆。永辱楊雄葬太夫。

圓悟大帥投機

沈吟小艷一章詩。發動乾坤投大機。擊竹見桃若相問。須彌脚下石烏龜。

覽松源和尚塔銘

冶父住持功不空。拔貧作富甚家風。看來省數錢猶在。不識脚跟絲線紅。

贊魚藍觀音

丹臉青鬟慈愛深。自疑雲雨夢中心。千眼大悲看不見、漁妻江海一生吟。

經卷拭不淨

經卷元除不淨殘。龍宮海藏羿言詮。看々百則碧岩集。狼藉乳峰風月前。

又

弓影客盃多斷腸。夜來新病入膏肓。愧慚我不及禽獸。狗屎栴檀古佛堂。

又

信手拈來除不淨。作家面目露堂々。南山雲起北山雨。一夜落花流水香。

大慧禪師焚碧岩集

妙喜老人千歲名。宗門潤色太高生。子胥曾受吳王戮。可惜髑髏無眼睛。

牛

異類中行是我會。能依境也境依能。出生忘却來時路。不識當年誰氏僧。一本當年作前身

蛙

慣釣鯨鯢咲一場。泥沙碾步太忙々。可憐井底稱尊大。天下納僧皆子陽。

尺八

一枝尺八恨難任。吹入胡笳塞上吟。十字街頭誰氏曲。少林門下少知音。

傀儡

一棚頭上現全身。或化王侯或庶民。忘却目前眞木偶。痴人喚作本來人。

羅漢菊

茶褐黃花秋色深。東籬風露出塵心。天台五百神通力。未入淵明一片吟。

菊 羅漢楊妃同瓶

楊妃嬾醉一籬秋。茶褐相交爲好仇。失却神通居下界。應身天寶辟陽侯。

雪團

乾坤埋却沒門關。收取卽今爲雪山。狂客時來百雜碎。大千起滅刹那間。

佛閣

嶠嶠韶陽門大開。喚爲嫌佛一樓臺。這般知識說邪法。問話者從魔界來。

鉢齋

古佛堂中交露柱。斬成兩段定諸訛。青山綠水一閑客。可咲岩頭黑老婆。

竹幽齋

香殿多福主中賓。密々參禪到要津。六々元來三十六。清風動處有佳人。

陋居

月前境界似吾擺。地老天荒百草枯。三月春風沒春意。寒雲深鎖一茅廬。

題如意庵校劇末

將常住物置庵中。木杓笊籬掛壁東。我無如此閑家具。江海多年簑笠風。

如意庵退院寄養叟和尚

住庵十日意忙々。脚下紅絲線甚長。他日君來如問我。魚行酒肆又婬坊。

寄南江山居

天下禪師謙過人。黑山鬼窟弄精神。平生杜牧風流士。吟斷二喬銅雀春。

偶作

昨日俗人今日僧。生涯胡亂是吾能。黃衣之下多名利。我要兒孫滅大燈。

山路 雜詠

呑聲透過鬼門關。豺虎蹤多古路間。吟杖終無風月興。黃泉境在目前山。

山居 同

婬坊十載興難窮。强住空山幽谷中。好境雲遮三萬里。長松逆耳屋頭風。

又

狂雲眞是大燈孫。鬼窟黑山何稱尊。憶昔簫歌雲雨夕。風流年少倒金樽。

山中示典座

歸宗一味日興餘。典座山中功不虛。休覓淨名香積飯。何時僧有美双魚。

山中得南江書

孤峯頂上草庵居。三要印消功未虛。不意玄中有玄路。萬行寰涙一封書。

自山中歸市中

狂雲誰識屬狂風。朝在山中暮市中。我若當機行棒喝。德山臨濟面通紅。

昔有一婆子。供養一庵主。經二十年。常令一二八女子送飯給侍。一日。令女子抱定云。正恁麼時如何。庵主云。枯木倚寒岩。三冬無暖氣。女子歸擧似。婆子云。我二十年只供養得箇俗漢。追出燒却庵。

老婆心爲賊過梯。清淨沙門與女妻。今夜美人若約我。枯楊春老更生稊。

畫虎

覿面當機誰一摑。寒毛卓竪老岩頭。惟哉倜在扶桑國。凜々威風四百州。

宗訢藏主製墨以爲業。偶以送之。

萬杵霜花華頂天。商量來不直多錢。何須知藏書經卷。小艷題詩街少年。

示病僧紹珠首座

業識忙々從劫空。平生伎倆到今窮。四百四病一時發。苦屈苦辛安樂中。

宗春居士下火　行年三十七

彌勒釋迦也馬牛。春風惱亂卒何休。六々元來三十七。一聲念讃起鐘樓。

病中還人送曲彔

法座上禪名利臺。諸方竪拂與拈槌。圓悟金山遭大病。苦吟小艷一章詩。

文安丁卯秋。大德精舍有一僧。無故而自殺矣。好事之徒。遂讃之官。繫其餘殃。而居囚禁者七五輩。足爲吾門之大亂。時人喧傳焉。予聞之。即日晦迹山中。其意蓋出於不忍耳。適學者自京城來。說本寺件々之事。愈弗勝慨嘆。作偈言懷。

時値重陽。故成九篇云。

地老天荒龍寶秋。夜來風雨黑難收。對他若作是非話。彷彿雲門關字酬。

慚我聲名猶未韜。參禪學道長塵勞。靈山正法掃地滅。不意魔王十丈高。

停囚一月老虛堂。身上迍邅休斷腸。苦樂寒溫箇時節。黃花一朶識重陽。

清淨本然現大千。現前境界是黃泉。慣職作家赤心露。眉間掛劍血澆天。

正傳傍出妄相爭。曠劫無明人我情。人我擔來擔子重。空看蛺蝶一身輕。

上古道光今日明。議論臨濟正傳名。屋前屋後樵歌路。憶昔山陽笛一聲。

棒喝德山臨濟禪。商量三要與三玄。漢王鑄印却消印。胡亂更參三十年。

近代久參學得僧。語言三昧喚爲能。無能有味狂雲屋。折脚鐺中飯一升。

風外松杉亂入雲。諸方動術又驚群。人境機關吾不會。濁醪一盞醉醺々。

贊靈照女

笊籬賣却甚風流。一句明々百草頭。相對無心弄禪話。朝雲暮雨不勝愁。

風鈴

靜時無響動時鳴。鈴有聲耶風有聲。驚起老禪白晝睡。何須日午打三更。

又

見聞境界太無端。好是清聲隱々寒。普化老漢活手段。和風搭在玉闌干。

某甲爲山僧一頭。長溪路上卽忘不。闌中無復祖師見。花屬春風月屬秋。

牛雲 同

膚寸無根點碧空。安身立命在其中。夢魂昨夜巫山雨。吟斷朝來一片蹤。

贊六祖

隨身擔子鉈斧。不知何處山翁。南方佛方會否。盧公老々盧公。

紹鵶藏主規地卜居。家徒四壁立。扁曰土庵。作偈以爲證云。

夏巢冬穴一身康。帶水拖泥萬念忙。稼穡艱難若領略。栴檀佛寺名利場。

大機居士卜小築。曰瞎驢。因贅以偈云。

大人消息有誰通。不墮靈山記莉中。臨濟宗風掃地滅。紅塵紫陌鬧忽々。

簑笠、庵號

樵客漁人受用全。何須曲彔木床禪。芒鞋竹杖三千界。水宿風飡二十年。

謹奉錄呈一休老和尚座下

幻住孫眞建九拜

狂風徧界不曾藏。吹起狂雲狂更狂。誰識雲收風定處。海東初日上扶桑。

和韻

慚愧聲名不覆藏。佯歌烟醉我風狂 吟懷夜々中峰月 幻住僧無三宿桑。

華叟老師掩光而後旣泊二十餘稔也。壬申秋。勅諡大機弘宗禪師。仍製禪詩。呈寄大用養叟和尚。且陳賀忱云。

曾謝塵寰五十年。芳聲美譽是何禪。子胥日晚倒行去。覩面屍鞭三百鞭。

又

懶瓚辞詔也何似。猥芋烟鎖竹爐裡。大用現前眞衲僧。先師覩面潑黑水。

贊端師子

美師子處正明心。不托回頭口若暗。讀誦蓮經風雪燭。漁歌一曲五更吟。

大德寺火後題大燈國師塔

創草百二十八年。看來今日體中玄。正邪境法滅却後。猶是大燈輝大千。

渡江達磨

脚下苦哉平地波。誰人梁魏定聲訛。西來莫道大難意。河廣傳聞一葦過。

贊臨濟和尚

從來道業是毘尼。黃檗栴頭忘所知。正傳的々克勤下。吟破風流小艶詩。

贊普化

德山臨濟奈同行。街市風顚群衆驚。坐脫立亡多敗闕。和鳴隱々寶鈴聲。

黃檗三頓棒

棒頭打着鴉磨僧。痛處針錐絶伎能。桃李春閨簾外月。吟魂一夜十年燈。

脚下紅絲線

持戒爲驢破戒人。河沙異號弄精神。初生孩子婚姻線。開落紅花幾度春。

贊華叟和尚

靈山孫言外的傳。蜜漬荔枝四十年。兒孫有箇瞎禿漢。頗得老婆新婦禪。

自贊

華叟子孫不知禪。狂雲面前誰說禪。三十年來肩上重。一人荷擔松源禪。

又

風狂客起狂風。來往婬坊酒肆中。具眼衲僧誰一拶。畫南畫北畫西東。

又

大燈佛法沒光輝。龍寶山中今有誰。東海兒孫千歲後。吟魂猶苦許渾詩。

百丈餓死

爲人苦行也天然。大用分明卽現前。一日不作必不食。大人手段作家禪。

又

古人受用幾甞難。不是尋常談笑間。飽食痛飲飯袋子。叉衣翫水又遊山。

又

工夫長養大慈心。臨濟消來萬兩金。昔日艱難聞吐哺。簑衣簑笠纏頭吟。

示會裡徒

樂中有苦一休門。箇々蛙爭井底尊。晝夜在心元字脚。是非人我一生喧。

又

公案參來明歷々。胸襟勘破暗昏々。怨憎到死難忘却。道伴忠言逆耳根。

又

徒學得祖師言句。識情刀山牙劍樹。看々頻々擧他非。唧血噴人其口汚。

示入定僧

塵緣塵境萬端稠。到此誰人截衆流。誓心決定魔宮動。長信西風琪樹秋。

讀碧岩集序

灰山言教價千金。一炬看來救古今。休向寒灰成議論。宗乘滅却老婆心。

黃龍三關

成佛成驢手脚全。河沙異號任生緣。黃龍關外黑雲鎖。積翠春風楊柳前。

虎丘雪下三等僧

少林積雪置心頭。公案圓成上等仇。僧社吟詩剃頭俗。飢腸設食也風流。

又

禪者詩人皆痴鈍。雪下三等多議論。妙喜若是大慈心。說食僧與香積飯。

看大德寺修造有感

雲門卵塔一茅廬。大用黃金殿上居。傍出正傳現前境。楊岐屋壁古來踈。

新造大應國師尊像

活眼大開眞面門。千秋後尚弄精魂。虛堂的子老南浦、東海狂雲六世孫、

題婬坊

美人雲雨愛河深。樓子老禪樓上吟。我有抱持嗟吻興。竟無火聚捨身心。

示延壽堂僧

無常殺鬼現前時。末後牢關說向誰。百事難休五欲鬧。六窓欲鎖八風吹。

病中作

德山棒兮臨濟喝。嘆我被他機境奪。若人問馬祖不安。慚愧一生相如渴。

示榮衒愚知識

參禪婆子楊花帳。入室美人蘭薰因。近代箇邪師過謬。馬牛漢不是人倫。

又

捧心自稱法王身。世上弄嘲徒怒瞋。一箇胡孫沒巴尾。出頭大用現前人。

拜關山國師塔

荒草不鋤乃祖玄。涅槃正法妙心禪。杜鵑叫落關山月。誰在花園躑躅前。

雨滴 齋名

蕭々門外是何聲。不會當機問鏡清。顚倒衆生迷逐物。窓前半夜一燈青。

松窓 同

茅廬竹閣興難窮。臨濟栽來功不空。枕上愧慚有閑夢。夜來驚起屋頭風。

面壁達磨

誰人任運問安心。昔日神光侍少林。面壁功成無面目。不知積雪滿庭深。

苦行釋迦

六年飢寒徹骨髓。苦行是佛祖玄旨。信道無大然釋迦。天下衲僧飯袋子。

言外和尚

無端滅却大燈家。鐵眼銅睛劍樹牙。一句分明言外語。親聞華叟若曇華。

徹翁和尚

大燈子大應孫。正傳臨濟宗門。儼然靈山一會。何妨三界獨尊。

趙州三轉語　泥佛不渡水。木佛不渡火。金佛不渡爐。

詩成小樂述愁情。一枕多年夜雨聲。長笛暮樓誰氏曲。曲終江上數峰青。

應居士製竹漉籬圖

河裡捨來十萬錢。庫中終沒半文錢。眞箇簸箕門下客。笊籬賣不直多錢。

大惠宏智掛讓圖

眉毛相結眼睛同。兩箇老禪機境融。力士鐵槌子房策。憤心在博浪沙中。

山庵雜錄曰。楚石住嘉興天寧。值有司重作官宇。闕木石。欲取村落無僧廢庵。應所需。因集諸寺住持議之。時楚石力陳不可者。沮之。有司不聽。遂撾退鼓歸海鹽天寧。二老皆勇於行義。視棄師席之尊。不啻如棄弊屣。今雖荐禍患嬰己。而猶濡忍縻々。亦獨何哉。予讀此有感。因作偈云。又有了庵一事省之。

奪人奪境事猶稠。幽谷閑林不自由。莫道江山無定主。普天之下帝王州。

龍門亭題偈賀天龍寺再興

盡乾坤乃祖門風。萬獄燒殘烟雨中。三級浪高黑雲鎖。潛鱗直得化天龍。

感龍翔寺殿

常住物誰用己身。山門境致剪松筠。殿堂只與花零落。廢苑秋風二月春。

虛堂和尚十病

病在自信不及處。
病在我見偏執處。
病在機境不脫處。
病在一師一友處。
病在位貌拘束處。
病在得失是非處。
病在限量窠臼處。
病在得少爲足處。
病在旁宗別派處。
病在自大了一生小不得處。

又

是非元勝負。修羅。傍出正傳人我多。近代邪師誇管見。識情毒氣任偏頗。

議論未休正與邪。無慚愧漢是天魔。狂雲臥病相如渴。一枕秋風奈我何。

拈華微笑

鷲峰會上現前辰。鷄足室中來劫春。中毒人應知毒用。西天此土野狐身。

贊慈恩窺基法師

窺基三昧獨天眞。酒肉諸經又美人。座主眼睛猶若此。宗門唯有箇宗純。

同門老宿誡余婬犯肉食。會裡僧嘖之。因作此偈示衆僧云

爲人說法是虛名。俗漢僧形何似生。老宿忠言若逆耳。昨非今是我凡情。

病中作

佛病祖病迸鬼眼。臨濟焚几案禪板。不會金山大病辛。時人空吟艷詩句。

隱溪　齋名

呂公子陵眞面目。受用風飡又水宿。江湖今有釣漁舟。我無一竿湘楚竹。

示衆

參玄衲子道難成。但願歸依常不輕。一片吟懷向誰解。楚雲湘水十年情。

破邪禪

瞿曇四十九年說。看々毘耶與摩羯。邪師臆說拈話頭。閻王前豈免拔舌。

新建立佛寺

一生破窪廢庵居。這裡榮華也不虛。清淨佛寺利欲地。楊岐屋壁古來稲。

將入山中。一偈書屋壁以示衆去

愧慚禍起自蕭墻。我見折人如劍鋩。從此空山幽谷路。誰人來踏板橋霜。

題密庵和尚病起上堂後

江山富貴是樵漁。風雨吟身一草廬。七顚八倒衆生苦。不耐小魚呑大魚。

賀大用庵養叟和尚賜宗惠大照禪師號

紫衣師號奈家貧。綾紙青銅三百緡。大用現前實長老。看來眞箇普州人。

寄大德寺僧

人多入得大燈門。這裡誰捐師席尊。淡飯麤茶我無客。醉歌獨倒濁醪樽。

贊烏窠和尚

巢寒樹上老禪翁。寂寞淸高名未虛。諸惡莫作善奉行。大機須在醉吟中。

題養叟大用庵

叢林零落殿堂疎。臨濟宗門破滅初。大用栴檀佛寺閣。崢嶸林下道人居。

又

山林富貴五山衰。唯有邪師無正師。欲把一竿作漁客。江湖近代逆風吹。

百丈絕食

大智禪師難行道。末法爲人眞落草。飽食痛飲熱鐵丸。初懼泉下閻羅老。

示衆

割截難禁忍辱仙。捨身諸佛舊因緣。千歲聲名斷碑雨。髑髏識盡北邙前。

病中

錯來領衆十年餘、實悟不知多是虛、乃欲破除邪法輩。夜來背發范增疽。

又

藥山兩粥懶殘芋。昔年祖師修行苦。棒喝機關作家禪。不是牢關末後句。

示衆

忍辱仙人常不輕　菩提果滿已圓成。撥無因果任孤墮。一箇盲人引衆盲。

贊仰山

小釋迦唐朝出生。夢中兜率太分明。耽源體也溈山用。體用中唯開眼睛。

又

枕子夜來推出時。一宗敗闕少人知。法身說法座主說。黃葉一枝誑小兒。

松源和尚上堂云、擧僧問巴陵。祖意教意是同是別。巴陵云。鷄寒上樹。鴨寒下水。白雲師祖云。巴陵只道得一半。白雲則不然。掬水月在手。弄花香滿衣。師拈云。白雲盡力道。只道得入成。有問靈隱。只向他道。人我無明一串穿。祖意教意別與同。商量今古未曾窮。松源老々婆心切。人我無明屬已躬。

涅槃堂

眼光落地涅槃堂。自悔自慚螃蟹湯。七手八脚萬劫苦。無常殺鬼火車忙。

竹篦背觸

背觸首山閑話頭。諸訛蕭々沒來由。梨花院落黃昏月。設向愁人不解愁。

山居僧擁葉

孤峯頂上謝塵寰。三十年來不出山。因憶南陽擁葉意。半身暖氣半身寒。

山居僧

無人時喜客來嗔。落葉飛花獨覺身。正見禪師若行令。三冬枯木百花春。

拈華微笑

世尊拈出一枝花。一代禪宗意氣奢。金色頭陀獨傳法。近年知識若河沙。

贈新法師

威音那畔法無師。自悟自然成道奇。偶有出家新戒漢。劫空久遠在今時。

絕交會裡衆偶且以自警云

匡徒領衆立魔宮。汗馬從前蓋代功。師弟凡情共姦黨。可憐韓信嘆良弓。

行脚

咸陽金玉幾樓臺。方寸封疆歸去來。一箇出頭天外看。須彌百億草埃埃。

贊達磨大師半身

東土西天徒弄神。半身形像現全身。少林冷坐成何事。香至王宮薰帳茵。
讓羽山新叛一寺名虛堂寺扁大燈因述一偈
茅屋三間起七堂。狂雲風外我封疆。夜深室內無人伴。一盞殘燈愁點長。
擯出中川賀頌
不救病身勞病身。牆有禍會中寶。十年劍樹刀山底。萬劫難消阿鼻辛。

擯出中川賀頌
本非蛇影客盃弓。元字在心從劫空。昨日凡今日聖。無根雲起變通風。

病

馬祖不安閑話頭。毘耶杜口語不勝愁。夜々苦吟三十歲。月滿茂陵桂樹秋。
紅葉題偈以呈多欲之僧
滿庭落葉無僧掃。南陽擁來猶落草。自悔成欲界衆生。君子愛財是何道。
長祿庚辰八月晦日大風洪水。衆人皆憂。夜有遊宴歌吹之客。不忍聞之。作偈以慰云
大風洪水萬民憂。歌舞管絃誰夜遊。法有興衰劫增減。任他明月下西樓。
重題靈山和尚示榮衒徒法語後
李下從來不整冠。奔馳世上豈諛官。江山風月我茶飯。自咲一世吟味寒。
白居易問鳥窠和尚。如何是佛法大意。窠曰。諸惡莫作。衆善奉行。白曰。三歲孩兒也解恁麼道。窠曰。三歲孤兒雖道得。八十老人行不得。靈山和尚每曰。若無鳥窠一語。我徒盡泥乎
本來無一物及不思善不思惡。善惡不二。邪正一如等語。以撥無因果。而世多日用不淨之邪師也。故余作此偈以示衆云。

學者撥無因果沈。老禪一句價千金。諸惡莫作善奉行。須在先生醉裡吟。
余誠會裡徒曰。喫酒必須用濁醪。看則其糟而已。遂名之曰乾一酒。仍作偈以自咲云。

醉裡衆人奈酒腸。醒時伎盡毀糟糠。湘南流水懷沙怨。引得狂雲咲一場。
余四十年前聞乘拂僧在法堂上而說禪客之族爲。于商于工于行僕者流。各々許其所業。甚者乃臻出手以爲模樣矣。吁是何爲也。卽乃掩耳而出矣。因述二焉。意在革弊。凡四姓之入吾門皆稱釋氏。以其乞食而資命乞法而資性也。亦何貴胄望族之有哉
今世山林叢林之論人。必議氏族之尊卑焉。是可忍。孰不可忍乎。遂寫前偈以揭示四方。誰敢擊節。其偈曰。
說法說禪擧姓名。辱人一句聽吞聲。問答若不識起倒。修羅勝負長無明。

又

犀牛扇子與誰人。行者盧公來作貧。姓名議論法堂上。恰似百官朝紫宸。

佛眼遠禪師三自省曰。報緣虛幻不可諂爲。浮世幾何隨家豐儉。苦樂逆順。道在其中。勤靜寒溫。自愧自悔。

自悔自慚溫與寒。看々三界本無安。愚迷正是衆生樂。背蜜猶忘井底難。

作偈博飯喫

來往東山昔若今。飢時一飯價千金。荔支素老佛魔話。慚愧詩情風月吟。

贊松源和尙

娘生眼照大虛空。天澤兒孫在海東。滅却宗風三轉語。詞華心緒一天紅。

贊運庵和尙

黑魔境鬼眼睛開。五逆元來應聽雷。臨濟當時焚几案。道場觀面却衣來。

贊大應國師

看々佛日照乾坤。天上人間唯獨尊。禪老如無渡東海。扶桑國裡暗昏々。

贊大燈國師

晝出面門無覆藏。須彌百億露堂々。德山臨濟若入室。螢火應須遇太陽。

虛堂和尙三轉語

龍門萬仞碧波高。天澤面前誰畫牢。生鐵鑄成三轉語。作家爐鞴煅毛。

漁父

學道參禪失本心。漁歌一曲價千金。湘江暮雨楚雲月。無限風流夜々吟。

題靈山塔贈正傳庵僧

看來眞箇正傳庵。不說宗乘唯世談。凜々威風逼人冷。當機覿面有誰參。

題白樂天像

勳業名高白樂天。自然流落絕塵緣。叢林失志山林輩。莫訝双林寺裡禪。

思舊齋

山陽長笛子雲吟。蜜漬荔支素老心。熟處三生六十劫。一聲望帝月西沈。

又

昔年黃犬與蒼鷹。苦樂悲歡地獄能。欺得楊岐吾屋壁。乾坤一鉢一衣僧。

疎壁齋

楊岐天下老禪翁。從此大興臨濟宗。紅塵紫陌找乍住。山舍半吹黃葉風。

滅燈齋

眞前一盞太分明。乃祖靈光照太淸。德嶠悟道我不會。江湖夜雨十年情。

示斬猫僧

是吾會裡小南泉。信手斬猫公案圓。錯來自悔行斯令。驚起牡丹花下眠。

僧無尊卑

盧能馬箕姓名批。教外別傳越佛說。杜撰禪流井底尊。可憐皮下元無血。

謹白久參人

圓頂方袍姪奸。威風鐵逼人寒。古則參得家業。可愧妄長我慢。

又

莫言公案卽圓成。八角磨盤心上橫。邂逅難知自尿臭。他人敗闕鏡中明。

前年辱賜大燈國師頂相。予今更衣入淨土宗。故玆奉還栖雲老和尙。

謹白久參人

離却禪門最上乘。更衣淨土一宗僧。妄成如意靈山衆。嘆息多年晦大燈。

又

狂雲大德下波旬。會裡修羅勝負嗔。古則話頭何用處。幾多辛苦數他珍。

謹白久參人 崇宗藏主絕交

一善不行作諸惡。憎他妬他元字脚。口堅勁見地微弱。瞎禿禪宗門零落。人咲是無繩自縛。見他非不知己錯。日用工夫禍作略。暫時難得住虛廓。直指爲人又機作。如是禪話塡溝壑。好勢耽名之下度。到此誰人與刻削。參得古則心彌濁。醍醐上味爲毒藥。

看靈山行狀

宗門極則又聲訛。乃祖靈山前釋迦。採葉誰人點鬼簿。工夫日用俗塵多。

香嚴擊竹

潭水北兮湘水南。竹枝曲裡口喃々。樽前烟醉豪家客。不識愁人夜雨談。

示會裡徒法語

凡參禪學道。須勦絕惡知惡覺。而至正知正見也。惡知惡覺者。古則話頭經論要文。學得參得。坐禪觀法。勞而無功者也。如是之輩。當代四百四病一時發。爲人所辱。是情識之血氣也。對閻老面前。有甚伎倆乎。獅子尊者斷頭。白乳顯露分明也。正知正見者。日用坐斷涅槃堂底工夫。全身墮在火坑。子細看之。苦中有樂。若能見得。不昧撥無因果境。若見不得。永不成佛漢。可懼々々。如汲井輪略無停息。今旣得出家。僧相圓備在三衣一鉢下。想是過去幾生修來得如此乎。若是再入驢胎馬腹去。不知又經幾生歸來。改修此錯。努力々々。切須今生了達無如是殃過。念之思之。

右靈山和尙法語題其後云

互操高低。汲井輪。威音彌勒一回春。三世諸佛歷代祖。泉聲滴淚苦吟身。

我病不及良藥效驗。不及經咒靈驗。逐日窮困。有我情識。儞等諸人。縱雖刹那。縱雖一念。成眞正工夫。窮決未了處。到清實處。諸魔障頓除。老懷如意耳。衆無對。

右靈山和尚因病示衆法語。題其後云

不須經咒亂心頭。佛界佞窮魔界收。莫向愁人說愁意。相如雲雨渴望秋。

拜大德寺住持勅請之頌。呈廣德堂上柔仲和尚

大德大燈龍寶山。靈光天上又人間。燒香酌爇曇華叟。金色頭陀曾破顏。

文明甲午春拜大德禪寺住持勅請。門客交賀。吁。五十年簑笠淡如。勅黃捧照無愧于懷。乎。因作詩泄之。

大燈門第滅殘燈。難解吟懷一夜氷。五十年來簑笠客。愧慚今日紫衣僧。

再住妙勝寺之次。披虛堂和尚法衣。因合山淸衆需一偈。書以塞其請。

先祖還衣。順老留衣。斬作兩段。是松源衣。

龍寶山大德禪寺法語

山門

一跳直入。龍寶三門。門々有路。逼寒乾坤。

佛殿

古佛堂中露柱雲雨。作以手分破勢云。分破後如何。雲門霧露。

土地堂

上天是梵天帝釋。下天是多聞持國護法神。向何處見新長老。新長老聲 六々三十六。

祖師堂

祖師何人我何人。喝誰奪境奪人。

拈衣

祖師何人我何人。喝誰奪境奪人。

室

小艶平生心亂絲。慈恩先祖手中絲。順老明眼衲僧。擲裂說云是甚脚下紅絲。

僧堂

明頭來。明頭打。暗頭來。暗頭打。四方八面來。旋風打。虛空來。連架打。新長老。聲。乾坤一箇癡頑僧。

喝一喝云無人來問相如渴。敲破梅花一夜氷。打

浪院

平生癡頑小艶吟。酒婬色婬詩亦婬。擲拄杖云。七尺拄杖還常住。吹尺八云。一枝尺八少知音。

帖

頂戴即是。放下即是。溥天之下是王土。頂戴云。是々。

狂雲集 卷上終

狂雲集 卷下

大燈國師三轉語曰。朝結眉夕交眉。我何似生云々。何似生雖古尊宿罕有受用之者。唯慈明下清素首座能用之。雖然。晚年遇兜率悅公食荔支之次。遂納敗一場。惜乎。有始而無終。感懷之餘作五偈。記之偈曰。

這箇諸訛受用徒。古今衲子一人無。素老慈明的傳子。荔支核子嚼何麤。

慈明狹路得楊岐。覿面之機痛處錐。天澤愁吟風月客。繡簾吹動軟風扉。

工夫日用閉門車。五十年來烏有歟。素老荔支眞敗闕。德山臨濟亮如何。

暮天細雨片雲朝。名屬成都萬里橋。百年東海獨休歎。艷簡吟魂永日消。

工夫勞棹蔑公舟。尊宿織鞋蒲葉秋。野老難藏簑笠譽。誰人江海一風流。

大燈忌宿忌以前對美人

宿忌之開山諷經。經咒逆耳衆僧聲。雲雨風流事終後。夢閨私語笑慈明。

止大用庵破却 寛正五年

破邪顯正識情。勝負人我無明。可淡出塵羅漢。青天月白風清。

又

認定盤擔板漢禪。衲僧作略豈膠絃。殺活縱横悉手段。鑄消正印漢王前。

題大德寺勘亂

禪者爭禪詩客詩。蝸牛角上現安危。殺人刀矣活人劍。長信佳人獨自知。

又

伏虎將軍是我徒。英雄不失惡魔途。吹毛三尺掌握內。佛法南方一點無。

訪養叟的子淵長老癩病

毒蛇窟宅洛陽東。癩病深懼享徹翁。紹淵養叟正傳子。學得天衣佛日風。

又

病輕脉重咸淳禪。病重脉輕會昌禪。就中腐烈養叟輩。病脉並損今日禪。

賀淵長老鷲峰新造寺以訪癩病十首

癩病脚跟毒氣生。殿堂新造勢崢嶸。鋤頭咔破鷲峰頂。荒草山前無一塹。

栴檀佛寺利名禪。公案纏腰十萬錢。滿目青山法眼境。鷲峯樵客蹈通玄。

鷲峯建立大伽藍。普請崩山又碎岩。五臟敗壞成膿血。黄衣癩肉臭汗衫。

妄參佛祖謂因緣。天道豈饒逢薄膓。食淡志潔吾自榮。志姦食美汝家傳。

癩孫無尾出人前。乃祖弄嘲天下徧。拈棒下喝送一送。始看勾欄歌舞禪。

大燈下門單于境。姦賊此時開法筵。厚面無慚唯畜類。古今無若此癩師。

風流入室苾蔕尼。因憶慈明狹路時。腸斷纖々星露手。暗吟小艷一章詩。

頤淵禪話太新鮮。星露開拳又出拳。龍寶山中惡知識。言詮古則盡虛傳。

得果投機多教人。胥銅定價兩三緡。休歌亡國伊州曲。莫術乾坤天寶春。

引伴集徒幾癩兒。面門眼上總無眉。法中姦黨自了漢。傳授無師話有私。

題頤來的々付兒孫

頤卦題名貪食來。會中膾炙寵如梅。攫金手段輪轉。君子果然多愛財。

謝人贈鹽醬

胡亂天然三十年。狂雲作略這般禪。百味飲食一樑裡。淡飯鹽茶屬正傳。

病中

破戒沙門八十年。自慚因果撥無禪。病被過去因果々。今行何謝劫空緣。

又

美膳雖具一鰥魚。小艷工夫日用虛。婬色吟身頭上雪。目前荒草未曾鋤。

代ニ斷レ頭罪人ニ

六條河畔。斷頭場。逼面殺人三尺鋩。伎窮情盡魔途失。空斷春閨夢裡腸。

又

或人瞠眼或低頭。各是波句之道流。多年風月即今劍。大地山河滿目愁。

羅漢遊ニ婬坊ニ圖

羅漢出塵無識情。婬坊遊戲也多情。那邊非矣那邊是。衲子工夫魔佛情。

又

出塵羅漢遠ニ佛地ニ。一人ニ婬坊ニ發ニ大智ニ。深咲文殊唱ニ楞嚴ニ。失却少年風流事

涅槃像

作佛披毛無ニ主賓ニ。春愁二月涅槃辰。有情異類五十二。混雜紫磨金色身。

又

頭上北洲脚下南。前三々與ニ後三々ニ。逼ニ塞乾坤ニ。釋迦像。看來惠日一伽藍。

嘲ニ熊野權現ニ

靈ニ跡三山ニ。榎本頭。百由旬瀑直飛流。室郡休レ道馬不レ進。徐福精神物外遊。

閑工夫辱ニ榮衒徒ニ

金襴長老一生望。集レ衆參禪又上堂。樓子慈明何作略。風流可レ愛美人粧。

正工夫示ニ久參徒ニ

機輪轉處實能幽。臨濟正傳名利謀。一枕春風難足曉。三生夜雨馬嵬秋。

洛下。昔有ニ紅欄古洞兩處ニ。曰地獄。曰加世。又安衆坊之口有ニ西洞院ニ。諺所レ謂小路也。

欧酒之客過ニ此處ニ者。皆爲ニ風流之清事ニ也。今街坊之間。十家四五娼樓也。淫風之盛

幾ニ乎亡國ニ。吁。關雎之詩可レ想乎哉。不レ足ニ嗟嘆ニ。故述ニ二偈一詩ニ。以詠ニ歌之ニ。頌曰。

同居牛馬犬兼レ雞。白晝婚姻十字街。人道悉是奇生道。月落長安半夜西。

佛交ニ露柱ニ一同途。邪法此時難レ得レ扶。榮衒徒似ニ作家漢ニ。佛法胸襟一點無。

婬風家國喪亡稔。君看雎鳩在ニ彼洲ニ。隨レ例宮娥主恩夕。玉盃夜々幾春秋。

俗人婬坊門前吟レ詩歸

樓子無心彼有心。婬レ詩詩客色何婬。宿雨西晴小歌暮。多情可レ愛倚レ門吟。

相國寺沙喝騷動

元來長久萬年山。葉戰松杉風外間。濟北蔭涼宗風滅。白拈手段活機關。

童謠

童謠逆レ耳野村謳。唱起家々亡國愁。十年春雨扶桑淚。稼穡艱難廢址秋。

又

皇城山野々皇城。變レ雅變レ風人不レ平。骸皮秋搜山骨露。狂雲一片千年情。

看二杜詩一

古今詩格舊精魂。江海風零亦主恩。仰叫二虞舜一一生淚。淚痕濺洒裳二乾坤一。

又

淚愁春雨又秋風。食噉難レ忘天子宮。詩客名高天寶事。寒儒忠義也英雄。

示二淫色人一

巫山雲雨夢中神。君子猶迷況小人。風流聖主馬嵬淚。龜鑑明々今日新。

又

濮上桑間唱二哇音一。風流年少寵尤深。世界三家村裡客。重華不レ識二妃吟。

又

所愛肉身喰食忠。心肝生鉄一天功。男兒死處色何屈。惱亂楊花甲帳風。

會裡僧與二武具一

說禪學道本無能。亂世英雄一錫僧。覿面當機若行レ令。鉄圍百億棒頭崩。

又

道人行脚又山居。江海風流簑笠漁。逆行沙門三尺劍。不レ看二禪鉄一讀二軍書一。

因亂

請看凶徒大運レ籌。近臣左右妄優遊。薰帳畫屏歌吹底。衆人日夜醉悠々。

又

忠臣愁思在二功勳一。世上汗淋不レ識レ君。儒雅十年情寂々。貴遊一夜醉醺々。

示二會裡俗徒一警策

前車覆處後車驚。警策怠時禍必生。半醉半醒夜遊客。烏啼月落月三更。

又

詩歌吟詠失二全功一。天上人間軍陣中。意舞醉歌休レ度日。飛揚跋扈爲レ君雄。

因亂寄二坊城少納言一

當代菅儒少納言。詩文家業動二乾坤一。英雄亂世好二風月一。長劍大弓酹二主恩一。

懺二悔抜舌罪一

言鋒殺戮幾多人。述レ偈題レ詩筆罵レ人。入裂七花舌頭罪。黄泉難レ免火車人。

亂裡

國危家必有二餘殃一。佛界退レ身魔界場。臨レ時殺活納僧令。君看忠臣松栢霜。

又

獨坐頻忙萬晦心。誰人忠義此時深。曉天一睡枕頭恨。朝日三竿夢裡吟。

關東御上洛

虎軍萬騎已東來。京洛凱歌一曲催。相坂關門後日路。胡兒性命馬蹄埃。

淫坊頌以辱得法知識

話頭古則長欺謾。日用折腰空對官。榮衒世上善知識。婬坊女兒著金襴。

日用

日用正工夫。挽弓東射胡。殺佛殺祖令。波旬失却途。

祝聖

海內太平便現前。清風明月碧雲天。萬年七百高僧行。看々天龍正覺禪。

德政

賊元來不打家貧。孤獨財非萬國珍。信道禍元福所復。青銅十萬失靈神。

亂裡工夫

每朝高叫大忙々。受敵機先當八方。觀法坐禪休度日。但須勤跋扈飛揚。

泉涌寺雲龍院後小松院廟前菊

衰龍錦袖碧雲天。叡信宗門列祖禪。生鉄鑄成黃菊意。秋香未老玉階前。

日課

如法如說衲僧眼。經咒讀誦百千返。三百六十日課前。風雨雪月吟詩簡。

大平正工夫

天然胡亂正工夫。昨日曉明今日愚。宇宙陰晴任變化。一回斫額望天衢。

亂世正工夫

丈夫須具正見。諸妄想隨境現。馬問良馬麽無。人答此刀利劍。

小欲知足

千口不多富貴愁。家貧甚苦一身稠。涓水鯉魚斗水望。明朝萬扇廣河流。

又

果滿羅漢有三毒。純一願小欲知足。無衣貧病得相治。山堂一衾閒促織。

惡行衆生贊

行惡衆生與惡亡。善人壽命自然長。十人七八箇滅却。長祝當今千歲昌。

習心

一晝夜八億四千。念々不斷自現前。閻王不許詩風味。夜々吟魂雪月天。

自戒

罪過彌天純藏主。世許宗門賓中主。說禪逼人詩格工。無量劫來惡道主。

愛念盟

婆子侍慈明老師。婚姻脚下結紅絲。驪山春色三生睡。千歲海棠花一枝。

又

恩愛紅塵誰人掃。娘生赤肉父子道。羅睺羅箇歡喜丸。携來直授釋迦老。

地獄

十方世界盡乾坤。水火寒溫人命根。看々米穀閑田地。是衆生之地獄門。

又

黃泉境界幾多勞。劍是樹題山是刀。朝打三千暮八百。目前獄卒眼前牢。

冬夜螢火。和州紀州兩國際。山野充滿。因禪詩二章以祝之云。

螢火爭陽智與愚。衆生定業佛難扶。一天星斗皆朝北。帝釋南方一點無。

滿山螢火諸人看。凶事南方也太難。可憐貴賤共自滅。廢苑秋風多夜寒。

寒夜嘆雪山鳥

朝來公案晚來吟。求食忘巢前棘深。晝夜人々雪山鳥。無間苦痛月沈々。

嘆孤獨老人多欲

千古無多富貴時。青銅十萬讓阿誰。必定後生三惡道。老人何事不前知。

相對

二月涅槃寂滅辰。一刀兩段也心身。不生不滅佛難得。花約有無相對春。

亂中大背會

當今聖代百王蹤。玉体金剛平穩容。風吹不動五雲月。雪壓難摧萬歲松。

各見不動

水流四念不同心。佛界魔宮亘古今。寒窓風雪梅花月。酒客弄盃詩客吟。

敬上天子階下

財寶米錢朝敵基。風流兒女莫相思。扶桑國裡安危苦。傍有忠臣心亂絲。

又

乾坤海內起烟塵。昨夜東風逼四隣。禍復美人身上事。榮華可悔馬嵬春。

善惡未曾混世爲善者朋皆黨桀也雖必爲鵰所擊。鼠必爲猫所咬。是天賦所前定也。一切衆生之歸佛。善而免生死之淪沒者亦猶若茲。困作偈以示衆云。

麗雉鼠猫元自然。威音劫來習因緣。照看華清殘月曉。明皇齶鑑馬嵬前。

又

渦現未誰人了達。惡人沈淪善者脫。風流可愛公案閑。德山棒兮臨濟喝。

又

風流脂粉又紅粧。等妙如來奈斷腸。知是馬嵬泉下魄。離魂倩女謫扶桑。

又

身心不定假與眞。欲界衆生沈苦辛。愁夢三生六十劫。劫無色馬嵬神。

君子財

詩人財寶是文章。儒雅乾坤日月長。窓外梅花吟興榮。腸寒雪月曉天霜。

貴人財

龐老棄錢誰擧揭。曾撞玉斗亦何妨。庭有梅花窓有月。鉄欒紙帳五更霜。

嘆日旗落地

錦旗日旗動龍蛇。聖運崇長救國家。化雷踢殺五逆輩。誓爲朝廷作惡魔。

因亂

韓信昔年雲夢殃。人心眞僞自然彰。安危不定箇時節。人畜難分荊棘墻。

美色傾城

幽王上古見今時。一咲花顏燧火姿。八熱八寒鬼窟裡。馬嵬辱井劫空悲。

山名金吾。鞍馬毘沙門化身

鞍馬多門赤面顏。利生接物現人間。開方便門眞實相。業屬修羅名屬山。

婦人多欲

美人得寵美人珍。珠玉青鞋脚下塵。秋滿驪山宮樹月。榮華可悔馬嵬春。

東披山谷同僧

海內文章汝面前。誰知鍛煉獨天然。說法上堂法堂上。如來禪與祖師禪。

大應國師贊妙勝寺

大唐國裡沒禪師。傳受明々東海兒。一天法窟妙勝寺。天澤宗風更有誰。

乙石御用人向妙勝寺眞前髮置賀頌

三歲生年小女兒。終吾門老比丘尼。壽算婆裙綿延錦。孩兒垂髮白如絲。

乙石御用人待知客歸寺

知客他行乙石愁。歸來日數在心題。斫額天衢望晴雨。愛看昔日摘星樓。

贈山徒

顯密天台妙樂途。分明傳教大師徒。山猿叫落四樓月。七社靈神鎖帝都。

不殺生戒

李廣將軍一片心。多年石虎識情深。殺人端的不貶眼。敢忍燈前夜雨吟。

不偸盜戒

鵝鳥存珠刑罰辛。分明曲直僞兼眞。翠巖老漢眉毛話。保福豈非家裡人。

不邪婬戒

婬坊年少也風流。嬉吻抱持狂客愁。妄鬪楊蒲李群玉。名高盧舜辟陽侯。

不妄語戒

一字不說不信道。大藏經卷已落草。漚和元來截流機。怪哉父少而子老。

不飲酒戒

痛飲三盃未濕脣。醉吟只慰樂天身。稜道者任念起處。宣明酒伴也誰人。

南園殘菊

晚色東籬衰色秋。南山且對意悠々。三要三玄都不識。淵明吟與我風流。

高野大師入定

生身大日覺王孫。出入神通活路門。迦葉惠持長夜魂。秋風春雨月黃昏。

三毒

貪嗔根本自痴愚。人我無明利徒。一箇無心閑道者。近年林下一人無。

不殺生戒

全體作用迷鬼眼。勝負修羅英雄念。望帝一聲月三更。殺人刀與活人劍。

不邪淫戒

痛飲誰家樓上謳。少年一曲亂心頭。阿難逆行婬坊曉。妙解方便殘月秋。

又

逆行慈明婆子身。紅絲脚下絆婚姻。一曲樓頭綠珠曲。可憐昔日趙王輪。

又

沙門何事行邪淫。血氣識情人我深。淫犯若能折情識。乾坤忽變作黃金。

自讚毀他戒

麼王眷屬沒商量。得失是非幾斷腸。前他後我如來願。前後工夫三會長。

又

五逆聞雷臨濟訣。大慈大悲太親切。活人劍兮殺人刀。欲污人滿口含血。

又

誰共修歸正破邪。若非情識。又何過。這般作略仔細看。座主見知還作家。

誹謗三寶戒

杜撰飯袋惡禪和。塞竅滿溝亡國家。歸依佛法僧覆越。閑看世間殘照斜。

人境懷古

境無心燈籠露柱。人辨別珠玉塊土。一夜五十年前吟。青塚殘月巫山雨。

又

兩片反復一具骨。鳥虫馬牛更魔佛　混沌未分暗昏々。雲月知爲誰風物。

倭國以譬喩作實

勘辨人邪毒氣深。元非君子小人心。暗認譬喩作實會。苦衣雲帶槃天吟。

又

今時日用誰人道。超越佛祖是野老。這般輩法中畜生。胸襟愚不鋤荒草。

異類中行

異類馬牛中行途。洞曹濫仰正工夫。愚昧學者誤領解。看來正是畜生徒。

井

高下互見打水輪。衲僧轆々轉機輪。安禪出定清華曉。汲盡天邊月一輪。

又

吸盡西江公案圓。工夫不管溺深泉。不借寸繩千尺底。西來祖意爲人禪

山居

孤峰頂上出身途。十字街頭向背衢。空聞夜々天涯雁。鄉信封書一字無。

示榮衒徒

人家男女魔魅禪。室內招徒使悟玄。近代瀾人頗養叟。彌天罪過獨天然。

認論作實

野老劫來日用今。私事公案誤晴陰。昨夜打窓零落葉。蕭々聽作雨聲吟。

山中開藥圃

要錢賣藥不修琴。度世工夫貪欲深。山堂夜雨風流榻。自絕松風閑道吟。

示邪婬僧

銀燭畫屏殘月曉。錦茵甲帳落花春。生身若墮在火坑。花顏玉貌也何人。

少年道心老來失

五十年前大道心。來生未隔已忘今。朝得夕死立地佛。一旦廢心百煉金。

又

失ニ却悟徹一、總ニ閑事。去劫來劫又如レ此。金鑰、正邪佛雖レ分、聞設佛魔隔ニ一紙一。

題ニ黄檗禮佛一示ニ榮衒徒一

禮佛、家風眞ニ作家。作家汝榮衒誦訛。奪レ食驅レ牛成ニ伎倆一。米錢名利ニ謙過他一。

又

閻老面前尤苦哉。飯錢今日急ニ還來一。話頭、古則商量價。棒喝邪師度世財。

臨濟曹洞座主各末後句

大死底、人心塊土。元來是燈籠露柱。變易、分段只任地。新月黄昏五更雨。

又

平生、信施涅槃堂。暮往ニ天台一南岳朝。公ニ道世間一唯病苦。貴人身上不ニ曾饒一。

惠日有ニ憎愛一

一段、多情栗棘愁。回光返照晦ニ心頭一。工夫長養不レ得レ怠。動靜起居春又秋。

贊ニ法然上人一

法然傳聞活如來。坐蓮華上品臺。敎ニ智者如ニ尼入道一。一枚起請最奇哉。

作家

臨濟德山非ニ作家一。棒頭喝下任ニ師誇一。堪レ笑伎倆與ニ鼻孔一。照見高低日影斜。

又

忍辱、仙人常不輕。道心須ニ是盡ニ凡情一。恁麼白淨眞衲子。可レ動觀法又看經。

傀儡

抽牽者、卽主人公。地水合成隨ニ火風一。一曲勾欄曲終後。本然大地忽爲レ空。

洛陽火後

寒灰充塞洛陽城。二月和レ花春草生。黄金宮殿依然在。勅下千秋萬國清。

嘲ニ文章一

人具畜生牛馬愚。詩文元地獄工夫。我慢邪慢情識苦。可レ嘆渡句親得レ途。

又

傑作、詩文金玉聲。言々句々諸人驚。閻王豈詐ニ雅頌妙一。鉄棒應レ惶鬼眼睛。

元本無明

法塵習著奈ニ相思一。李杜蘇黄音律、詩。弓影客盃元字脚。生身入ニ地獄一如レ矢。

破ニ譬喩一示ニ病僧一

弓影膏肓在ニ酒中一。毒蛇影落客盃弓。楓林紅葉蜀紅綿。染得心頭滿目紅。

利欲忘名

利欲、農夫商女、情。絶レ交、美譽與二芳聲一。梅花雪月非二吾事一。貪二清米錢一忘二却名一。

又

賣弄深藏貪欲心。中心密々要二黄金一。詩情禪味風流譽。秋思春愁雲雨吟。

恥色、喪德

酒伴詩僧久絶レ交。獨吟月滿二松梢一。楚臺愁夢是吾菊。杜牧味清婬色嘲。

偶作

患是衆生良藥訣。祖病當機臨濟喝。琴臺暮雲茂陵吟。五十年來相加渴。

又

我唯有二一息出入一。日面月面忘二左右一。釋迦老師大覺尊。祖病治得用二牛乳一。

又

室内閑吟一盞燈。自然無レ道箇詩僧。愁人春興猶二寒夜一。袖裡花殘梅蕚氷。

頌

暫時此地弄二精魂一。臨濟後牙興二祖門一。美譽芳聲世間外。五雲天上月林孫。

元日賀二官軍破一凶徒一

元正先破レ豪。處々凱歌高。百萬朝廷卒。不レ能二損一毛一。

偶作

惠命微々懸二一絲一。分明臨濟正傳師。識情名利山林客。夜々秋風枕上吹。

又

睡裡海棠春夢秋。明皇離思獨悠々。三千宮女情難レ慰。更逐二馬嵬泉下遊一。

懷古

愛念愛思苦二胸次一。詩文忘却無二一字一。唯有二悟道一無二道心一。今日猶愁沈二生死一。

又

十年溺レ愛失二文章一。不二是行一天然即忘。輪轉再論近年事。輪廻斷盡隔生腸。

警策

苦哉色愛太深時。忽忘却文章與レ詩。不二前知一是自然福。猶喜風音慰二所思一。

又

夢熟巫山夜々心。蘇李杜好詩吟。若將二淫欲一換二風雅一。價是無量萬兩金。

迷悟

無始無終我一心。不成佛性本來心。本來成佛々妄語。衆生本來迷道心。

題二點頭石一。訶二虎丘祖師一

不レ信レ道石點。若點頭非ニ石流ニ石有レ靈是妖レ怪。吾祖師老虎丘。
不レ行ニ成佛一

天然之釋迦彌勒。六々元來三十六。達磨九年佛六年。成佛作祖盡ニ精力一。
示レ焚ニ書籍一僧

始皇自然辨ニ邪正一。波旬餘殃如レ看レ掌。看々劫火洞然時。書籍金剛不懷性。

又

樹下石上茅廬。詩文疏鈔同居。欲レ焚ニ囊中遺稿一。先須レ忘ニ腹中書一。

又

腹中地獄成。無量劫識情。野火燒不レ盡。春風草又生。
示ニ耽名僧一

南北東西不レ可レ量。扶桑粟散國封疆。耽名愚鈍畜生道。望帝一聲聽斷腸。

又

金烏玉兎照ニ籠中一。百億須彌迫ニ碧空一。香水無邊四大海。畜生無始又無終。
示ニ弄業文筆僧一

苦楽愛憎影與身。寒溫喜怒境兼レ人。平生吟興黃泉路。地獄門前桃李春。

弔ニ戰死兵一

赤面修羅血氣鬱。黑靡震動破ニ乾坤一。鬪諍負時頭腦裂。無量億劫舊精魂。

偶作

我本來迷道衆生。愚迷深故不レ知レ迷。縱雖レ無レ悟若有レ道。佛果天然立地成。
心隨ニ萬境一轉

今日佛心猶未レ生。衆生界地獄先成。萬機萬境皆情識。轉處能幽劍戟城。
佛魔一紙

聖凡萬里隔ニ鄉關一。清淨沙門塵事間。殘雪殘梅窓外月。吟中猶劍樹刀山。
以ニ婬欲一換ニ詩文一

衆窶及第大雄尊。著述佳名我命根。愁夢未レ修雲雨約。君恩猶喜費ニ吟魂一。

頌

忘ニ却萬端一詩未レ忘。半生半死涅槃堂。黃泉路上此吟興。閻老宮前後悔腸。
看ニ妙莊嚴王品一

妙莊嚴昔日因緣。睹秃道光輝ニ我前一。閻老不レ吟玉堦月。黃泉後悔碧雲天。
禮ニ常不輕菩薩一

記得昔年常不輕。可レ煌血氣衆生情。看々火宅脚跟下。滿目無間獄大城。

忍辱仙人

須レ成忍辱波羅蜜。是如來甚深秘密。心火燒盡菩提根。阿修羅王滅二佛日一。

圓悟大病

涅槃堂裡絶二言詮一。棒喝機關法座禪。睡裡花顏猶二醉眼一。春風腸斷海棠前。

又

巫山夜々夢難驚。艶簡題詩對二鐵檠一。只爲二檀郎一呼二小玉一。風流可レ愛美人情。

又

狹路慈明色欲二。庭前栢樹祖師心。惡魔臨濟正傳境。雲暗姮娥落二玉簪一。

又

娘生佛果已圓成。大病苦中無二識情一。小艶詩情人不レ會。鷄聲茅店月三更。

弔二宗祐老僧一

宗祐僧牛誰面門。本來心逼二塞乾坤一。獨向二眞前一謹乞レ命。要二須弔祐老幽魂一。

和弔二宗祐老僧一頌韻

或作二僧形一或馬牛。曹溪滴水百川流。南山吟與東籬菊。花綻三玄三要秋。

題二江々美人勾欄曲一

見色聞聲吟興長。明心悟道沒商量。愁人不レ識普賢境。歌二次樽前一總斷腸。

泉涌寺僧行レ棒

八稜八尺倚二長天一。拈起向二秋山面前一。衲子當機拱手處。洞山三頓德山禪。

偶作

餓鬼苦多也畜生。人家魔魅長二凡情一。飢渴病苦五噎患。邪師知識野狐精。

鳩鹿狐饑悔

麋鹿生涯猶狨愁。鳩因二婬欲一苦二心頭一。四時難レ愕此愁夢。一枕西風夜々秋。

除夜

金吾除夜死二山名一。從レ此黄泉幾路程。太平天子東西穩。九五青雲無二客星一。

圓相

誰參爲仰一宗禪。圓頂沙門心豈圓。剃頭外道長二情識一。定與二魔王一結二惡緣一。

又

生死輪廻恰似レ環。人々這末後牢關　寸步不レ移脚跟下　生身墮二鐵圍山一。

圓成公案愛風流。逆行機關爲仰鑽。愁殺樽前夜遊客。美人一曲玉樓謳。

示禮佛祖請福力僧

禰客恨多天地人。愚哉鬼窟舊精神。元來諸法從緣起。風月沈吟一箇貧。

食籍

飯後食籍聊茶湯。竹縛菊籬梅補墻。人間世諦盡餓死。地獄淚離安樂長。

寄近侍美妾

淫亂天然愛少年。風流清宴對花前。肥似玉環瘦飛燕。絶交臨濟正傳禪。

送僧行脚

參禪學道扣玄人。世界蒲鞋脚下塵。象骨老師三九旨。常成飯頭苦心身。

見桃花圖

見處風流悟道心。桃花一朶價千金。瑤池玉母春風面。我約愁人雲雨吟

又

開陣玄沙法戰場。宗門議論老禪場。衲僧遊戲諸三昧。杖腰句桃李場

香嚴擊竹

對靈忽然盡識情。道人龜鑑太分明。娘生佛見南陽境。腸斷黃陵夜雨聲。

又

拋來茗蓼動風塵。看々聞聲悟道新。半夜千竿修竹雨。南陽塔下弄精神。

又

久響香嚴一擊聲。可憐悟道發佳名。蕭々逆耳竹扉雨。滴盡南陽塔下情。

普明國師破百丈大智禪師法

破夏文珠宗旨勳。衲僧三昧似商君。祖師大用現前境。南岳巫山一片雲。

靈山徹翁知尚百年忌

僧運酬恩妙勝薪。靈山昔日涅槃辰。二千四百年前境。梅雨流紅五月春。

又

癲兒牽伴出人前。魔魅人家常說禪。龍寶封疆幸滅却。靈山記莉瞎驢邊。

陳蒲鞋八首

老禪本鉄眼銅睛。不是北堂慈愛情。天下衲僧脚跟下。宗門潤色綠蒲青。

唯有宗門零落愁。錯來末法幾禪流。春風桃李吟無酒。尊宿榮華蒲葉秋。

黃衣尊宿事如何。不是當機信手拏。三家村裡野老業。棒喝商量豈作家。

元來黃檗下之尊。臨濟師兄不用論。佛法南方今落地。北堂寂寞苦吟魂。

眞正工夫任ニ變通一。達磨建立佛心宗。雲起ニ南山一北山雨。來吹過樹頭風。
堪レ笑米山無ニ米錢一。誰參尊宿織蒲禪。衆生五欲八風起。看々正邪今現前。
說道詩禪長ニ利名一。工夫亂裡築ニ愁城一。門闌空折韶陽脚。折得江湖門弟情。
無レ米米山名下空。宗門玄要老禪翁。七寶莊嚴之富貴。平生氷雪又寒風。
歇林林翁侍者相レ攸構レ居。扁曰ニ傳正一。因作レ偈以爲レ證云。
宗門滅却法筵開。狹路蒸明顚倒來。墻外自然樵客迹。爪流可レ愛斷崖梅。

再來隔生卽忘

講經大士喚爲レ誰。彌勒當來之導師。爐鞴鈍鐵出ニ生鐵一。利劍鈍刀鐵不レ知。

自然外道

大道廢時人道立。離ニ出智惠一義深入。管絃歌吹人倫能。風雨世間之音律。

又

聰明外道本無知。精進道心期ニ幾時一。天然無ニ釋迦彌勒一。萬卷書經一首詩。

地獄

三界無レ安。猶如ニ火宅一。箇主人公。瑞岩應諾。

岩頭和尚

名風流面皺胡。胡鬚黑也赤鬚。舌頭絕ニ勝文章一。脚下蹈ニ斷道儒一。天下納僧痴愚。邪法而今難レ扶。
象骨老師小巫。臨濟渡子同途。着々作レ樣作レ摸。頭々入レ細入レ麤。橫レ棹一ニ拶江湖一。江湖議論
區々。

確頌曰

世間種々囊公圖。道伴知音一箇無。夜雨篷窓江海燭。宗門零落盡ニ工夫一。

學林宗參庵主水葬

參禪學道閑忽々。六十年來任ニ變通一。流水千古機輪轉。閻浮樹下月如レ弓。

題ニ圓悟大師投機頌後一

新題小艷一章詩。詩句工夫說向レ誰。殘生白髮猶婬レ色。鬼眠閻魔決ニ是非一。

四睡圖

凡聖同居何似生。披毛作佛也分明。今宵極睡淸風枕。空劫以來松有レ聲。

運庵還ニ松源衣一留ニ頂相一

這三轉痛處針錐。看々宗門句裡機。爭奈石溪肩上土。拾來脫屣一號ニ傳衣一。

弟子癖

從レ參ニ臨濟大人禪一。元字脚頭心念前。卽今若作ニ我門客一。野老風流美少年。

自贊

分明畫出許渾圖。吟撚徑山天澤鬚。嗜譽求名不愛利。風流寂寞一寒儒。

臨濟曹洞善知識貢欲熾盛

米饐膝下靈堂々。辛苦沉淪萬劫腸。賊智不妨渦君子。德山臨濟沒商量。

癖

臨濟德山棒喝禪。睦州蒲葉戳公船。左傳蠟屐一時忘。不是和嶠我愛錢。

東坡像

竺土釋迦文殊師。即今蘇軾更看誰。黃龍禪味舌頭上。萬象森羅又與詩。

偶作

臨濟門派誰正傳。風流可愛少年前。濁醪一盞詩千首。自笑禪僧不識禪。

嫌抹香

作家手段孰商量。說道談禪舌更長。純老天然惡殊勝。暗鑿鼻孔佛前香。

病僧與五辛

病僧大苦發傷風。死脉頻々命欲終。如來新病用牛乳。莫忌凡身藥草葱。

示久參徒

看經看教無閒業。應庵但許白淨業。參禪學道閑話頭。可懼身口意三業。

薄氷

但看江海薄氷地。不管人々心上危。可憐極苦目前急。迷道衆生終不知。

金春座者歌

唱得雲門王老禪。朝遊東土暮西天。震旦徑山上堂後。建仁擊鼓法堂前。

岐岳和尚龍寶山住院時請御所喝食。於看雲亭夜々酒宴。因一休和尚相看。岐岳問一和尚曰。汝於老僧境界知耶不知。答曰。知。問曰。試擧看。答曰。茂陵多病後。愛卓文君。岳大咲絶倒。隨後打曰。請爲老僧題無住榜。休便題曰。

龍寶禪翁活眼睛。孤明歷々磊苴石。黃金詞賦文君恨。師笑茂陵空薄情。

又

高亭賜斷夜參僧。歌舞花前酒如潮。長老雲門塔下逆。眞前雲雨五更燈。

畫梅

目前春樹屬孤山。上苑一枝無客攀。七寶青黃鸞紅白。淡烟疎雨祖師關。

自贊四首

大機大用總絃膠。如法作家淸宴脩。文君絞酒相如瑟。終奈薄情無賴嘲。

文章禪話不知眞。未得道流分主賓。慚愧永劫拔舌業。筆頭罵盡一天人。
傍若無人閑逸心。奈何床下法塵深。夢閒銀燭繡簾月。白日青天咲朗吟。
純老佳名發海東。天源派脉截流通。德山臨濟在何處。歌吹夢閒殘鶯鐘。
脫鱗鯉魚。庖中得活。

活潑々時池水清。怪哉端的死中生。飛潛天地納僧眼。雲晴龍門點額情。
應無所住而生其心

祖師禪不是如來。接物利生尤苦哉　明歷々金剛正體。百花春到爲誰開。
警念起所

公案工夫暮與朝。山堂夜々雨蕭々。地獄猛火百萬劫。滿腹詩情幾日消。
不嫌念起所。

平生贏得鬻苴名。信口言詮群衆驚。自譖毀他長情識。乾坤江海我詩情。

又

脚下紅絲妻子盟。驪山私語約三生。良宵共愛夢閒月。照看一聲望帝情。
念起所

三十年來江海情。空吟野水釣船橫。偶然我負子陵業。興在詩非勦絕名。

末後涅槃堂懺悔

風骨氣象頗兼詩。乘興邪慢吟撚髭。惡魔內外託吾筆。猛火獄中無出期。

又

艶簡艶詩三十年。虛名天澤正傳禪。吟身半夜與燈瘦。雪月風流白髮前。

童子南詢圖

知識華嚴五十三。美人勝熱抱持談。南方佛法非吾事。腸斷風流童子參。

紹固喝食

四歲女兒歌舞前。約深難警因緣。棄恩入無爲手段。座主作家誰是禪。

贊欽山禪師四百

佳名勦絕利貧稠。茶店美人誰好仇。爭識洞山下尊宿。慈明狹路好風流。
上堂杂話作家禪。點檢將來新婦禪。錦帳香囊風起臭。洞山佛法是何禪。
濟家純老機生鐵。一條活路途與轍。雪峰岩頭無眼睛。千歲蓮磨宗敗闕。
屎床鬼子大難心。定老當機恩力深。夜雨燈前渾卽忘。風流茶店舊時吟。

辭世

今宵拭淚涅槃堂。技倆盡時前後忘。誰奏還鄉眞一曲。綠珠吹恨笛聲長。

嘆二龍翔門派零落一三首

扶桑國裡沒二禪師一。東海兒孫更有レ誰。今日窮途無限淚。他時吾道竟何之。

東海兒孫誰正師。正邪不レ辨盡偏知。狂雲身上自屎臭。艶簡封書小艶詩。

或儒者或教家僧。不レ管二人天大衆僧一。飛來蝙蝠暮堂裡。怪長二無明一滅二法燈一。

渡江達磨

去々來々隨レ意行。乾坤萬里俗塵生。西天此土姓名重。脚底脚頭蘆葉輕。

三界四首

來往生靈六道街。修羅鬪諍沒二生涯一。人間未レ得二諸天樂一。闕減娑婆事々乖。

餓鬼畜生無二菩提一。劫空法習徹二吾臍一。無色衆生淚如レ雨。月沈望帝一聲西。

威音那畔本去劫。彌勒常來又來劫。依草附木舊精魂。可レ憐三生六十劫。

須レ參最上乘之禪。等妙如來豈自然。三界無安猶火宅。三車不識在二門前一。

示二南坊一偈

男色與盡對レ妻淫。狹路慈明逆行心。容易說レ禪能忌レ口。任他雲雨楚臺吟。

制戒

貪看少年風流。風流是我好仇。悔錯開二爲人口一。今後誓縮二舌頭一。

泉堺衆絶レ交。

耽レ利好レ名天澤孫。靈光失却大燈門。梨冠瓜履人疑念。伎倆當機報二佛恩一。

又

參學之徒無二道心一。紅紫朱色以レ錦金。忠言可レ逆人々耳。牛馬面前空鼓レ琴。

松原和尚

松源靈隱老師禪。破法攀條省數錢。囊中我レ沒二半文蓄一。狂客江山三十年。

又

巡堂合掌又燒香。竪拂拈槌坐二木床一。臨濟正傳也何處。一休東海斷二愁腸一。

拾二馬糞一修二斑竹一

煨芋灰殘舊話頭。不レ求二名利一太風流。相思無レ隙此君雨。拭レ淚獨吟湘水秋。

又

看々我養鳳凰心。燕雀鳩鴉山野禽。臨濟栽レ松一休竹。三門境致後人吟。

對二臨濟畫像一

臨濟宗門誰正傳。三玄三要暗驢邊。夢閑老衲閑中月。夜々風流烟醉前。

闇浮樹

闔浮樹逼塞乾坤。葉々枝々我脚跟。太極梅開紙窓外。暗香疎影月黄昏。

勢妙勝寺竹木

在官忘却不容針。妙勝封疆剪樹林。立破商君胡亂法。去來沒跡一身吟。

退酔恩庵

雲水江山我脚跟。殿堂幸有一乾坤。常住物便私車馬。酔恩塔主不知恩。

禪門寶訓云。圓悟謂妙喜曰。大凡擧措當謹始終。謹終如始。則無敗事。故曰。靡不有初。鮮克有終。昔晦堂老叔曰。黄檗勝和尚亦奇衲子。但晩年謬耳。觀其始得不謂之賢云々。因作偈題後云。三首

鐘樓讃兮猛虎途。衲子金言臨濟徒。擡搦與奪辨邪正。諸祖投機非一摸。

晦堂老痛處針錐。隱去彌彰惟勝機。明眼非元來即是。一休是正本來非。

但歸依楠翠庵禪。慚愧狂雲名利前。一夕一朝日月蝕。終分明白日青天。

贊杜牧

杜書記獨則天然。參得正傳臨濟禪。儒雅家風無一點。詩情婬色紫雲前。

戒參玄僧名利

迷道衆生劫外愚。人々涙不識窮途。誤官只願佳名發。眞菩提心一點無。

戒參玄僧智慧

大智元來迷道愚。未聞小智善提扶。一千公案繁蟾禄。學者江湖飯袋徒。

毀破曹洞惡見

曹洞今時無分別。與臨濟受用遊別。野老百姓眞家風。曹洞臨濟受用別。

畫三首

參禪九到又三登。明白洞然無愛憎。橋上下通名利路。羨看一錫一閑僧。

老漢知從何處來。高山境與塔崔嵬。水草心頭瘦牛體。應身行脚市天臺。

潙山來也目前牛。戴角披毛僧一頭。異類如甘一身靜。三家村裡也風流。

四睡圖

老禪饒舌笑中愁。虎尾搦來跨虎頭。月元不識寒山意。夢愕清光萬里秋。

聞聲悟道。見色明心。雲門拈云。觀世音菩薩將錢來買胡餅。放下手曰。元來是假頭。

二首

乖示韶陽三句禪。聞聲見色話頭圓。胡餅假頭誰買得。觀音三十二文錢。

雲門拈見色聞聲。衲子機鋒折識情。信口道膏底食藉。念頭起處太分明。

贊臨濟和尚

喝喝喝喝喝。當機得殺活。（惡魔鬼眼睛誰參透驢禪）明々如日月。

杜牧

誰記慈明老漢婆。無能懶性要吞蛇。工夫雪月吟魂冷。閑唱桑間濮上歌。

又

宗門活句阿房宮。六國興亡六國風。筆海詞林何所似。青天萬里月方中。

洞山三頓棒

這棒頭宗門大功。慈明之子是黃龍。明皇不識風流道。今夜馬嵬千歲風。

又

遭人罵辱長嗔情。是卽眞迷道衆生。無始無終黑山下。無明濁酒幾時醒。

扶起東福寺荒廢。蓋因美少年之舊交。甲子十三

看々慈楊禪正傳。誰來純老面門前。宗門潤色風流道。舊約難忘五十年。

又

大慈聖一是開山。建立魔宮救五山。東福分派南禪寺。千歲猶輝惠日山。

慈楊塔

不是平生好境緣。任他雞足月黃昏。誰氏風流我盟約。馬嵬宵塚舊精魂。

大惠武庫曰。有俗士投演出家。自曰捨緣。演曰。何謂捨緣。士曰。有妻子捨之。謂之捨緣。演曰。我也有箇老婆。還信否。士默然。演乃頌曰。我有箇老婆。出世無久見。晝夜共一處。自然有方便云々。余亦作頌記之。四首

愛孫愛子對妻歌。滅却魔宮猶入魔。貧着風流年少境。自然無一點溫和。

有僧眼白在妻胷。對客唯言我薄情。花前酌盡一樽酒。半醉夜深猶半醒。

醉鄉藥屋我家山。燭影三更對玉顏。夜雨無愁歌吹海。姮娥須是墮人間。

觀法看經眞作家。黃衣棒喝木床斜。糯苴元是我家業。女色多情加男色。

譚冷齋夜話。有褒禪山石崖僧之一件事。感而題之。

佛印重荷一百夫。住名道價滿江湖。石崖一箇野僧意。佛法南方一點無。

又

玉帶咬狗如土泥。路頭喧吠犬兼雞。天下老禪奈慚愧。獄中天澤世皆乖。

又

百丈絕食無人學。藥山兩粥鹿菜麥。但居門外弊衣徒。金襴道光開法席。

德禪啓主自贊

平生爛醉倒金樽。老後住持塵事繁。莫恃榮華竟成苦。江山水宿又風飡。

爲ニ悪知識ニ警策

因ニ憶ヒ玄都千樹桃。劉郎醉語許多豪。利名知識極驕レ功。堯帝土階三尺高。
吸ヒ美人淫水

蜜啓自慚私語盟。風流吟罷約三生。生身墮在畜生道。超越潙山戴角情。

又

杜牧嘉苴是我徒。狂雲邪法甚難扶。爲レ人輕賤滅ニ罪業。外道波旬幾失レ途。

又

臨濟兒孫不レ識レ禪。正傳眞箇瞎驢邊。雲雨三生六十劫。秋風一夜百千年。
盲女森侍者情愛甚厚。將ニ絶レ食殉ニ命。愁苦之餘作レ偈言レ之

百丈鋤頭信施消。飯錢闍老不ニ曾饒。盲女艶歌咲ニ樓子。黄泉淚雨滴蕭々。

又

看々涅槃堂裡禪。昔年百丈鍬頭邊。夜遊烟醉書屏底。闍老面前奈ニ飯錢。
森公乘輿

鬼輿盲女壓春遊。髣々胸襟好慰レ愁。遮莫衆生之輕賤。愛看森也美風流。

經水

夢迷ニ上苑美人森。枕上梅花々信心。滿口清香深淺水。黄昏月色奈ニ新吟。
美人陰有ニ水仙花香

楚臺應レ望更應レ羣。半夜玉床愁夢間。花綻一堂梅樹下。凌波仙子遶ニ腰間。
喚ニ我手ニ作ニ森手

我手何似ニ森手。自信公風流主。發病治ニ玉堂崩。且喜我會袖裏
聞レ鴉有レ省

豪機嗔恚識情心。二十年前在ニ卽今。鴉笑出塵羅漢果。奈ニ何日影玉顏吟。
九月朔。森侍者借ニ紙衣於村僧ニ禦レ寒瀟洒可レ愛。作レ偈言レ之

良宵風月亂ニ心頭。何奈相思身上秋。秋霧朝雲獨瀟洒。野僧紙袖也風流。
看ニ森美人午睡

一代風流之美人。艶歌清宴曲尤新。口吟腸斷花顏靨。天寶海棠森樹春。
文明二年仲冬十四日遊ニ樂師堂ニ聽ニ盲女艶歌ニ因作レ偈記レ之

優游且喜藥師堂。毒氣便々是我腸。愧慚不レ管雪霜鬢。吟盡嚴寒愁點長。
余寓ニ薪園小舍ニ有レ年矣。森侍者聞ニ余風采ニ已有ニ擲慕之志ニ予亦知焉。然因循至レ今矣。

辛卯之春。邂ニ逅于墨江ニ問。以ニ素志ニ則諾而應矣。因作ニ小詩ニ述ニ往日問ニ何闕之懷ニ。

且記今日來不來之喜云。三首

懷昔嶄園居住時　王孫美譽聽相思。多年舊約卽忘後。猶愛玉堦新月姿。

宵森夜々伴吟身。被底鴛鴦私語親。口約慈尊三會曉。本居古佛萬般春。

木凋葉落更回春。長綠生花舊約新。森也深恩若忘却。無量億劫畜生身。

狂雲集　卷下終

昭和六年二月十日印刷
昭和六年二月十五日發行

一休和尚文集與附
定價二十錢

佛教文庫

不許複製

編輯者　佛教文庫編輯部　代表者　謹本秋郎

發行者　東京市神田區一ツ橋通町二　株式會社東方書院　代表者　三井品史

印刷者　東京市小石川區久堅町一〇八　共同印刷株式會社　代表者　君島潔

發行所　東京市神田區一ツ橋通町二　株式會社東方書院　電話九段三八四二　振替東京六八六番

佛教文庫發行目錄

送料　定價十錢のものは二錢　定價二十錢のものは四錢
定價三十錢のものは六錢
御注文は前金のこと。切手代用一割增。

既刊書目　二十册

1 妙法蓮華經　足立俊雄譯註　定價三十錢
2 淨土三部經（淨土宗用）　三井晶史譯註　定價二十錢
3 淨土三部經（眞宗用）　蓮本秋郊譯註　定價二十錢
4 過去現在因果經　足立俊雄譯註　定價十錢
5 法句經　足立俊雄譯　定價十錢
6 碧巖錄　實禪鳳泰譯註　定價十錢
7 佛教和讚集　三井晶史編　定價二十錢
8 佛教笑話集　蓮本秋郊編　定價二十錢
9 佛像圖繪　秋山大圖　定價二十錢
10 佛教落語　醒睡笑　策傳智　定價三十錢
11 一休和尙文集　一休和尙著　定價二十錢
12 白隱和尙文集　白隱禪師著　定價二十錢
13 行誡上人文集　行誡上人著　定價三十錢
14 佛教概論　山邊習學著　定價十錢
15 天台宗概論　田村恭孝　山口光円著　定價十錢
16 曹洞宗概論　岡田宣法著　定價十錢
17 繪入釋迦如來傳（三世の光全八卷）　鷲尾順敬校訂　定價四十錢
81 繪入弘法大師傳（弘法大師行狀記全十二卷）　鷲尾順敬校訂　定價四十錢
19 繪入道元禪師傳（訂補建撫記全二卷）　鷲尾順敬校訂　定價二十錢
20 繪入日蓮上人傳（日蓮聖人註畫讚全五卷）　鷲尾順敬校訂　定價十錢

追刊豫告

（順序不同、每月十册以上刊行す）

維摩經　馬鳴菩薩著
勝鬘經　世親菩薩著
百喩經　世親菩薩著
起信論　馬鳴菩薩著
俱舍論　世親菩薩著
唯識論　世親菩薩著
天台四教義集註　蒙潤著
本生物語
選擇本願念佛集　法然上人著
和語燈錄　法然上人著
教行信證　親鸞聖人著
十善法語　慈雲尊者著
三部假名鈔　向阿上人著
一枚起請文講說　法洲上人著
歎異鈔講說
傳教大師文集　傳教大師著
繪入往生要集　惠心僧都著
惠心僧都文集　惠心僧都著
弘法大師文集　弘法大師著
道元禪師文集　道元禪師著
正法眼藏
興教大師文集　覺鑁上人著
日蓮聖人文集　日蓮上人著
日什聖人文集　日什上人著
慈雲尊者文集　慈雲尊者著
一遍上人文集　一遍上人著

隱元禪師文集　隱元禪師著
聖一國師文集　聖一國師著
大燈國師文集　大燈國師著
夢窻國師文集　夢窻國師著
澤菴和尚文集　澤菴和尚著
慈雲尊者歌集　慈雲尊者著
五山文學集
佛教俳句集
佛教和歌集
佛教狂句集
佛教說話集
一休笑話集
繪入親鸞聖人傳　鷲尾順敬校訂
繪入傳教大師傳　同上
繪入聖德太子傳　同上
繪入法然上人傳　同上
繪入役行者傳　同上
繪入行基菩薩行狀記　同上
繪入空也上人傳　同上
繪入慈眼大師傳　同上
一休諸國圖繪
西行物語
日本名僧傳
支那名僧傳
印度名僧傳
繪入清水寺緣起
繪入善光寺如來緣起
繪入眞如堂緣起

繪入醍醐寺緣起
繪入二十四輩圖繪
繪入西國三十三所順禮記
繪入法然上人二十五靈場順拜記
繪入四國四十八箇所順拜記
繪入京都佛閣案內
繪入叡山巡り
佛教文學概論
佛教美術概論
佛　教　史
佛像佛畫の見方
良寛和尚文集
桃水和尚文集
佛　教　入　門

望月信成著
良寛和尚著
桃水和尚著

佛教思想十二講
沙　石　集
眞宗概論
淨土宗概論
日蓮宗概論
眞言宗概論
山　海　里
私聚百因緣集
除　睡　鈔
佛教聖語集
佛教各宗概論

無住禪師著
梅原眞隆著
石井敎道著
高田惠忍著
小田慈舟
松永有見著
信曉著
住信著

落